



あめ

あめ
あめ
あめ

あめ
あめ
あめ

あめ

槐宮記ハ淳于棼ガ故事ナリ。陳翰嘗棼ガ夢ニ嫁シテ。榮枯得喪ノ理ヲ推スコト。沈既濟カ枕中記ニ一般。皆是寓言ト雖モ。蒙昧ヲ醒スニ足レリ。予モ亦取コトアツテ。三勝半七カ奇耦ヲ述ベ。名ツケテ三七全傳南柯夢ト謂。事ハ米谷山ノ楠南柯ニ起テ千日寺ノ南無佛ニ畢ル。文辭荒唐ニシテ君子ノ一嘆ヲ惹ニタリ。然レモ艶曲淫奔ノ脚色ヲ借ラスシテ。勸懲ノ微意毎卷ニ存ス。閱者ノ利害。彼ト此ト如何。因テ敷衍毎。卷ニ題スト云。

文化四年丁卯孟夏

飯台

簑笠隱居



秀雨
夜来花

雨夜来花

赤根半

笠屋三から

總目録

- 深山路の楠
- 木精の怪異
- 丹波都が傳
- 稚兒の妹夫
- 檜坂の倭人
- 大柏の權興
- 臥房の胡越
- 華浴の僑居
- 夜橋の驟雨

目錄終

- 真葛が朝風
- 百度の願事
- 夜半の月魄
- 羈旅の宿の上
- 羈旅の宿の下
- 主なき園の花
- 橋下の歌船
- 長町の五味上
- 同下
- 千日寺の証

一
巴
阿
芝

園
芝
阿



室
阿
阿
阿
阿
阿

阿
阿

阿
阿
阿

阿
阿
阿



持11
888

三七全傳楠柯夢

東都 曲亭馬琴編次

○深山路の楠

永正年中の事かといふ奈良の都に續井順昭なん云るやんと無人のまをかりけり其先祖を尋れば
 佛門より出て武家に交參法苑精衆の五戒を棄て兵家闘戰の六具を事とし建武の播亂に軍功振輝
 なりしかば忽地に家を興し大和半國を領してより累世武威をうしなはず文を備武を備たる家謀
 とも多かり順昭かく家富昌て薪ふと桂を科り米には珠を科り身に錦綉を襲ね口美味に飽て只管
 閑雅の遊興に耽りこのころ世に弄ふ茶法を好まて京師の北山なる金閣に倣に新に茶亭を造ら
 んとて名たる番匠等と召つぎへ龍門の瀧岩下の水蓮池鏡湖池九山八海石春日の社夕佳亭をべ
 て寸分も違はず繪圖に寫さし既に吉日をえらみ作事を興さんと議せられけり抑金閣と聞えしは
 應永年中の建立にして鹿苑院義滿公の別荘なり閣は三重にして七間の露盤に二尺八寸の風凰を
 載かし第一重を究竟頂と名づけて廣サ三間四尺八寸第二重は潮音洞と稱て東西七間南北五間半
 岩窟に觀世音と四天王を安置し第三重は法水院と呼て廣サ第二重に等しくこゝにも又觀音勢至
 を安置せりこれらを摸して作り出さん事なしがたきにあらぬと潮音洞の天井は楠の一枚板を
 もて造られたれば只この良材にのみ事缺て思はずも日を経る程に順昭頻に焦燥てある日老蒼を
 集會さても此匠茶亭の天井に用ゆる楠は得がたきに似たれども當國は連山波濤のごとく聲
 果りて樹木森然たりされば往昔より東木樵る山兒等が斧を入れざる日となけれど山のあらはに
 なりぬとも見はず人もかよぬ谷隘なきに生たちたらん楠の巨が求るはきなるも究てなしと
 はいひがたし翌より夥の樵夫をもて殘る隈なく索させよかまど仰けりそのとき蟻松典膳豊度と

七 夢 柯 楠

呼る、老臣列を出てまうすやう雷國添上郡米谷の山間は伊賀より通ふ順路なるが彼山の半腰より街道を南のかたへ木垂たる楠の大木ありその枝東南へさし出たると大約八九十丈に餘り樹の下常に闊して旅客晝も路に惑へりもしこの楠を挽し給へば四面五七間なる板どなすべしとまうすにぞ順昭ふかく歡びて筑紫瀧か陸奥の果なごにありといはし思ふに任ぬ事もあらんにかしる良材のわが知る山より出るとはとからざる幸なりなごて巖に間をざりしとくその楠を伐すべしと仰するに乳母子なりける厚倉二郎太夫友春を、み出て諒ける之怒特祠の梓樹を伐陸亭の古木を倒して怪異に遇へりま事は唐土の書籍に記して君もよくしりてぞ坐へき千歳を經る樹にわかならず木精ありこれを伐もの祟をうけし事は枚舉に違わらず是併樹の人に殊するにはあらで天その驕奢を憎給ふかとなげし彼米谷なる山兒等が斧を脱れ既に千載の大木となりてその木下閑旅客の煩をなざるを枝だに伐透さるは深き故ありぬべしかる事はいく度も思ひかへし給はば後の患なからん歎といはせもあへず順昭忽地氣色變りやをれ友春かばかりの事を汝にいはるべきの物の祟なごして怕れまごふは婦女子のうへにあるべまわが采地に生どし活るものたのれくが世を經るとみな是誰が庇りや既にその澤を蒙りその恩をしるとあらば物の用にたしましとぞ思ふらめまごて草木と非情なり汝由なき事をまうして衆人をまごはしど翌はつとめて彼山に赴きみづのら下知して楠を伐すべければ典膳は樵夫等に命をまらして用意せよとまごがしつし衝と坐を立て奥に入れば厚倉ふたしび諒るとを得ずまごに退けりかくて順昭は次の日の早旦に厚倉二郎太夫以下夥の從者を將て米谷山に到るに蟻松典膳は先だつて樵夫等を集合て伺候せりその時順昭馬より下りて床几に尻をかけた件の楠を向すれば枝葉參差と入りちがひて半天を覆ひ幹の太さは十歩にしてなほ繞り果べうもあらざれば莞爾とし

て左右を見かへり物と求るによつて集るといへど得ると得ざると其人の徳にありけれ又今茶亭を作らんとするに天この良材を興ふこれわがなり時をうつさず伐せよと下知するにいと老朽たる樵夫二三人たそるく領主のはとり近う出てまうすやう畏れれば面あたり聞は奉るべきとあり殿の御威徳をもてこの樹を伐れと宣するを固辭奉るにはあらねどこの楠は昔より神とし崇めて杣木樵る男も立よらず落葉掻く童も近づめず見そなはするをどく周に注連を引まといひて人の憩とをだに許さるるを無下に伐らまめ給はんにはかならず大やかなる祟りあるべし加旗幹は石よりも堅やかに見えて軟く斧もたちいひじ廣き大和の山々を索んにこの樹に劣らざる楠のなきともあるまじければけふより百日を限りて放給へわかきものをも伴ひて外を索んべしとまうすにぞ夥の樵夫等も三人の翁が後方につきてもろ共るから口説は順昭聞もあへずかやくとうち笑ひ汝等草鞋大王の故事を聞ずや腐たる草鞋も崇祀ば靈驗あり愚民これを悟らすこの樹の歳經たるを奇として還み神とし崇ればこそ鬼魅罔兩の栖とはなるなれ汝等伐らばどく伐れもしわが命に從すはかゝるべきぞといきまごつし刀をすらりと引抜て注連を丁と切れば左右へふつとどかれ飛で幣もばらりと散亂せり樵夫等この形勢を見て戰慄ささらばまご枝をろしゆとんよて五七人楠の杣に懸上り枝へ長やかなる麻索を結着て八方へ引わたしたのく斧をふり揚て一二の枝を丁と打ば斧と閃りと反かへり少し剛られたる木皮の間より鮮血さつどほどばしりて樵夫等が面上にふりかゝると見れし上なる七人瞑眩てまばまもたまらず挫と墮れば下なるものは壓に打れ或と斧にて手足を傷られ半死半生なるもの十餘人墮たるものは即死せりさすがに勇順昭もこの爲体に舌を振ひ思ひたゆたふ氣色なるを二郎太夫早曉得て聲を低うしかくあるべしと思ひつるをもてまごのふ申せしを用ひ給はず罪なき樵夫を殺し給へり過

て改るに憚るとなかれどか今と是までなり努思ひとまり給ひねへ諫るに順昭は一言の回答もなく只願に嘆息しやがて馬にうち乗て既に歸らんとしたりしが蟻松興膳をちかく招き樵夫等が事その妻子の歎も不便なり死たるものにい棺を與へ傷きたるものには藥をどらせよと聞えれきて轡づらを引きかへせば従者等列を整へ草葉の露を拂ひつ、奈良を差ていそぎぬ領主さへかくのごとくなれ樵夫等とまばしもこゝあわらんとのおそろしくて或はその友の屍を扛き或は病るを扶掖てたのが家に歸りけるこゝに城下郡佐保庄なる柴賣に赤根半六といふものありけり先祖は楠正勝譜代恩願の家縁なりしが明德二年二月のころ正勝千早の城を陥て十津川に漂流せし後は大和なる親族をたよりて佐保庄に住家求しより今の半六に及びて既に五代久しく片山里に零落し柴を賣て活業とすれば文學に練き身も朱買臣が青雲の志しを羨みいかにして舊の武士にならばやと思ひながら家貧しければ發跡よすがもなく妻を娶りしより十年にあまりてその名を輪篠と呼べるがこれも由緒ある武士の浪人何がしが女兒にてとやくより孤となりいくその艱苦に人となりたれば物の哀れをもよくまりて心さすの正しき事は富るかたにもたち勝り夫を諫め子に教るなき女子にはいも楠にて一子半七も今茲はやう十才になりつこの見母にや似たりけんその姓の怜利はさら也容止端正にてふり亂したるうなひ髪も何となく匂やかに垢つきたる針目衣もたのづからひなびす柴賣の兒にいとをしとて親も疎さもたへさるはなかりけりしかるに赤根半六はこの日樵夫に駈僱されて米谷山に到りはからずも杪より落たる者に蹴仆され株にて腹を打しかば二三間轉びゆきてくま竹の中に臥たり樵夫どもは只一足もはやく歸らんとて慌忙し程に半六がくま竹に覆ひ躲されて臥たるをしらずして歸りにければ遂に半日あまり昏絶て物の善惡をわきまへず日も暮れ夜も深ゆくまに霜を過る山風に楠の葉末の露吹

はらひばらくと降かれば一滴の白露半六が咽喉に入りて俄頃にて甦生しことをもこゝはづ地なるらんと惑ふ心を推鎮めてつらくけふの事を思へば打れし時に昏絶たるを樵夫等が情なくうち捨て歸りけんさても危き命拾らひぬとひとりとちてやをら身を起せば耳に馴たる溪水も何となく凄く月さへ入りて路もわかぬばますく呆れて茫然たる折しも誰ととまらず楠の下にうち相語聲すれど野干玉の闇なれば咫尺の間もたいて見えずあやま彼處にもわれに等しく捨られたる人ありけんとして既に呼びかけんとせしがなほ疑ひてその相語を聞くに一人がいふやうにかにわか神力を見たりや縦令主この國中の人を竭して來たるとも何程の事をしいだすべきとほこりに聞ゆれば一人答ていなくさはいひずもし知れるものありて瞿目して足下を盤らせその根に鹿尾菜の煮汁を沃ぎかけしかして後斧を入れなほ今の廣旨もかひなからんといふにはじめの一人いたく驚る聲音にてやよみわそき息とはいはぬものを事のこの期あ及んにて天なり命なりもし縁故をきりてわれを斬ものあらば終には活るところし思ひしらせとんといふを一人聞もあへず阿々ど冷咲ひしうねきとをいふものかなみづから天命なりとあらば怨ずとも止ぬかしと回答てその後之音もせず半六これを聞て思ふやう三輪山の神木に千載經る杉ありとは世の人のしる所にして今みわそきと呼かけしは三輪の杉にて彼處の木精この楠が歿せらるるを防るなるべしこはよき事聞ぬと歎びその夜の明るをまちて山を下るに思ひの外健ふて足の運びも常にいかはらねば只管に路をいそぎて佐保の庄へ歸りけるとぞ

○木精の怪異

半六が妻輪篠と米谷山あて人夥死たりと傳聞て安き心もあらざるに日暮るに夫と立もかへらざればいよあやしみて一子半六を走らし彼處と問すれども定かにしれるものもなしあま

に思ひかねて、御門方に立望つし明ゆくころより里人を無導とし彼處に索ゆくべしとて飯も常よりはとやく炊きその準備してありける半六恙なく歸りしかば嵐の後に花をながれ雨夜に月を見る心持えてや、落を撫れろし半七としもお夜べよりの心つくしを語り出て歡ぶと限りなくいづ地にか宿りたまひたる歸らじとならば人に言傳ても聞え給ふべきに寢よといふても半七が共に目睡であかし侍り安堵て後になか／＼に恨むも心やりなるをあまうな問給ひぞといふ半六は只茫然とうち咲つ、草鞋脱きて、地爐の邊に坐を占さのふ直に歸らざりしは如此々々の故也とて墮たる人に蹴仆され息絶てありし事一五一十を物がたりさて、ゆふやふ常言に、過の功名といへるがごとくわれはからずも身を立家を興すべき時を得たりその故は昨夕米谷山なるこま竹の中に臥して楠の木精と杉の木精がうち相語を聞に彼楠を切らんには、整目をもて木精を整らせ鹿尾菜の煮汁をその根に沃ぎかくるときは斧を入るゝに容易とせいでいへりわが先祖は弓馬の達人なりと聞るが鳴弦益目の射法家に傳へて今に興はずわれ彼楠を斫て領主の所感に遇は、絶たる家をも興すべしこの事人ももらし給ふなと密語にぞ半七は父の怪談に膝をすしめて顔うち靡りたるに輪篠しばし深念して木精のみづから滅ぶべきよしを聞せしは、怪しくも待るかなしかいわれ領主の威勢をもて伐とかなとざるをわづかなき言をたのめて爲損じ給は、世の胡慮どなるのとならず罪得がましき所爲ならずや又爲課給ふともその崇わらんには、が身はさら也半七がゆくするも不便也又崇なきにもせよ先祖は楠、このお仕て譜代相傳の家縁なりしと日來いひ出給ひながち心きたなく榮利を計りてさすがに古主の名にし負ふ楠を伐給へんは名詮自性の理とやらん末榮ふべくもれはれず智慧才覺にも及がたきは世の人の貧福也と思ひたえ時を待給はんこそ遙に心安からめまげて思ひとゞまり給へといと賢くも聞ゆると半六聞も果す頭を

うち掉物を思ひ過すは婦女子の平生なりいにしへの人も天の與るを取ざれば却て禍を受とこそいへ尋常にして彼樹を伐らば崇を棄るともあらん法をもてするときはは怖る、に足らず又楠と古主の名氏なれば伐らじといふといふと愚なり世に久米氏に仕る人は主の名氏也とて米を食はでやとあるかくいふもわが身ひとつの爲にあらず御身ごとく嫁りてより既に夥の春秋は経れど身には襤褸口には糞それを懶しと思ふ氣色も見せ給へぬわが子ながら人なみに勝たる半七を世にもえられぬ深山木ともし果ん事いとをまからずや婦伶俐で牛賣そこなふとぞいふなるか、らん筋は御身がしるべきにあらす何事も打まかせ給へと回答て聽納べうは見にざりし言や信言美ならず勇言信ならず思なるは良藥の苦さを憎み才あるもの亦人の諫を阻事多し輪篠は日來より思ふ事をば思ふがとくよくもあしくもなし果る夫を今も諫かねて袖に露漏る言の葉もたらはぬこのみとばかりにまひてはふた、び言ざりけりか、りしか半六と次の日奈良に赴きて藤松典膳が宿所に呼門これは佐保の庄なる赤根半六と呼る、もの也密お聞に奉るべきことありて參れり願くは對面を許させ給へといはせければ典膳聽て呼ひ入れてその故を問に年六は膝行頓首し領主近會米谷の楠を伐らせんとし給ふに怪異ありて果し給はずと願ひするは實なりや僕、極く彼楠を伐て進ら、べしこの事申さん爲に推察いたせむといふ典膳これを聞て冷笑ひ洩いかばかり膽の太くてかゝる戯言をまうすを彼楠を伐らんとしつるものい立地み命を隕せり是木精の崇なり博士の説に木の精を彭侯といふよし白澤の圖に見えたりとぞもし命に缺替あらば許すべしと回答するに半六容をあらためてさて、僕が身の賤きをもて食言とし給ふ歎いかで貴人に對ひて故なき事をまうすべし千載經る樹あり木精ある事をえり給へどもこれを伐るに法ある事をしり給へば勞して功なきのみならず夥の人を傷ひ給へりまかるあわが家不思議に木を伐る

法を相傳す領主の御威勢は肩を比るものもなく百万の強敵といへども肩と支給はざる御身を
もて只一様の楠を研果さず世の胡虜となり給はんは傍痛し僕世々この國の民として妻子を養
ふとみな領主の賜也と思へばこそ命を的にして寸思を竭さんとするに用られざるは不遇なら
めせひみ及はずと眩きつゝいふ本意なげに出んとせざるを典膳忙しく呼びとめし汝がいふと
くならば莫大の忠節なりまかれども究てなしがたき代なればかるくしくも信せざりし彌く
爲課すべきやと問は半六莞爾として坐に復生とし活るもの誰か命の惜からざらんもし本精の崇
を惹げ爲課すといふ共、僕立地に死すべし又爲課せずは罪せられんかく危きをしりつゝ申すを
もて虚實を察し給ひぬと憚る氣色なく答ひかば典膳やうやくに納得し主づ縁由を聞えおげんと
て半六を退かし直に出仕して首尾を述しかば順昭大に歡て日れも怒にして己なん事を祈
をしくは思ひながら眼前なる崇に怕れ重て彼樹を斫れといふども衆人承引じとて黙止せしが半
六とやらんが訴訟聞くもほど潔しまづ彼が隨意はからとして成ならざるを試みいよ、爲課せ
たらんには一廉の賞錢をとらずべしとくくといそがせば典膳うけ給はりて宿所に退きふた
び半六を呼出して領主の仰を説まらし汝が一世の浮沈こゝにあり思ひ悔りて爲損するとなかれ
事成就せば賞錢は望の隨なるべしといふ半六額つきてこれを聞僕元來賞錢を願はず先祖之河内
の正勝に仕へ數代武夫なりしかと楠家没落ののちはいと寒々しくなりて祖父のときより柴を賣
活業といたせども更に武士の志をうしなはずあはれ此度の恩賞に當の武士となま給はば先祖
への孝身の面目これにます事いひじもしその期に至りなばよきに執事給はれかしと希へば典膳
點頭てその事は仔細なし汝いづれの日にかの樹を斫るべきと問は半六答て明日より、日が間は
齊して法を行ひ第八日に至らば事成るべしまかれども件の大木を僕一己みて斫らば徒に日を

費さん歟既に斧を入れてその崇なきをしらせ進らざる後は樵夫等あ仰て斫らせたまへといふに
典膳しばし優てさらば第九日めに日れ樵夫等を將て彼山に到るべしかならず時日を違へなど
互に固く約束し半六は暇給はりて那のが家路に歸りけりさる程に赤根半六は次の日より齊し
て養目の射法を修め第七日めに至りて鹿尾菜の煮汁を桶に汲入れ米谷山に擔ゆきて楠の根に沃
ぎかけさせて詰旦斧麻索なぞを用意してふた、び彼樹の下に到れば奇なるかなさしもの大木一
夜の中に凋て落葉堆高く散積り椽の間に大やかなる穴出来て蟬に等しき蟻も數限もなくそ
の穴を跋出て皆悉く死してあり半六はこの形勢を見て且怪し且歡びさてはこの楠の木精の蟻
也けり楠の古木には樟腦を生じて虫の考となしといへるは虚言にてありける也今は心易しとい
とりこち落葉を掻き集つゝ用意の火繩をさし着て死たる蟻を焼に殊さら大なる蟻一隻なほ死も
やらでありければ前夜三輪杉と相語へるは這奴なるべしとて斧もて頭を打碎さるるともに灰と
なせば烟高くたち昇りて西北を斥て空引つゝ半天にして消失たり正に是蟻の思ひも天に昇りて
冤を天帝に訟ると世の常言も故あるかなむかし董昭之は蟻を助て福を稟又桓謙といふもの
ハ蟻を殺して禍にあへるよし載て搜神記に審なり輪廻應報の理は蟻といへども漏るとなし
されば半六この樹を切て一旦身を立るに似たれと終に南柯の夢と覺てその兒半七愛苦に迫り父
よ母よと鳴袋虫の篋屋が軒の木からしに花も紅葉も難波なる身の上をいしを謠る、これその縁
起なり

○丹波都が傳

そのとき半六の只管雀躍に堪ず翌は約束の日限なるに日れまづ一枝をえろまねきてこの奇特を
示さずばその功他人を奪れなんしかまかなりといひどりちてさらくど上り街道のかたへ

さし出たる枝に索を着て木の上に身を固め腰なる斧を脱出きて丁々はつしと所程に思はず斧の柄を脱て麓へ礎と落ち折しも伊賀路より大和を経て山城へ出るにやあらん脊に裏の袂も小妻木綿のやう破れし槍の笠に竹の杖木立いぶせき山路をたざるく来る盲人ありけり親子と見え只二人年まだ七ツか八ツばかりなる小女兒ふ手を引れ谷より木垂玄楠の下を過らんとする處に半六がどり落せし斧彼盲人が笠の上に閃きかきり頂をさつくと研折れ叫苦と一聲叫びもあへず俛に仆れしかば女兒は周章つ、釜さまなうと叫ぶる原に聲も立つ居つせんすべもなく見えたりけり 浩處に輪襪は猛き夫を諫かねわきてこのとの覺つかなく午飯運ぶに假托て三里の路をはるくと半七を伴ひてはしなく麓に望か、り吐嗟と走りよるべなき旅客が血に塗れて生死も定かならざるをいかにせんとて泣叫ぶ稚き人の心の中思へば見れば痛しく彼三峽の夜の猿腸を断ばかりめて共に濡せる袖の隙より持る割籠をどり落せば半七もかひがひしく右左りに立繞り濟んとするに藥はなし心つきなく輪襪が向う上る崖の樹上にて枝をれるすは夫なりさてはと曉ばいとくなは涙ましくも悲しくて此首の二人の聲を揚げが夫なう釜さまなうとく下り立て旅客を救ひ給へと呼びかくる聲の響ひて手にとるとく聞けしがば半六ますく心驚き件の索にどり携りて梢ながらに下り來たりこの爲体を見て色をうしなひやをら盲人を抱き起して候に着たる吉野袴より用意の定心丹をとり出しその口に合すれば輪襪はもて來たりし土瓶の温茶を飲せなごしさまく介抱せし程に盲人やうやく息ふさかへせば女兒は涙をかき拂ひやよ釜さま心地といかにれとするとふをまるべに傍寄せたさんは恙なかりしか誰人ともわさまへねど八里遠き山路にてかゝる介抱を受ると世に有がたき庇なりといふ言毎に息されて苦痛に堪ず見えければ半六はその耳に口をさし着いかに旅客われは保佐の庄にて赤根半六と呼ぶ、ものこ

しめるに領主の仰によつてこの峯なる楠の枝を今にうさんとするに思はずも斧の柄脱て傷ま事 逃なれば御解に由なま心つよく思ひ給へど宿に伴ひ歸り療治して進らせん何國の人を名告給へど問も面なき風情なり盲人苦まき息の下に潜々と落涙しまたぬ大和路にたどり來て仇にもわらず恨もなき人の手斧に命を隕もみな前世の惡業ならめわが身は原鎌倉の管領家扇谷殿に仕へ丹波太郎孝基といひしものなるが故あつて退糧し世わたる楠のなきま、に夫婦密に談合えてふりにし跡をつぎぬふの大和物語にむらゆきも難波の浦の蘆荻があしかる縁しと思ひたえ女兒れさんが三才のとき飽ぬわかれに妻を去富貴の家に給事發跡る日もあらばふたうび環會んどて華洛へ上せし次の年わが身はからず眼病を患ひ遂に善者となりしかば稚き女兒を養育に便者なければ髪を剃りかきりしとさ暗たる四すぢの糸に繋ぎとむる命かひなき琵琶法師丹波氏をそのまゝに丹波都と名告て伊勢に赴き北畠家の城下に足を駐め住居すると五年のまゝり六年の今に及べども別れ妻はいかにかまけん音耗なきも 理なりわが相摸より移住て伊勢にありともしらするべししらせんと思へど彼も又わづ地にかあるやらん華洛といひしを心めてに女兒れさんに手と掖れ引折て短き旅衣妻に逢んと思ひたちて竹の都をまごひ出し只一すぢの竹杖も折れて死出のやまと路に露と消なんへかなさよとてもかくても此瘡あて存命べくも思はねど恩愛のやるかたなき泣かじとすれど蟬の息の内より感ひぬるの只この女兒があれはなり八才といへば年弱にて十一月七日の出生丹波太郎孝基が女兒おさんと父が手づから書つけたる臍帯の今もなほ女兒が項に掛さまで護身囊の中にあり又日が脊負し 袂包は異國傳來の樂器にてその形阮に似たれと阮なす三條の線とかけて弾に千萬無量の音を發す鄭聲なれと 味あれば只私に三味線と名づけ年來秘藏するといへば世に稀なれば人もまらされば夫婦が別れし

ときこの三味線の撥を拆再會の紀念とせしその片割のころにあり親のなき子と傳され人の情に生育は戀しゆかしとれもひ子のねさんが母に名告わふ割符ともなるべければこれは女兒にとらせたま望がましき事ながらこの三味線はわが骸と共に瘞て賜給へもし後の世にこの樂器の行る日もあらば朽ぬ名のみを呼れんといひ遺す言の葉は今も大和の城下郡三味田の里に佐保の庄丹波市と呼ぶ三の郷を三條の線に象りしは是の縁故なるべし輪篋聞も痛しくて世も形なきものゝ限りわれに増す事なからめと思ひしよりびるはかなきは人さまの浮世ぞかゝる過とはいひながら盲し人をわやにくに斧もて殺すは仙人の基に見惚れつゝ幾世經し古事とは逆にてこれも木精の祟かと思へば人のうへならすよしやこの儘果給ふとも女兒御は吾儕が子とも嫁とも守育てなき父の跡世にしある母傍に環會し侍らん塞々しけれわが夫も由緒ある人にて侍るなるに一子の半七も今茲と十才になりぬればわが子の愛に人の子を思ひくらべて痛しやこれも過世の因縁なりせば成長後半七にねさんごのとやらんを妻あはしてこの過を償ひてん宛を散て成佛ぬれと聲も涙あかきくれていひ慰れば半六も臉をしばたさく輪篋いしくもいひつるよわれこのねさんを養育て半七が妻とせずばこの身も終に刃に伏し汚名を路頭に遺すべしと思ひ定先し誓言に丹波都はいと頼もしく思ふ心をへばえに岩間の石澗に溢れし鮮血はど、まれと留先かねたるこの世の名残れさんはいと泣沈み目も見え給はぬ妻さまのひとりばさこそ便なからめわが身もろ共冥土とやらんへ伴ひ給へどかき口説聲のみ聞や今般にも見るとかたき女兒の貌胸苦しさを思ひやりて引退る輪篋が勸る念佛に半七もうら悲しさに堪かねて親子が掌と聲とを合して彌陀佛と唱る中に睡るがとく丹波都は猝断てけりげにや世路の旅に似てゆくも歸るも別れては老るもしらぬも終の友後るゝも先たつも夕の煙とた、ぬはなしは

○稚兒の彌夫

かなきものは命こざる程に輪篋はねさんを賺して老らへて半七と、もに伴ひかへれば半六は日の暮る、を待て密に丹波都が屍を扛もてゆき佐保の願成寺に葬つ彼が遺言にまかして三味線を其處に埋か跡町等に吊けるとなん

蟻松典膳豊度は巽に赤根半六が米谷の楠を斫らんとひま事なほたばつるなくはあれど既に約束の日子にもなりしがは夢の樵夫を將て彼山に赴けば半六は先たちて山の半腹にこれを待うけ易く爲課せたるよしを聞けしらしらしてもろどもに樹の下に到るにさまもの大木俄頃凋然と落葉えたるを一二の枝を研れどして幹にもどころ／＼斧の刃を入れたりけり典膳はこの形勢を見て且怪み且歎び半六を見かへりて人の才あると才なきとは貴賤をもて論じがたし野夫にも功者ありといひ其許の事なり義の廣言空しからずして領主も本意遂給ふ事吹舉せしわが身も子てこよなき面目也とて只管嘆賞して曰す半六聞て聊も誇たる氣色なくこはみな領主の御威福ふよつて思ひし隨に成就せりなほこのうへの庇にひはじめ願まうせし事を忘れ給はでよろしく聞けあげ給はるべしといふに典膳點頭てそはこゝろ安かれともかくもして其許の夙願を果させん事わが胸中にありと應じらば半六ます／＼阿諛さて樵夫に對ひて見らるゝ如く己既に法をもて木精を滅却しその枝をたらしその幹に傷つけて崇なきをしらしたればたの／＼力を戮して挽給へがしといふ樵夫等は面あたりはこの奇特を見し事なればさなる共これこゝろ安堵してしばしは程は稱讚して鳴も曰すこの日を手斧はじめとして件の楠を挽に七間四面の板二枚五間四面の板四枚を得たりとの餘材梁とし棟とすべきものは枚擧に追わらず順昭縁故を聞て感悅斜ならず只この一木をもて茶亭を造らしこれを齋雨堂となづくその號南柯の蟻の故事に稱るぞ不思議なる

(蟻王の宮殿に額あり霖雨室の三字を寫したるよし授神記に見ゆ)有在間に典膳は頗に半六を吹
 擧し彼が先祖を尋るに楠正勝の老嫗たりしとぞ子孫凋落て五世に及ぶと以へざるも今に武士の
 志を喪ず弓馬の興義もをさく家に傳へ舊の武士にならまくはしうはわれど家貧しくてさる
 よがもなし縦家に百萬の財を積とも金銀之失ひ易し此度の恩賞に之握の米にもわれ領主の祿
 を給て家臣の數も入る事あらば本望なるべしといへりげにその面魂物の用に立かねまじう
 見にいにおはれ莫大の御庇をもて戦を執塵を牽し給ばやと信だちて申にぞ順昭氣色よく語い
 て能を翠士を薦るは汝が職なり功あるものをいかで賞せざらん事の序あらば召出すべきにまづ
 當坐の賞金をとらせよと仰けるまかるに嫡男吉稚丸今茲十歳になりたまへば鎧の被初あるべし
 とてつばらその用意をせらるるに年果の下旬に及ひて茶亭も成就またりしかば順昭是彼慶賀
 の折をもて赤根半六を召出し五十貫の新地を賜りて郡山の北方なる五條の村主を命せらるるか
 て半六は年來の宿志を遂て領主に拜謁し丹波都が女兒れさんを妻の姪と稱輪縁半七とにも
 將て五條の宿所に移り住み手馴し斧を刀に換て一郷の成敗を管り秣の運送など點檢する身の務
 とし日毎に奈良へ出仕する程にいと下さまなる司なれどその郷にして威勢ありこの体爲に左
 保の郷人等はさらん親も疎もこよなき立身なりとて羨ぬ夫渴するもの水を求めるに水を得て飽
 どさは更に湯を求め湯を得て飽とさ酒をねもふ是人慾の愼がたき所なれば半六既に望足りて
 領主の家臣となるといへどもその職役の卑を厭ひいかにもして近臣の列に入りなは時を得て政
 事に與ることもやと暇ある日と耕しく典膳が家に交加彼人の爲に志を運て冬は障子の隙を張更
 て寒夜に爐の火を吹夏は屋裏なる蜘蛛を搔拂て炎天に井を曝し奴僕のとく奔走してその寵に媚
 たりければ典膳ふかく歡びて二なき人にも思ひけるこの典膳が妻の名を盛浪と呼て家子曾太郎



九才女兒園花四才にぞなりぬ凡人子をもつときはその愛他の子も及すが人情の常なれば典
 膳夫婦も半六が兒子半七が臍鬪て心さまいと怜悧を傳聞て折くそれが安否を問に半六の既に
 便宜を得たりと歡び信だちて答けるはえらせ給とく某原艱苦の中に養育たれば子を教ふる事も心
 に任せず今の身になりて子をもよき事を見も習し君の爲自の爲に文學武藝もその心がけな
 くてはと思ひながら即を擇との容易からねばなはれたのがまゝに生育は久後とてもればつかなし
 男の童は走まひりも健輕にて召仕給ふには老たるかたに勝るともあるべし折節は半七を呼し給
 ひて茶のかよひなぞつかまつらせたひなば彼れが爲に大なる僥倖なりと只管媚ていひこしら
 へ次の日半七を將て典膳が第に到るに曾太郎はよき陪侍得たりとうれしみてそのはどりを離さ
 ねば典膳夫婦も又憎からずもてなしの食事なぞも曾太郎ももるもにさしてわが子のとく慈
 みぬしかるに輪篠はその志夫に似ず半六がしぼく奈良へ行て典膳が家に止宿するを傍痛く
 思ひてある日夫にいへりけるわが身幼かりしとき父が日かき人にも教給ひしを聞侍りたる
 に君に仕るもの公にあらざれば執權の門に到らずとなんまかざる蟻松ぬまは一の老臣にて
 れいするを日來親しく交加給ふすら心あるものはなめげとて爪弾し僻る人と猶しと予思ふめ
 る何事も新參にてれいすれば木にも附ず草にも附ず只信やゐにその職分を守りてこそ在すべき
 に年齒ゆかざる半七さへ彼處へ立入らし給ふはいかにぞや稚きものは心つきなくて人の怒を惹
 出す事も多かりかゝる筋は御佛に對て經を説がとくわらわが申すではあらぬぞればつかなさ
 に聞ゆる恐惶みづからころろと給ひねといふそのいふところ理あれば半七は少しはぢらひた
 るれも、ちにてその後半七を奈良へ將てゆかず典膳夫婦はかゝる事をえらで彼方より迎ひた
 るを遣しなぞすれば輪篠はよきに回答てけふは灸し侍れば參かたし翌よりは手習らひ讀書の入門

さし侍ればといひこしらへて奈良へ遣らす又おさんにも半七としもに手習ひさせしが子人の子の分別なく愛慈むほかにおさんは半六夫婦を主の如く親の如くに敬ひ仕て孝順更お比なし輪はこれの學止を見てふかく歡び言の叙あるときは半七おさんにいふやう御身二人かくひとつに生育事過世よりの縁しにやあらん日來いひ聞しつるとく久後はかならず夫婦とすべしおからば半七は彼が孤なるを憐みおさんは又わが夫なりとおもひて侮らす互に睦しうし給へといひ諭すに二人の童はよくそのころを得てあらそひ逆ふとなく出居も諸共にして外の童と遊ばす只一ツの果を得ても割て二ツにせざればたうべすこゝをもて近隣の人もその故をしりてげに容姿の端正なると心さまの伶俐といづれ劣も勝もせずこはよき一對の夫婦なりと稱る毎に二人の顔を報して物の陰に射れけりかくてその次の年の秋のころ輪篋が左右の腕俄頃には腫て苦痛に堪す病てより七日が間湯も水も咽喉に下らず心持死ぬべくおぼえしかば枕方後方にありける夫と二人の童を見かへりさて半六にいへりけるはわが身此度の病着は愈べうもればは侍らすつらつら來しかたを思ひつゝくるに病つきたりしは去年の秋御身が米谷の楠を斫らんとて登目の法を信しはじめ給ひたる日に侍りこれやこの身に報ひけん左右の腕の疼めるは一二の枝を斫れどせし崇をわが身一ツに棄て夫兒のうへに恙なくば是にます僥倖なしまかばおれなからん後の心がりり半七おさんが事ぞかえ願くは輪篋か生の内に妹脊の縁しを結して儀式は整すと面あり歪としてたびねといふ半六聞てうち點頭楠の崇ならんと思へるを究て御身が惑ひなれや半七におさんを妻おはする事は仔細なししかれどもおさんはまだ十歳にだも止らず半七もや十一歳の童なればゆくす通けき事なれど御身が心やりともならばそゝもかくもすべし折しもあれ今日は黃道吉日なり只今彼等に歪させなばおさんが父の亡魂もよろこばしうこそ思

ふらめ去からば御身が命の延る功德是にます事なしと應て俄頃半七に袴着せおさんに衣被更さして輪篋が枕方の左右に對ひ坐らし焚婢に土器の用意さし熨鮑に銚子とりそへて二人が問ひすえたりそのとき輪篋のやし身を起して日が子とれさんを見かう見涙を淋然と落したるが又莞爾とうち笑て宴に似つかとしさ夫婦なり玉椿の八千代までも陸もかたらひて子孫夥儲給ふべし言わらためていふにしもあらねき過にもせよいぬる秋丹波都の日は日が夫の斧をもて命を隕さしたればおさんが爲には冤家なれどその過を償んとて貧きとさより養ひとり今年半七に妻おはすれば半六おのは丈翁なり將良育の恩高きを省て等閑にな思ひ給ひぞ半七の亦義理ある妻といふを忘れず久後いかなる事ありとも生涯おさんを見捨給ふなかくいひまらするとも成長て思ひ忘るし事もありなん互に忘れ忘れらる誓ともなるべければ今おさんが護身齋と半七がどを交易て周離さすは妹と夫の誠を神も憐み給はめ殊におさんい半七が年才とその名に象りし十一月七日の誕生と爹々の手づから寫し給へる臍帶もその裏にあり半七と又おさんが名にし負たる三月のまかも三日の誕生にてわが書つけたる臍帶と護身齋に納てあり時にとりては是も又奇くも故ありげ也女の妬ころなきは口の拙きをかきとぞ貞女義男の故事と賢き人の記しにける書見てもしり給へ他し人お心を移して母が遺言に悖るものは不孝の子不義の婦なりよく臍帶の臍をかためて思ひ悞給ふべからず是は是夫婦がうへの誠ぞかしおさんは又三才のとき別し母御ありと聞ば神佛に祈念してひかれよるべは三味線の撥を割符に環會親子の名告し給へよ半七も力を費して華路へ上る序あらば外ながらかの人の往方をよろしく聞定めその夙願を果さし給へ忠孝の道はいふもさら也聞ゆべきのみ命長くて諸共に五十年忌の季までも日がなき後を吊給は草の原にていかばかりうれしめと思ふにも名残をしやとばかりに掩ふ

さし侍ればといひこしらへて奈良へ遣らず又記さんにも半七どもに手習ひさせぬが子人の子の分別なく愛慈むほかにあさんは半六夫婦を主の如く親の如くに敬ひ仕て孝順更無比なし輪縁はこの舉止を見てふかく歎ひ言の叙あるときは半七記さんにいふやう御身二人かくひとつに生育事過世よりの縁しにやあらん日來いひ聞しつるとく久後はかならず夫婦とすべしと云はば半七は彼が孤なるを憐み記さんは又わが夫なりとおもひて侮らず互に睦しうし給へといひ論すに二人の童はよくそのころを得てあらそひ逆ふとなく出居も諸共にして外の童と遊ばず只一ツの果を得ても割て二ツにせざればたうべすこゝをもて近隣の人もその故をしりてげに容姿の端正なると心ざまの伶俐といづれ劣も勝もせずこはよき一對の夫婦なりと稱る毎に二人の顔を親して物の蔭に射れけりかくてその次の年の秋のころ輪縁が左右の腕俄頃には腫て苦痛に堪ず病てより七日の間湯も水も咽喉に下らず心持死ぬべくればえしかば枕方後方にありける夫と二人の童を見かへりさて半六にいへりけるはわが身此度の病着は愈べうもればは侍らずつらつら來しかたを思ひつゝくるに病つきたりしは去年の秋御身が米谷の桶を研らんとて發目の法を信しはじめ給ひたる日にて侍りこれやこの身に報ひけん左右の腕の疼めるは一二の枝を研れとせし崇をわが身一ツに棄てて夫兒のうへに恙なくば是にます僥倖なしまかはあれなからん後の心がしり半七記さんが事ぞかま願くは輪縁か生の内に妹脊の縁しを結して儀式は整すと面あり盃さしてたびぬといふ半六開てうち點頭桶の崇ならんと思へるに究て御身が感ひなれ半七に記さんを妻あはする事は仔細なししかれどもあさんはまだ十歳にたも足らず半七もや十一歳の童なればゆくすを逃けさ事なれと御身が心やりともならばそゝもかくもすべし折しもあれ今日は黄道吉日なり只今彼等に盃させなば記さんが父の亡魂もよろこばしうこそ思

ふらめ去からば御身が命の延る功德にます事なしと應て俄頃半七に袴着せあさんに衣被更さして輪縁が枕方の左右に對ひ坐らし焚婢に土器の用意さし與鮑に銚子とりそへて二人が間あすえたりそのとき輪縁はやし身を起して己が子と記さんとを見かう見涙を淋然と落したるが又莞爾とうち笑て宴に似つかとしさ夫婦なり玉椿の八千代までも睦みかたらひて子孫夥儲給ふべし言あらためていふにしもあらね過にもせよいぬる秋丹波都どののは己が夫の斧をもて命を隕したれば記さんが爲には冤家なれどその過を償んとて貧きときより養ひとり今半七に妻あはすれば半六のは才翁なり將良育の恩高きを省て等閑に思ひ給ひぞ半七の亦義理ある妻といふを忘れず久後いかなる事ありとも生涯記さんを見捨給ふなかくいひまらするとも成長て思ひ忘るゝ事もありなん互に忘れ忘れられざる誓ともなるべければ今あさんが護身と半七がどを交易て膚離さずは妹と夫の縁を神も憐み給はめ殊に記さん半七が年才とその名に象りし十一月七日の誕生と爹々の手づから寫し給へる臍帯もその裏にあり半七と又あさんが名にし負たる三月のまかも三日の誕生にてわが書つけたる臍帯と護身と納てあり時にとりては是も又奇くも故ありげ也女の妬ころなさは百の拙さをかく花とぞ貞女義男の故事と賢き人の記しにける書見てもしり給へ他し人あ心を移して母が遺言に悖るものは不孝の子不義の婦なりよく臍帯の臍をかためて思ひ懐給ふべからず是は是夫婦がうへの誠ぞかし記さんは又三才のときに別し母御ありと聞ば神佛に祈念してひかれよるべは三味線の撥を割符に環會御子の名告し給へよ半七も力を盡して華路へ上る序あらば外ながらかの人の往方をよろしく聞定めその夙願を果さし給へ忠孝の道はいふもさら也聞ゆべきのみ只是のみ命長くて諸共に五十年忌の季までも己がなき後を吊給は草の原にていかばかりうれしめと思ふにも名残をしやとばかりに抱ふ

に餘る恩愛の涙に袖はそぼぬれて項に掛たる子どもらが護身巻をとりかたさ夫のかたへ會釋すれば半六やがて土器をねさんがりにとりさしつくる三々九度の勸杯も今ぞ獻く親の恩半七も諸ともに母の教訓身に入て涙に濁す味酒の三輪の芋環くりかへを婚姻の式果にけりかくて後輪篠之一言もものいふとなくみづのら臨終を待たるがその隱昏に彌陀の寶號十篇ばかり唱つし卒然として絆断ぬ思ひ設し事ながら今更に淺ましく半六が愁傷とさらへ半七もさんは天に叫び地に倒れて哀悼み紅涙空じき枕を浸せりさてもあるべきにあらざれば半六は次の夜に妻の送葬形のとく登に丹波都が一周忌もこの日に當るをもて共に經誦して追薦の佛事を執行ひよろづ寂寥ぞ日をねくりぬ

○なら坂の懐い

待とはなしに半六は妻の思果しかば舊のとく出仕して典膳が宿所に交加する事はじ先より親しかりけりしかれども半七と往に輪篠が困て後には奈良へゆくとなかりま程にある日典膳夫婦半六にいふやう何事の意に稱ざるやらん久しく半七を見ずわが子どもも徒然がちなるに曾太郎園花諸共に南圓堂へ参らして遊山させばやと思ふも母のなき子は衣服何くれの事も便なからめ翌はかならず半七を將て來給へ五七日こしに留るとも何か苦しかるべきといふ半六聞て今にはじめずかく懇切に聞え給ふ事親子が僥倖なり亡妻はその性遠慮あるものなりければ稚きものも親く參る事罪得がましき所行とて呼え給ふを固辞さふらひし宣ふよしを聞えしらせんあは半七もさこそ歎びひこめ近きお將て参りしべしとて五條へ歸るとやがて半七も縁由を物がたりて奈良へゆけといふ半七之母の遺言を守りて出るも入るもあさんともろ共にせんと契りしかばひとり奈良へ行くとを歎ばすれさんも又彼を放て遣るとを喜ばすいたくいひ懸せば潜然と泣しをれ

て立もあがらざりける福に半六除とくもてあまま半七を曾太郎が武藝の師に入門として日毎に奈良へかよはまそれを假托に典膳がかたへ遣まけりかくてぞれさんも留るとを得ず半七も推辭がたくつとめて奈良へ赴き醫古果て後曾太郎に伴はれ典膳が家に日を暮す事も多かり元來伶俐き童なればあるじの夫婦その勸止を見て只願に稱讚し或日典膳の妻の敷浪にいふやう女兒園花は僅に五才成せ女の童は大人免くも早ければ孫は先彼方を見るべき然れば今夕婿を擇て生涯を安ん過させんは親の慈悲なり日來半七が擧止を見に其才の長たる事廣き奈良藩中に二人と有べうも覺ず彼が父半六は新參にて五條一村の吏なればわが女兒を遣嫁をべきものならねやかゝる筋と期に及びてもかくもなりなん人は得がたくて喪ひ易ければまづ半六に情由をしらせて彼が回答を聞ばやとれもふなり身がこゝろいかによやと問に敷浪しばし尋思して半七が事わが身もさるもはざるにあらねや近屬人のいふを聞侍るに半六が妻世にありし時それが姉の女兒とやらんを養育久後はわが子に妻あはせんとて假に婚姻の盃さへ事濟またりとぞもしこの言實にて侍るならば相語給ふともかひなからんよしや彼人御身が祿高くて威權あるを羨み異議なく承引事ありとも幼きよりいひ名づけし妹眷の中を引裂て園花を遣嫁んと譏を惹の媒ならめよくよく思ひめぐらま給ひねど回答ければ典膳聞て冷笑ひ半七はなは總角にてある婚姻をとり締るといふ事その謂なしとはとまれかくあれ面あたり半六に問てこそといふ折しも若黨何がし外面より障子を細やのに押開きて赤根氏の詣來給へりと告るにぞ典膳聞もあへずそれこなたといへば若黨は障子を舊のとくにして退出敷浪も次の間に入りぬ浩處み咳三ツ四ツして半六は書院の椽側傳ひに入り來りてその安否を訊問さといふやふこのころは木の葉落しとやらんまうして脚走よりも却て悲けしこれぞめざるべくと某毛を引て進らすべしとらひかけ

て携來れる袱包をうち開つ、さし出すものを見れば鴨一箱を青き目籠み入れたり典馬は志の淺からざるを歎び聞えちかく爐のはどりに招きて四表八表の話の序半七が伶俐を稱ていふやうわれ久後は女兒園花を半七が妻めはせんと思ふ心がまへありといへども其許の内室世にありしとき姪女とやらんにいひ名づけて半七が妻と定めきたるよし風聞あるをもてふかく望を失へりその事實言なりやと問半六これを聞て滿面に笑を含みこは思ひもかけぬ事をうけ給はるものかな新參の半六が兒子に一の老臣の息女を妻めはし給はんと宣するのそれこそ實言ども聞えいねき亡妻が姉の子の孤なるを養育事これば人となる後に婿を招てその家を継すべきものなれば半七が妻にこしがたしなかるを彼等が年紀も似つかはしくてもろ共に生育を見てさる風聞をするものありともな推量の説なれば論するに足らずとて誠しやかに陳すれば典膳忽地膝をす、めしかるときはこの婚縁整ふべしとさとてこの事今之人にしらしがたし半七も齡二十を超園花が二八の春を迎るまではなほ遙けしそのころには其許も一等をす、と半七も新あ仕て秋祿父に勝せんとも又親子もろともは舊の柴賣になさんともわが心一ツにあればよも偽り之宣はじいよ、其許に異儀なくばけふは事のはじ先ぬめでたく一献酌べしといふに半六ふかく歎てもしこの婚縁を破ることあらば意の隨に罪なはしたまへたつて恨みなこといふそのとき敷浪は屏風の後より出て半六に挨拶し女兒が婚縁といひて歡しきよしを聞ゆるがて彼鴨を羨ししな布種々の肴を添て賓主三人酒も遊び終日相語樂みけりか、りければ半六はからずも立身の便宜を得てはや老臣にも昇進たるこ、ちしつ遂に輪蓐が遺言と用ひず慈には義をも習をも打忘れてます、典膳夫婦に肩、只願が兒の成長を待わびて引も伸さまはまらにつけてもつらくと深念するによしなき義理に絆されと輪蓐が臨終にふさん半七が妻と定

めたきたれば彼等童て、ろにも母の遺言なりとていと睦まくるのすなるに年關てこいよ引離に便なからんそのときこの故障によりて蟻松氏の婚縁いたづら事となるとあらばわが親子いかなるからさめ見んも量がたしなからけ今よりともかくもして密にれさんを追ひ失ひ後の患を絶にはしかと心一ツに思ひ定めてしが事は漏るゝに易まとしてかるゝしく手を動かさずもつばらその便宜を窺ぬこ、に亦近會奈良の大佛のやどりに笠松平三といふ薬商人ありけりこの平三は原浪速人にて旅芝居の俳優を興行し伊勢の古市泉州堺尾張の年魚知美濃の稻葉山とさらん周防の山口長門の下關すべて都會繁花の地は到らざる曲もなかり去年の十月五七人の俳優を將て西國へ赴く折しも難風にその船を覆され俳優等はみな大魚の腹に葬られたるにその身は辛じて筑紫船に助乗られ奇しくも活残れども遺らぬものは行李路銀にて忽地生活の本錢をうしなひいかもせんすべなきにどかくして奈良まで立歸り川上の南にかきけき旅宿をもとめ日毎に大佛のほどりに出てあら庭布まひし緞氈輝の膏藥を販ぐその打扮いかにどなれば前には首尾具足たる熊の皮を置て熊膏藥といふ三個の文字を筆黒に寫したる紙の幟をれし立栲染の頭巾を戴て丹田山木綿の古布子にでんちうの袖なまをはをりあるは貝に入れ或は紙に押舒たて膏藥を處せさせでにならべたき鳥獸の聲音を似せて往來の老弱を集合しかば人とな彼を口順る熊の平三郎とぞ稱れる折しもあれ赤根半六は高天神のほどりに所用ありて大佛の門前を過るに件の平三いと暖氣なる日南方に座を小彼此人に對ひて高やかにいふやう世に緞輝の藥は夥多あれ、僕が製するところは見給ふとく熊の脂に家傳の藥種を煉わはしたれば衣服に附す又痒觸せず一トたび用る人は一切腫物の根を斷とその功神のとし是即ち周の文玉の夢に見給ひたるあら熊の脂を用て三國の名醫華陀が製しはじめまをまといふ人の妾婦娥が盗んで月の中に走ると

さ米人が川に出て布を洗ふに通をうしなひ他人に傳授せしを其客がその法を百金に買取て軍に勝たる妙薬なり 僕弱かりしをさ獵夫なりしがある日山中おて異人よりこの薬方を授かり去が世の助ともなれかして此度人の薦にまかし南都に出て賣弘るものこの薬薬一具を買給ふ人あれば鳥獸の聲をつかひわけて聞しあらずし往昔より鹿笛 鶯 笛などして笛をもてその音を似するはめづらからず凡鳥 獸は引音曲音急促音の三ッありて不正半濁の音なればかならずしも人間とれなじからず彼笛をもて似するを響は犬のわんと鳴風のちうと鳴熊のはんど鳴鹿のひいと鳴又鳥のかあ〜家鴨のぎやつ〜すべて急促どころに隠々と響ある眞の鳥獸に比れば笛の及べきにあらすよくその妙を得たるもの唐山にては孟嘗君が鶏鳴の客日本にてはかくいふ平三一人のみもしこの中に犬の叔母さま家鴨の姉御なども在さば僕が申すところ虚なりや實なりやよくえりておはすべしといふに立こみたる老弱叫と笑ひて膏藥を買もあり買さるもありておのがさま〜にわかれ去りぬ赤根半六と響より人の後方に立在て竊に平三に晴を着忽地に 謀を生じて人の別れ散を待懸て平三を物蔭に招きて聲を低うし言卒爾にこれ日れば領主の御内ふて赤根何がしと呼するもの今彼處にて汝が面影を見るに世を逝給ひしわが兄によく似たるのみならずその聲音さへつゆ違はねば不覺になき人のなつかしき予かしその膏藥は獨りなく買ふべきに汝われに 伴れて一盃を酌んやといひかけて懐中の紙入より金一兩をとり出て與しかば平三大に歡びてこればかりさる僥倖と孔子の陽虎に似阿通志貴の天稚日子に似壹岐直真根子が武内宿禰に似たる故事は俳優にもするところれさみな愛たき祥にしもあらぬに其のれかこくもよき人に似て立地に膏藥を賣盡し刺へ酒を酌らんと宣ひするを争か推辞しべき誘給へど應しかば半六歡びて直に布ちらしたる庭を巻れさめさせもろ共に酒店に到り與ま

りたる座敷入りて對ひ居りぬ且くありて女の童二人銚子に 盃とりそを程にりて來たりそのとき半六は女の童に對ひけふは高天神の會日なるに容も夥なれば汝等酒も添わへざるよものほしくば 掌を鳴らすべきにどく行かといふに女の童とふかくも推辞すこゝろなきはけふの事なれば怒し給ひぬといひて外のかたへ退出ぬかくて半六と平三と酒酌かひしや半六に及べるとき彼方を見かへりつゝ密語けるは響に汝をわが兄に似たりといひしは 詭にて實は見るところありて一大事を頼み聞はん爲にこへ誘ひ來れるなりまづこれを受納給へどてふたしび懐中より五兩の金をとり出し 盃に添てとらすをはしなくもどらす一大事と宣すれば問すとも猜したり 僕 賤しき活業とすなれども四十に至るまで惡に與せず人を傷らす五兩の金は得がたけれを命に換て何かはせんまづ縁由をえらし給へ倘行ふべき筋ならば承引事もあらん歎といはせもあへず眼を瞬り小膝立なほして柄に手をかけやをれ平三男子と見ていひかけたるを聞て後あ應んどと武士を武士とも思はぬ一言弓矢八幡堪忍ならずかく女々しき汝とはしらす可借唇を動してこゝろ見られしこそ安からぬ歡念せよと罵りつゝ 刀を閃して研んとするを銚子をもつて狂れば酒はこはれて散亂しわが身に係る一生懸命かい潜り〜刀尖丁と受と免て呵々ど冷笑ひ命惜ければこそ 轍も與せぬ助かるまじき命ならば後の 禍も患るに足らず楚と願まれいべし怒を刀ともろ共にれさめ給へと反かへし騒ぬ男たましひに半六やをら刀を引天晴手煉わが晴と違とすまづその金を納て後事 密かに相語べしとく〜といそがせば平三金をとつて坐中に擲ち財に絆されて與するものと事の破る、に及びて物の用にたちちがたしとる徒と思ひ給ふか縦金と給はらずと見もしらぬ人に東道されて半日の酔を搦せしからその報をせでは稱ふまじ何みまれ心くまなく聞給へと諾しかば半六さす〜感激しみづから金を拾ひ集め赤銅絞

子に銀もて柏葉に大の字の紋つけたる割掃枝を鐙の間より拔出し扇を開きて金と、もそのうへに載せわれ全く財をもて其許を誘ふにわらずこの二品は當坐に寸志を表すのみまげてこれを納給へ事成就せば別み報ひをすべしとて叮嚀にす、むるにぞ平三まぶく金と掃枝をとつて懐み扱しかば半六やそこ、ろ安堵で額を合し耳をとりかとしつ、閑談數刻に及び遂に女の童を呼て酒を饗を添さし更に四五杯をかたふけて酒店を走り出やがて東西に別れけりこの日は夥多の客立かはり入かはりせし程に女の童もいろがはしきに紛され彼二人が密談を聞こたえてなかりしとぞ

○大柏の權輿

まかるにその次の日は輪篠が百箇日の連夜にてありしかば赤根半六の法師に經を誦し又親しき友を招きて物食せなせするに日もくれ客も歸りにければ半六は半七とれさんにいふやう佐保まで四里にわまる路なるに汝たちまた稚ければ一度も母の墓參をさせざりし翌は卒哭忌にて佛事結願の日なるにちなうち捕ひて願成寺(今地の字とす)へ詣へしつとめて起給へといへば半七もれさんもいとほある氣色にてその夜は持佛堂に香もりそねてもろ共に回向しつ常よりと遅く臥たれどまだ曉やらぬ頃に起出で浴し髪を結せ用意既に整ひしかば半六は一挺の轎に二人の童を乗して奴隸等み昇しみづから轎に引そふて願成寺へを詣けるいそぐとすれど冬の日の短きに彼處に到りでも是彼に時をうつま歸る比及には日も西山に傾にぞ半六は轎夫どもが杖する隙も待ひびまどて途より半七もさんを歩せ右よ左よとていそがせば二人の童はなかくに歩る歸るが氣もはるけまどて左屋谷の東なる豊田の山本を過に天さへ結陰て今に暮もしつべきやうなれば足の運びも殊さらにな、みて九折たる山路を喘々たる折しも一露繁き枯尾花のさら

と戦ぐと見れしその形積の大サまたる荒熊忽然と跳り出矢睡にれさんを引銜路を横ぎり、藪直に雄手の山へ走てゆく奴隸等はいふもさら半六大に驚きて刀の鞘に手はのけたれど左右なくは逗留すわれよくといふ間に熊も人も見えすなりまかば半七奮然と笠を索り續て山に登らんとするを半六忙しく引留めやよ孫兒氣色を變て何地へゆくぞと問れて父を信と見かへりそは宣ふまでもなし看、おさんを猛獸に銜去られ何の面目ありて五條へ歸りしへきかなはぬまでも追蒐て雙を刺留んとするの外他事なし其所放のへど回答もあへずより断て追んとするを半六は留たる袖を放さず汝稚、けれども流石にわが兒なり武士の家に生育ものは誰もかくこそあるべけれしかれどもその身の力を盡らずして疋夫の勇に健るものを世も野猪武者とて笑ふぞかしよしや心は勇くとも十一歳の小腕にて彼荒熊に克向んは薪を負て火に近づき石を抱きて淵に陥むそれよりもなほ危しれさんが事は惜れどもかへらず汝もろどもに命を傾さば父が哀傷はいかばかりとや思ふわれさへかくてあるもの何事も命運の係るところと思ひ歸めけふはこのまゝに立歸りて獵夫等に卷獵さしてれさんが雙を復すべしわしかれどて留んやと親の諫を用ざるは大なる不孝なりとく歸り給へといふ理に迫られて半七も眼中に涙を含み山を向上て嘆息をせひなく思ひとまりけりかへて赤根半六のわが子を將て三條へ立歸りその夜の中に令まらして夥の獵夫を催ま次の日より豊田岩屋谷の山田を卷獵さるるに元來この處は高峯にもあらねば熊なきの出るく事絶て聞も及ずとて獵夫等は不審みながら七日あまり獵くらしたれど終に本意遂すして己ぬ半七の又れさんが爲に熊を殺して怨を雪さる事といと遺憾思ひて只管彼が不幸を悼みその日を亡日と定めて母の位牌を、もに旦夕香花を手向るを身の務とせし程に父の半六大に諫て稚きものには似げなくも思々しき念佛三昧かなよしやいかに悼ども死した

るもの、歸るにあらす努思ひたえ給へといふ半七の父の仰る事をしてその後之只忍
 く、看經し樂からず予日を送ぬ是は切腹にせんは彼日豊田成山本にて荒熊に合去られ山に入事
 十町余更に活たる心持とせねど今は斯と思しかばなかなかに泣も叫ばず心の中に神佛を念じつ
 、彼がまに／＼引れゆけば熊の山深入てれさんをやをら扛れるたるが直に啖んどもせず忽地
 人のとく立てまづ後方を見かへるにぞれさんいよ、驚き怪ながら逃とも脱さじと思ひてわ
 ろひれもせずうち膽り居るに彼熊人の語るがとくいかにかに小女さぞな怖しかりけんといひかけて
 みづから胸のあたりよりその皮を引めぐりてくる／＼と巻を見れば年の齡四十のまりなる大男
 が熊の打掛たるなりけり尋常の女の童なりせば男々まき舉止は得ずまじきにれさんはこの形
 勢を見て打も驚かずさては熊かと思ひつるに獸にも劣りたる盜賊にてありつるよ汝わらと奪ひ
 去りしは花街なぞへ賣らん實か縦元を喪るゝども穢れたる隊に入るべきか殺せばはやく
 殺せといふその氣色從容として死をせよれそれぬ健氣さに彼男の舌を巻て不覺に感嘆し世に怜
 惻女子はあれどいまた御身がとまを見ずわれは偷兒杜騙にもあらず又人肉經紀にもあらず人に
 たのまれてかくは圖つるなりといふれさん聞てこはこゝろも得ぬ汝わが衣を引割せず又花街へ
 賣んどもせずは伴ふどもそのかひなからんども何人にたのまれたるその名をせよといへば
 大男うち點頭つし短刀に着たる割掃枝をとり出せ小女これを認めりやと問にれさんなほ不審み
 ながら手にとりて熟視れば赤銅綾子に銀もて柏の葉に大の字の紋あるはまがふべくもあらずぬ
 養父半六の／＼掃枝なり汝いかにきてこれを持るされば日らはが猜せまお違はず盜賊ならでな
 ぞやといへばいなその掃枝のぬし密に御身を殺せとわれを和語嚮のとくはからばはしたりかく
 のみにてはなほ疑ひ思ふべしその故は此如々々なり箇様箇様なりとて奈良にて半六に酒を強ら

れ金と掃枝を得たる事またれさんを家に養育て半六親子が仇となるべき情由あれば密に殺せ
 よとてたのまれし事首尾を説しらしわが身は笠松平三と呼ばれて賤き活業はすれど不義の黄金
 にこゝち惑ひて人を殺すものならずしかとわれ承引すばその座を去らせじと責む實に思ひ定め
 たる氣色なれば己とを得ず領掌一且しか計るゝへさもいかにもこゝその小女子を助けんも
 のをど深念しつ事こゝに至りしが今御身の舉止を見るに壯士も及びがたしよりてます／＼彼人
 の奸惡を推量り更に御身のいとをしくして情なくも棄るに忍びずもし一身をうち任んばならは直
 に華洛へ將て上りともかくもして養育べし身がこゝろいかにぞやと云にれさんは縁故を聞て
 はじ免てよ、と聲を立涙あやなき袖の間よりこふり落るをか拭ひわが身いかなれば過世の惡
 業ふかくして母には三歳の年に別れ父は非命に世を去り給ひ生の母ともたのみてしその人も身
 まかりて今一人の養親の老も給ふ後までも反哺の孝を盡さんと思ふかひなく思ひきや殺さ
 んとまで憎るゝ何過のあら熊にたばかりとら給はんとはよしや御身のこゝろもて命は助
 かるゝともわが身ありては養父のまか半七の爲ならずと聞ては五條へ歸りがたしよるべな
 き身を憐て養ひとりて給はらば千辛万苦の世を経るとも親とし仕て再生の恩を仇と思ひ侍ら
 じまた九歳の女の童がませたりと聞給はんがわが身も又情願ありて命を惜まかりたるも遊
 女妻はいふもさらなり人の妻とはなりがたしこは深き故ありて命の惜まその爲なればくはし
 うは後にやぎめこの一條だ承引給ひ、賤き活業に世を渡るとも推辭侍らじと回答しかば半三
 ます／＼嗟嘆して日れ色をしも好ねば年之四十にあまれども妻を娶らず同胞もなきにつけては
 折ふまの病わづらひに老後の事思へば心ほそかりしに天この小女を給ひる事はからざる幸福な
 り心安かれ富貴の家より縁し結んといはするとも身が情願は破るまじ日もはや暮るゝにとく

くどてやをられたさんて背負ひつゝ夜に紛れて山を走下り直に華洛へ上りて半六が與たる五六兩の金を本錢とし些の生業に年月をわくりぬこゝに于てたさんは父丹波都が事母の事半六輪篋が事又如此くの故によつていとばやくより半七と妹脊の縁を締し事審に物語れば平三とその至孝と貞操の凡ならざるを感激し且その薄命を憐みいかにもして彼が母に環會せんとてをりくその往方を索しとぞこのころ華洛に笠屋夏といふ舞妓ありけり原是白拍子の流にて世に舞々と稱ふはじめ越前の幸稚が子弟華洛に上りて俳優をなせえより今の夏に至てもつばら行くる彼幸稚は桃井直常の子孫なりといふ舞の詞の戦場の故事世々の景迹戀慕の痴情を述てその音曲三十番ありこゝをもて管領執事といへきも酒宴の席に之かならず彼夏を招き給ひし程にその家元のづから衣食に富ぬ又平三の年來旅芝居を擲了たれば夏が家に疎からざるによつておさんて彼が弟子として舞々を習するにわづか四五年にしてその技を極たるが顔色の艶妖なるを猫ては月も忽地雲に隠れ容姿の匂やかなるにけられは花も羞らふ風情なれば人とな頻に稱讚してその舞さへ却夏にも勝れりといふさる程に平三はたさんが二八の春のころより彼を舞々に迄たてし夏が家號を伺らし世にまざるといふこゝろにて笠屋三勝と名づけ洛東祇園社頭に于て女樂を興行したりしかば見物の老弱雲のとく集霧のとく立て免てその繁昌昔貞和五年の六月に足利尊氏卿四條河原に棧敷を搦て田樂を見そなはせしもかくやとればえて夥まこゝをもて三勝が舞の手に都鄙の人を招きよしてその名高く聞け牛打童も口順てこれを見ざらんものは人も蔑り我も耻かしく思ひけるとぞ三勝の世の人に面を見らるゝ事いと淺ましくはあれど父丹波都が陸終にしうねくも聞えれきし彼三味線の因果にて今舞々となるならば割符の摺もいたづらならで母にあふべきよすがともなりもやせんと見物の老女には晴を着れどそれかど

思ふ人もなく加旃大和にて一トたび夫と定てし半七が事なつかしく華洛へ上りぬふとも互に年長稚規うせ見忘れやまぬのこもし名告あふしるべにもと半七が家の紋なる拍の葉に大の字を舞の衣裳に纏せしかば世の人更に渾名して大拍と呼びまより後世舞々の名目となりて幸稚大拍の二流に分る大柏の事雍州府志に見ゆ今大頭と稱る大柏の訛ならんかこの大柏の打扮は頭に天冠を戴て身に狩衣を被腰に一振の太刀を佩て大口袴を穿大小の鼓にわいして舞踏せり凡俳優俳優田樂刀玉雲舞連飛輪脱緒小桶比丘彰等種類多しといへども今の歌舞伎は舞々より出て歌舞妓の名は却ふるし(文獻通考假婦伎に作)かくてぞ平三は昔に之立まさりて世を安らかに渡るはぎに只三勝をわが家の瑤鏡樹と鍾愛してみづから舞の衣裳を背負ひその履をとつて主君のとくに管持を三勝のりなくといめてこは物休なくも侍るかなかゝる所爲としてわが身を笑はしぬひぞとしばく陳れどもなほ聽すますく他事なく冊さけり

○臥屋の胡越

光陰矢のとく又梭のとく秋去春來たつて蟻松典膳が女兒園花は既に十五才にぞなれりける父の典膳の珠より赤根半六が一子半七を女婿にすべし準備あるをもて主君續井順昭へとりく彼親子が事を吹擧しある日又まうすやう半六五條の村主を承りつてより多年露ばかりも私なし加之兒子半七は文武の才藝人に越へたり僕日來その舉動を見るに近習に召使れてしかるべきもの歎夫俊徳を明にして能を擧不能を矜ぬふは君のこゝろにありしかれども長流船横つて渡するのなくば夜光も又燕石に劣りなん賢を薦るは愚臣が微忠也用ると用ひぬはさるとは尊慮にまかざるべうもやと首語を竭して聞えわけしかば順昭これを賭なひてすなはち半六に五條の縣守と兼らし半七を召出して嫡子吉雅丸の近習にぞ召使れける典膳最負の沙汰をもつて彼親子を汲引

すといへども半七がこゝろさす、伶俐てその忠孝拔群なることは違はずその爲休を見て老臣もこれが爲に蓋主君もこれに對して容を改ると多かりざるによつて半七はいく程もなく近臣の上あすゝみて職祿忽地父に超たり續井の家祿多かる中に文武の道に心を委ね忠信無二なるもの厚倉二郎太夫友春と赤根半七とのみたえて肩を比る人なしとかるに半七は今茲やうやく二十才なりその年紀をもて論ずるときと厚倉にも勝れりとして心あるものこれを稱讚するはなかりしとぞかくてその年の終に蟻松赤根の兩臣その子の婚縁を主君へ願ひ奉り明春園花を嫁らまて秦晋の好を締んとて假に媒灼の男をこしらへ送にその用意をなんいたしけるそのとき半六のわが子をちかく招きていふやう蟻松氏はわが親子には恩人なり既にその蔭を蒙ると久し尙彼人の吹舉によらずはわれも伊身も山見にて朽果なんそれさへ忝なきに此度最愛の女兒をもて御身に妻せんと宜はする也今日は殊さらば吉日なれば双方の願書を上るにこそこのよしを聞けしらせんとて呼びぬ歎びぬへかといふ半七聞てしばし父の顔をうち瞻り仰にはいへども某むかし母の遺言によつてれさんと婚縁を結びまかせ彼不幸にして狂獸に銜去らるしかりといへども今に活るや死せりやしらす方に一ツも彼女子恙なくて世にあらば母の遺言に悖るものならず彼に對して不義なり不信の男子三十にして室ありといへば妻を娶る事はまだ遅からずよく思ひめぐらして後に回答し奉るべきに社とひも果ざるに半六忽地氣色變てみえたるがまた思ひかへまけん阿々どうち笑ひ舞身がいふ所理あるに似たれとせば甚だ迂遠し今に干てれさんがこゝにあるをさまたきてこの婚縁を結ばゞ不義なりゆかにせん彼荒熊ふどられその屍を索得ずといへどもはや八九年音耗なし枯たる朶に花は開どもそれが存命て歸り來ん日はありともればははざるを假初の義理も稱がれ一女子の爲に子孫の後業をたもはざると思ふ且上世

には人究て命長しこのゆゑに三十にして娶ることも遅かたず降れる世はしからず人生五十年七十は桶也はやくより子を生せざれば父母衰老してその子を教るに心ゆかず御身學問したれが和漢の古實はしりぬべししかれどもそは杓子定規なりわが子あしかれとてかくいひんやれさん憎しとてこの婚縁を結ばせんやみづから思慮して感ひをとりぬむとといふに半七はなほ頭を低擡の間て手をさし入れ黙然として居たりまが且していふやうは慈のふかき事はわきまへていへざ信義の係るところいかにもすべなし公事にわらずして權家に入るは士たるもの、耻なり況て一の宿者の婿となりて肩を、聲さんと嗚呼がまし人の貧富は天なり命也よしや生涯薪を燭て世をわたるも心清くば朱買臣にも羞べからず死灰の人に愛せられんと愛せられざるにしかず銅臭を羨て好を結ば、禍の端なりまげて今まばし待せぬへといふを半六聞もわへず大に赤て聲をひり立やをれ半七汝賢だちてしばしわが目に悖る母の遺言のみを重きて父を否しさしやかなる義理に頼れて親に愛を失へど何の書に記してかある日れ一旦蟻松氏に約諾してこの婚縁を定たるに今忽地にこれを破らば彼人豈たゞに止んやそれこそ大なる禍の端なれ所詮彼人に憎れてわが親子は活かたし是非に及ばずといきまきて面色赧なり又蒼くなり猛に刀を引提つし外面へ走り出んとするを半七忙しく臂を伸して袴の裾を引とめれん憤りの甚しきも家の爲をれば是とわればあうしう聞奉るにわらず三たび諫て聽されば號哭えて從へといふ本文あり此うへは御意の隨にてありなん固辭ははたしとまふすにぞ半六やうやく氣色を和げ聞わきたらば仔細に及ばずわが家の幸福これにまます事なし汝日來の伶俐に似ずかばかりの事に思ひ惑ひしは年の弱き故にこそいよく婚姻整ひなば夫婦睦して舅姑に愛せられ立身の階梯を踏な放ふといふに半七は畏きて仰うけぬはりいひぬゆ心やすかるべしと應しかば

父は大いふ歎でやがてこの日願書をもて半七が婚談の事を聞えわけま程にその年の終りに双方
 故なく主君の許を稟婚姻は正月の中旬と定めてまつ聘禮をとりかはしぬさるからに半六の屋根
 を背更さし塙を塗らし席薦の面を新にさし紙窓を貼かひなきするにほど短き冬の日を心いそ
 しく暮しけり又蟻松が家には園花が衣服調度の儲に黄金を費しすて勇を盡さすといふとなし
 是後に冬も果てわら玉の年のはじめになりければ典膳夫婦はわが子の爲に黄道吉日を下て既
 に婚姻の日にもなりぬ園花や大橋に駕らんとするとき敷涙は女兒にいふやう婦は三界に家な
 し百年の苦も又樂もみな他人にまかす身なれば只柔順あして妬なきを恒のこころとせ
 よどは物の本見てもまりぬひつらんされば幼きとき父母に従ひ成長ては夫に従ひ老て子
 に従ふなるこの三従はまふもさらん五ツの障もありといへばひとりの女兒を愛やかせし親の權
 威を笠に被て夫に倦れぬふなよ一トたび夫の家を出ては覆水盆にかへりがたし他し心を憤て
 願を竭えて齊眉たまへやよやよと教訓せば園花のまばく應てさていふやう稚きより汝が夫ぞ
 と聞けしらし給ひまがふりわき髪も肩過てかくまひり齊眉ものをなでう等閑に侍るべきよしや
 身の愚なるより疎るゝとも生て彼處を出んどの思ひ侍らずといふに敷涙はさもこそとうち黠頭
 つら目送りけりかくて園花五條に赴き婚姻障るともなく整ひつ洞房花燭の景迹とくたぐし
 にこ、には省きてははす園花の稚きより見もし見られもして生で、ろつきしよりこの人ならで
 はとこらうに誓し嫁夫なるに年紀は二八の春にして容止いと艶妖に心さまいと伶俐かりき又半
 七は今茲廿一才にして顔色の端麗なる事は梨花の雪をも欺くべく文武に宏才なる事は竹林の群
 鳥も入るべし往古より佳人は才子の因がたく駿馬と伯樂に遇がたしかる夫婦は實に天縁なめ
 るとて或は羨ま或は妬しと思ふもの多かり赤根が家にと歸寧身入の吉席に日數経て夫婦

ますく陸しく見えしかば典膳も敷涙もよき婿を擇得たりとて歡ふと限りなく敷涙ををりく
 五條へゆくを身のたのしみといたしける世の中の親ご、ろなへてかくこそあらめさかるに半七
 は父の命あ侍がたくて此度婚姻のなしたれさるさんが生死を明定すは縁の年は經るとも他
 し女子に之志を移さじと思ひてし事なれば園花を娶りてもたぬて一夕もひとつに睡らすれば
 とて又強而氣色を見せずして晝は殊さらば他事なく相語ひ坐するとき席を隔てす食するとき
 は折布をまらべいと陸しく見ゆるるに半六はこの形勢にちかめて潜に歡びわが子はトめの言
 語には似ず園花と昵みかたらふ事かくのとくなればわが家の幸福このうへあらじといよ、蟻
 松の倭絹わが子の新婦を管待すこと只賓客のとくせりされば園花が兄曾太郎もをりく、奈良
 より來たつて半七と交參とますく、厚かりしかば藩中の諸士赤根親子を侮るものなく却て阿諛
 らふにぞ半七といと心うき事に思ひけるる程に園花はこころあ足らざる所あれば靴を隔て辭
 きを擧ぐがとく又啞子の苦を紙るがとく思ひ追れさいひもまらさす夜いたづら山雞の尾上
 の月と在明て對なき枕を恨つ、春もや、暮ゆきて四月にもなりけりこのころの日の長き限な
 ればある日敷涙は奴婢を將て歩より五條あ到つ赤根が家に音なはする半六と奈良へ出仕して
 半七は園花といも小座敷に居るよしを焚婢がまうせしかけ敷涙之從者を出居のかたに待し案
 内もさせず只ひとり半開はならたる亮隔を二隔ばかり越てゆくに女兒も婿もこれをばまらで半
 七之紙窓の下に物の本を閱して見かへりもせず園花とそのはとりに侍りて何やらんものいひ
 だけなればわが夫婿はさし對ひ居るをうち驚さん心つきなき所爲と思ひて立も入らずな
 は亮隔の陰に立在て扇を半押ひらさ胸のあたりをうちあふさるりく、彼處を關覽たり園花は半
 七のものいふよすがやなかりけんたて、出す茶の茶杓にも水漏らすまじと思へども心たかる、

夫に對ひ世の人の物に參り遊山まで日をくらす頃なるに物の本のみ見給へ御身の爲にわしかりなんわらかはかさなき手まへなれどこれさしめされずや少しは心はるけくもなり給とめといひかけてさし出す茶碗を半七はやをら手に取て喫をばりけふは終日の休暇なれば心ゆりせられて不圖見かすりたる草紙の捨がたくて日の關をしらざりしわれよりはれ身ころうち守り居て倦しもたまひけ先と回答するに園花はなはいはんとしてはひも且ず膝のあたり手ならふてすみつきながらまたしらぬ園の留奇南の移香をどめてはしさのむか袖へ報らむ顔を押あて、芽出し楓のはづかはさをやうやくに思ひ堪何事のゆこ、ろに稱ぬども得わきまへぬ身の愚さに人をうらむかどばばさんばなは鈍まじけれど身こ、に參りて春も過はや百日になり侍れど眞の情を見せ給はずさりとては又一トすちに強顔も聞給はて活み殺しみし給ふは罵打る、より苦多く侍り夫婦の縁しの出雲にて神の結ばせ給ふとど心がらにてわふみなる筑摩の鍋のかずく結びも果ぬ縁しはありども吉備の中山なかくにあぢ瀉の海の綱ならで浮たる懸はいざしらす貞女兩夫に見えずと稚きよりいひ諭され又稚きより親と親とがこゝ後に許せし妹夫とは人さへしりてはべるなる心竹さなき事あらば打も懲りし給は、かくまで物の思ひ侍らじ推辭がたくて要給へと環てながむるます花の葉に道をかへじとて出ておけがしの人めのみ愛々まげに見せまたふ敷石まと思へど恨みわふよすがもひとり泣ばかり目睡もせぬ枕に涙のかららぬ夜間もなし思ひほそりて化野の露と消ぬとも一言の怨みのばはじとたしなても女子ご、ろの淺はかにも深き歎きのやるかたなさを憐れとは見給はずや心づよしとばかりに一聲よと泣沈めば半七聞て歎息を縁故を聞かねば恨み給ふも、理なりわれ娘烟のその夜より枕席を共にせざるは御身いとをしと思へばこさらく思慮ふにあらすその事とくにもしらせまやしく思ひし

かき明白告るときは親の非を擧るに似たりとせんかくせんと躊躇て黙止たる心苦しきは身よりこの半七こそ勝るべけれ今は匿に匿がたま思ふ程を聞ゆともかならずしも洩ま給ふな抑われ稚きとき結髪の子あり母の末期に妹と夫の盃さへさし給ひにきそれより先わが父の恨にて彼の親を失としぬこのとき孤を養育て成長のち半七に娶し身の罪を贖んと給ひ給ひし事もありはじめをいへば如此くなり終を語れば箇様くその條の事はすべて審かに脱しらしさてはいふやうこの故にこれ此度の婚縁をふた、び三たひ推辭しかせ父は又蟻松氏の庇に絆され更に環ての約束を違ふとて逼り給へば父の命にも叛がたく又彼女子が恩義棄がたし件の女子は九才のとき荒熊に銜去られて存亡定かならずともこ、に至て年來の志を轉さんば不義なり所詮こ、ろよく御身を娶りて父の心を安くし夫婦の名のみにて枕席をとみにせずは身かならず父母に告て奈長へ歸り給ふべし一旦わが妻となるもなほ原の未通女となるときは身身に損なし環なき珠に疵を著すのへさんものと思ふをもてさて強顔はありけるなり浮世の義理の絆には終に結びも更がたき縁しと思ひ、歸てわれから奈長へ歸りてたべ一十日こゝにあらせてはわが心又一チ日安からず飽もあかれもせぬ人を離別するが信ぞがし一生添ふと思はずは人の妻といなり給はし誑られさと思はれんもいと面なき所行なれど聞ひき給はし恨も散なん聞わき給へどもふ聲も外へ洩さし聞せじと近う寄はせ園花之背向に退て輾轉び縁故をえらし玉ふにいかでかあまう聞侍らん宣ふ事は毎事に、理ならぬよしもなしわが身ありてはけこゝろの安からぬと宣ふすれば秋にもあはで憂き鹿の奈長へ歸らんと思へども死すは夫の家を出じと母にいひつる言の葉の露もまた幹ぬその間にわれかど飽て歸りしといわれふものかいひもせじわれより先に結髪し人の生死をみるまでは他し妻と娶るともひとつ枕にと睡らじと誓ひ給ひまそ

の信を半七が身に稟るならば妾側室で果るともさぞ喜しく侍りなんぞをうら山しと思ふ程に
 き所なきこの身なり情ぞかし慈悲ぞかま横の裾蚊帳の外せめて後方に夜を明さし人めばのり
 は妻と呼び夫といはせて王はれかし心はけふより尼法蘭かるべきものを梓弓くるまで宿の案山
 子と見し王ひねといひかけて泣女見より泣じと袖を噛締る亮隔越に敷浪が苦しき義理と思
 愛に婿と女兒が誠心を聞忍ぶに忍はれず一聲洩らす咳にけはひする人ありと見て半七園花も
 狂に形を改れを落る涙と泣顔を紛らすべはなのりけり

○華洛の僑居

浩慮にあり半六奈良より退き来て出居の方なる伊豫藤を掲げは園花か母君いつの程にか訪
 せ給ひし半七と名ぞて出も迎さるといふに敷浪と氣色を見せじと含笑ていなわが身も只今ま
 しかば婿も女兒もいまだしらすわらはが参るは常の事なりうち捨たきて休足し給へといふ是
 彼の聲を洩聞て夫婦ははそしく走り來つわりなく奥に誘引にぞみなもろとも一室に入りて賓主
 の坐をわかち寒暖を述安否を問に焚婢茶をもて來て敷浪にす、免又主に進ませたりそのとき半
 六は子に對ひ今日狂の仰事あり汝をも召さるべけれと頼のことなればたのれにいへど宜
 せしをもて走り歸りぬ豫てしれるとく郎君吉稚丸の質弱多病にましますればはや十八九歳に成
 給へども意だちにてればするなるべししかるに近曾癆症めきたる氣色にて且暮籠りがちに坐す
 なるに醫療もいまだ驗を見せずよりて老臣談合しか、る煩ひに繁花の地に出し進らせてこ
 ろの隨に物見遊山さし進らせなばその功銀灸藥餌に勝るべしと聞けわげしるは大殿踏なひ給ひ
 てさらば潜やかに浴へ上せよとて猛にその用意ありまかれども從者夥召俱之給はし人しらる
 事もやとてこれらばいと驚し近臣只三人と定られその徒には今市全八郎布施樂九郎と今

一人は半七也老たるかたぬは心をかかれんかどて物馴たる壯俊のみを擇られたればよろづにこ
 ろを用ひ守傳き奉れとの仰なるぞと聞えまらずれば半七と頭を低唯々として命を棄半六又敷
 浪に對て聞せ給ふがとくなればはやくとも半七はこの秋の季までは浴にあるべし姑さへなきわ
 が家に弱き女子をひとりおせんはいと心くるし母御のこ、に來ませしこそ幸なれけふよりは
 園花を奈良へ伴ひて半七が歸るまで預りてたびてんやといふ敷浪と今はのかに聞たる事もあれ
 ばこの便なしと思へども女兒をこゝにあらせてはいよし心もどなればすなはち應じてはふや
 う宜ふところわらわが能もふにかなさされけふ將て歸らんは早し半七が鹿島立を目送ら
 して奈良へ伴ふべし園花は思ひぬかといひかけて見かへれば女兒はどかうの應もせずいよ
 懶き氣色なりかくて四五日のうち吉稚華洛へ啓行たまへば半七は園花に別を告父と見姑に身
 の暇をまうしつ同僚布施今市等もろとも主君の橋に引そふて若葉かきり立出たり時四月
 の中旬にて星まばらなる黎明に雲間を過る杜鵑啼るにまかじと鳴といへば園花が身に思ひわ
 して名種をしさと本意なき血を吐ばかり歎きせりさる程に敷浪は縁由を典膳に告女兒を奈良
 へ迎とりしがいぬる日籍聞して半七が義を守る縁故夫婦が問答を審らかにしりて驚き一トた
 ひはその志の移らざるに感激し又一トたびは半六がかる事をばふかく匿みて年來さまく
 にいひこしらへこれが爲に日が女兒の一生を悞りと思ふに腹たしさまいやませしが威勢も
 て迫るども心ゆかぬもの女中なるに怒にいひいでて女兒が久後あしかりぬべきかどて
 夫にも聞えまらせす園花にも問でれなき歎きにふし柴のまげく歎息またりけるかよりし程に
 園花の形さなしどもいへばはにいでぞと身焦す澤の笠もすがれゆく六月のころより心
 持わしとて打臥たりさればとて終日臥すにもあらず父母のこれが爲に藥何くれの事さまく心

を竭せども想より病わづらへば醫師もせんすべなく後には常の事となりて一日は起一ト日は臥
 顔のはそりも日にそひぬ是はさて置き半七は郎君を守傳て洛に上り洛東祇園の社頭なるハの
 別業を購得てこゝに偽居さし進らせ續井家の郎君なる事いさらなり近臣の名さへ隠して何某彼
 某と稱へしかば日來大和へ交加する商人すらこれをしるものなかりけりかくて吉稚は三人の近
 臣を將て下郎に橋を扛らし割籠をもたし洛中洛外の神社佛閣名處古蹟を遊覽し心はれやかに日
 をたぐる程に病みこたかり果心持清をしくなりて生平よりも健なり又奈良より日日に飛脚到
 來して起居を尋問すそのたびく園花は病を推て曹翰かい寫め菓子乾鮎やうのものを半七に
 贈り又敷浪も女兒が曹翰に卷そえて消息し衣服何くれの事爹々にまうさすと直にこなたへ聞え
 來し給へ洛は隣國なれど旅としなれば自在ならざる事にはかるべま何頃か歸ら給はん女兒は
 日敷のみ僕つゝそなたの空を瞻望くらま侍るなきいと叮嚀にいせしかば半七も西陣の織物
 城殿の扇なごを贈り遣してこれが報とす是より先厚倉二郎大夫と典膳が兒子蟻松曾太郎と五代
 に洛に上りて吉稚の安否を問又所用を承りて歸りしが吉稚病愈ての後はよろづを半七にうち
 任して詣來るとも稀なるに半七も七月の中旬に至りて猛に寒熱し假初に病臥たるが遂に瘧疾と
 なりて日を経れども得起すいく間もあらぬ偽居に主君の係どり近く病臥してあらんは畏まどれ
 もひて今市布施に相語ひ吉稚に聞えあけて別に五條わたりなる小家を借てその身は一人の奴隷
 を俱し其處に引移りて保護すそのとき今市布施等吉稚に密語まうすやう半七が病煩ふよしを奈
 良へ告しらせなば老臣等心もとなまとして別人をもて彼に代するなるべしその人もま君の御こ、
 ろに稱えぬものどもにてあらばこの風景を殺しはんか瘧病は大かた三七日を限りに愈ると
 いへば且この事を奈良へしらせ給はでも某等二人かくてあれば何の障かひべきと信だちてま

うすにぞ吉稚聞てしかなりとし終にその事を奈良へいはせす半七にもこのよしをうを得さす
 るにこれも又いく日もあらで愈べきに告ずして父にも妻子にも物を思はせぬにしかじとて等閑
 にしていひもやらすこれを全八蝶九郎がさまの計較して主君に淫酒をす、めたる張本とな
 りあけりそも彼今市全八郎布施蝶九郎の兩人は續井譜代の郎黨なれどもその心さま半七には無
 下に劣りて實も奈良坂の兒手柏いと憎べき佞人なり彼等は上に父母なく下に妻子さへなく只言
 を巧にして君を欺き飽まで媚て傍難を思ふとなし夫信言は美なりす美言と信ならず宜なり佞言
 は甘くして密のとま吉稚丸なは年少軟弱の公子なればこれを慮らず彼兩人を寵て二なきも
 のとせり因て此度の從者にも擇み出し却半七をいふせく思ふ氣色なるに半七猛あわづらひて五
 條の旅宿へ退きしかば全八蝶九郎はその隙を得て吉稚に遊興をす、め半はれのれらが身の樂と
 にいたし利このころ洛に名た、る舞々笠屋夏が女兒の小夏弟子の三勝なんぞ夥よび集合て登
 夜酒宴に侍らするにわきて三勝は花の中なる花にして一トたび笑ば城を傾るの美人なりされば
 立舞ふ形容はいにしへの妓王佛にも勝るべく愁を合てうたふまきと雨の海裳お春の鳥の鳴かと
 く亦是故郷を慕ふ池田の熊野父を索かねたりし鎌倉の微妙といふどもこれに不及と見えしか
 ば吉稚潜に眷戀して思ひ惑へる氣色なるを全八蝶九郎之やく猜して言の叙に主君に私語まうし
 れのれら媒つかまつるべしとて聽て三勝ふそのよしをいひしらすましくに謙し勝へども三
 勝は舞々こそすれ結號たる夫に逢すは寡婦にて果なんと思ひ定めし事なれば財多き人にも靡か
 らず又風流士も見かへせすすべて金錢をもて挑み威勢に乗して逼る人の席へはふたりび來たる
 事なかりし程に今佞人等が主君の爲に情を述るを聞てうち腹たて一言の應にも及ばずその席の
 果るをまたで心持煩しとて歸りしがその後呼へども絶て來たらず全八蝶九郎のれもふに違ひ

てせんすべなけれや彼にも問はて主君には翌の夜おはしまわらすべしとまうしつる事の旨に
 くて二人密やかに談合しこのうへと夥の金をもて三勝が身を贈ふより外なまどて猛に典膳が方
 へ書簡をたくり用金の事をいひ遣しぬ嚮に半七が五條に退きてより吉稚の遊興を費せし金少や
 の事にあらす或の五十金或は百金は彼の事にいひこしらへしばく奈良より取よするに半七が
 名を齋加るといへどもその人は絶てこれをしらすまた吉稚は今佗居てよろづ養々しといへど
 も元是朱門の公子なれば金銭を手にたにとらす多くは二人の近臣に掠られぬこそ鈍しけれか
 かりし程に全八蝶九郎は既に奈良へ金の事はいひつかはしつまつ三勝が親を呼びて縁由をしら
 せんとして平三が家へ人をつかはしにけれや来たらねば二人は大に焦燥うち運だちて二條河原な
 る笠松が家に到り全八蝶まづ呼門で裡に入り蝶九郎の外面に立在て事の容子を張ひ時宣によつ
 て共に平三を説伏んどそそのとき全八蝶はあるじに對ひていふやう浴之世に憚ある旅なれば
 主君の名のしらせがたけれや三勝に愛れはすのあまり身を贈て傍妻にせんと宣するをもて
 この事を相語ん爲に來れり身價は乞ふがまじにせらすべし舞々の身にしてはこよなき僥倖なれ
 ば領承仔細あるべからずといふ平三聞て冷咲ひ某女兒に舞々はいたさすれや汚穢どころを賣
 て身の安樂をたもふものにあらずよしやこの事を三勝にいひまらするとも彼には結髪の方あり
 て志し金石より堅まかればいふとも益なし是までいくたびか媒をもてたなじすぢなる事を
 以はせし人あれども女兒も承引ずわれも聘すして回答はまな斯の如しこの外にいふべき事聞へ
 き事なしとくく歸り給へといひかけてつと奥に入りしかば全八蝶呆れ果立しほもなく外面に
 出て蝶九郎あしかくのよしを告るに蝶九郎は頭を掻つ、もろどもに物陰に到りていかにせ
 んどいふに全八蝶を低し彼平三とやらんが憎まげに回答せしはわが主君を續井の郎君としら

る故に思ひ悔るなるべしさればとて主の名を明白にしらせがたし所詮わりなく三勝を奪ひとり
 さて媒をもて身價をたくらんに彼の元來俳優家なり一々たび錢を見ばいかでか點ざらんとい
 むらぬかといへば蝶九郎つくくど聞てしかりといへども人のこゝろは量がたま彼もし承引ず
 又うけ引といふどもその望數千金ならば毛を吹疵を求るにあらずやといふを全八聞もあへず
 邊いまだわが吐裏を猜せずわが頼りに三勝をす、めまは郎君に假托て本意を透んど思へばなり
 かくいふは面など所行なれやこれ三勝には命も惜とせず今彼を身贈して郎君に進らる共世
 の聞けを憚れば大和へは將て行がたしその用なき時にまうし給はりわが妻とせん事は今しはし
 が程なり邊又われを取てこの件の事成就せば昨日奈良へいひつかはまたる用金のすべその
 儀へ挾給へ故いかにとなれば途中なごに埋伏して彼女子を奪ひとらん誰かわが們の所爲
 としらしらざれば身價をどらすに及ずよしや平三これを曉得て女兒をとり復さんと闘と
 も這奴を誑引出して擊殺さんはいと易しと信だちて密語にを蝶九郎大に歡びて一闘にも及ずか
 らればわれは黄金を得御邊は又美人を得んぬづれも劣り勝りなしこの謀究て妙なりといふ
 浩所に走卒免きたる男忙しく走り來て平三が家に呼門たのれ之管領晴元朝臣のれん使な
 り今夜猛に賓の來ませるありよりて三勝を召せと宣はすると黄昏過る頃迎の橋を來すべ
 ればその準備して待いへども果て又忙しく走り去るを全八は蝶九郎に密語で物陰より飛で出
 矢庭に彼男が頂髪を搔擗で引かへせば走卒は大に驚き是はと一驚いはせもあへず吭をいたく
 縮るに手足を悶掻き眼をそらさまにし忽地に息絶たりそのとき蝶九郎も走り出て彼男が衣服袴
 を剝とり二人とかくして屍をほどり近き叢の中に投入れてふかく躲し後をも見ずして逃去ぬ
 このとき平三之管領家より召る、とをいとんとて三勝が子舎にあり往來の人さへ絶絶なる折な

ればかくとせるものなかりしぞ

○夜橋の驟雨

さても赤根半七は五條の旅宿にありて病と三十日にわまり頃日全八蝶九郎が郎君に遊興をす、
め奉り夥の舞子と呼び集るよしを傳聞て大に驚きこれを諫んとするに氣力たどろへて起居
も思ふにまかせず頻に心の焦燥つゝいたづらに日を過せしが八月の中旬に至りてや、たこた
り果ぬ整杖つとめて髪を梳し祇園の伊旅館参りて事の爲体を見ればやとてその準備をいたし久
しく大和へ音耗をせざればとてこの旦奴隷を奈長へつかはせしがいとゞまき言葉敵もなき宿の
ひとり徒然に堪すゆく末來しかたを思ひつゞけて不圖柱に懸たる護身簍を見かへりひとり言ま
てはふやうこれはたさんか護身符なるをむかえ母の遺言にてわが護身簍と送代にしつる事れ
もへばこれも夢に似たりそのとき母の宣ひし汝が成長の後浴へ上る事あらばたさんが母も案よ
ど聞給ひし言の葉はなは耳底に残れどもわが母御さへ世に在さすわれのみ近屬浴にわれを問
よまもなきその人の是もこの世にありやなしや紀念こそ今は他なれ是なくば忘るゝ際もありな
んものこそは誰がうへを守り給ふ護身簍と世をはかなみかいとつて項に懸る折しもあれ外面に
咳して来る人ありけり金の鐐には庭のむらぬもけあされ野袴の裾には夕露の玉を轉し諸折戸
を挿ひらさつ、笠を脱捨るを見ればこれ別人あらず厚倉二郎太夫友春なりしかば半七は端ち
かう出迎へて厚倉氏何事のありて訪給ふやらんまづこなたへとて上坐に請すれば厚倉對ひ坐
していふやう其許の病者は仄に聞しが思ひしより顔色もよし今はや平癒し給ふならんといふ
に半七答て某はぬる月より瘧病にて起居も自在ならず君の候とちかくうち臥てあらんは無
禮こと思ひてこの所を退き翌は愈んぬとてはるこたり果んかとして宿老へも聞けわげじ父にも告

ずして思ひの外に日を過せしが何人に聞給ひたるいと不審事とといふそのとき厚倉簍を低うし
友春がその事をしりたるに故あり近曾吉稚君川金の事近臣三人の連髪をもつてまば／＼中來
さるゝを大殿ふかく怪み給ひて某を召れ汝密に浴に到りて事の爲体を見て參れと仰せしか
ばぬる月の下旬よりこの地に來たつてをり／＼逗留し全八蝶九郎がすしめによつて郎君の
ん行迹よからず日毎に夢の舞々を呼し三勝とやらんが身を贖ひこれを妾ふせんとてそれとこな
まにきのふ又夥の金を進らすべきよし例の連髪大和へ到來せり匿とすれはほろけならす日れ
より先に大殿へ聞けわびたるものやありけんれん憤りふろくして昨夜猛に三郎大夫を召され
頃日汝に吉推が事を搜問せつるに等閑なるはこゝろ得がたし既に彼ものが淫樂放蕩世にかくれ
なし事審かに説しらするに及ばずこの事もし室町家より制度あらば家門の滅亡種を免ぐらす
べからず汝いそぎ浴に走ゆきて吉稚主従を將て參れわれ手づから首を刎ならべて後の禍を禳
ふべまど宣まひまげ氣色たぞろ／＼まき思ひかへし給ふべうもあらねば畏つてこの曉に奈長
をたち出目今こゝに來れることさるによつて御邊が病臥したるをもいかでかしらざる事あらんや
とよ半七は聞事毎に且驚き且愛頭を低手を又さしばま沈吟ていふやう郎君のねん行迹よ
ろしからざるよしを傳聞ながらこの身病に犯されて諫奉るを得ず心ぐるしくいひしが用金の
事に干て某絶てこれをしらすさては今市布施の佞人君に淫酒をすしめ奉りしのみならず日
れをさへ運係して不忠の隊に入たる歟彼憎し朽をしようとて齒を切つて慣れば厚倉かさねて其許
の姓名を載するといへども件の連署一枚も御邊の自筆こと見えねけいひとくに據あるべし只
いひとさがたきは郎君のねん候なりこれを救ひまひらせんには忠臣その越度にかりつて苦肉
の計をなさでは事ならず惜のなせんすべのありながらその人を得ずといふに半七聞もあへず膝

をすしめそはいかなる謀にていぞ某身を殺して代り奉るべしはやく説しらし給へしらし給へ
 とはそがせば厚倉莞爾とうち笑て傍邊之志し父に勝りて忠臣無二なる事は已れよくあるが故に
 實は日が胸中の苦計を告てその事を行せん爲に來れりさばははそ身不忠不義の汚名を厭ひて
 いこの謀を行ひがたしかくてもなほわがいふ所に従ひたすふべきかと問に半七答ていかなる
 謀かはしらねどもれん候をわが身に負て君を救ひ奉らば不義ともいへ不忠ともいへ厭ふて却
 て忠ならずと義に勇む日本だましひに厚倉頻に噴賞ししからは今宵いかにもして三勝とやらん
 を奪ひ去りいづ地へなりとも立退給へわれは又夜の中に郎君のれん供えて奈長へ歸りさて大殿
 に中さんにとは是彼縁故を糾明していへば吉稚君のしらし召せし事にあらずを半七が私情よ
 り起りて三勝といふ舞々に感弱し事みな稚君に假托んと較計しが既にその伎倆發覺ていひどく
 に言語なく猛に件の舞々を將て逐電せりかく證據分明なれば一旦のれん憤りを散され御父子
 和順し給は公私の幸甚しからんとさうさんしかるべきは巷談街説忽地その趣を更て郎君
 のれん惡名を雪むべく郎君是より行迹を慎給ひて君家泰山のやすきに至らん事みな御邊が孤忠
 にわり今こそわれ年を経てその便宜を見あはし傍邊の忠義の二郎太夫が命にかへて聞えおびぬ
 でたく歸參さしまうさんこゝろ得給へと説示せば半七ふかく感激しこの謀行ひ易し只うけがた
 きは彼舞々を奪ひ去り一日こどもひどつに住まは眞の不義に似て潔よからず是丈夫のせざる所
 欺不便ながらさし殺しわれ又通にその地を去て自殺せば後の患もあらず皆是忠義の爲にはわれ
 と罪なき女子を殺したる半七か命を捐なば彼女子の親族も恨るよすがなかるべしといひも果ぬ
 に厚倉の頭を左右にうち掉て赤根氏の言たがへり彼もまた人の子なでうむじんも殺すべ
 きせめてはそれに添臥さし不便をくばえて賢しくどももろとも世を渡りこの事は預しら

三勝親子を引放ち愛を見する罪障を贖んこそ義士の所爲なれわれ又方便をめぐらして彼が
 身價を外ながら平三とやらんにとらすべし血氣に乘して人を殺し身を失ひ給ふなど理を述て
 とゝむれども半七是をうけ引ずいはじと思ひしが事こゝに至て己とを得ず心くるし昔がた
 りを聞てさこそ察し給へ某稚かりし時結號したる女子ありその名をばれさんと呼びてわが
 父には再生の恩あるもの不幸にして九才の冬ゆくへしれすなりしより今に有亡定からずされ
 ば近曾園花を娶りし事元來わが情願にあらずまばく父に逼られてその命に悖がたく彼園花を
 娶るといへどもいまだ枕席を共にせず是ふさんが恩義をれもふにありまかるに今舞々の三勝と
 やらんを伴ひて所謂五十歩百歩のまさとこの條の事によつて多年の志しを轉すべきにあら
 ず只これを一生の物いひれさめとればされて老てはいゞと便なき父半六が久後をよきに頼み奉
 ると手を膝に置忠教を神も佛も憐て端なく奪ひ去らせ給ふ三勝は結號せしれさんとは思ひ
 もかけず殺さんといふもあわれ厚倉の縁故を聞ては諫んやうもなく比稀なる壯士に濡衣を披
 せ命さへ隕するかとばかりに湧うちかみていふとなし秋の暮の短くて鶏も啼に入相の祇園精
 舎の鐘の聲常より耳もあたらたまり既に時刻になりぬとて厚倉やをら坐を立つ半七を見かへり
 てわれまよや退るとさうすまでにあらねども提りて爲損じ給ふなといへば半七莞然として心易
 く思ひ給へ甲夜より彼處を徘徊し潜よつて奪ひ去りもし家にあらずと聞かば歸る途中に埋伏し
 いづれこの夜をいたづらにあかしはせじと夕間暮八月の天の定めなくまばしと曇る雨催ひ出べ
 き月の出やらねと客と主が影三ツ磨あびたる武士のこれや鏡どらひつべしこの日今市全八郎布
 施蝶九郎は既に謀を定めて管領家の走卒を総介し直にその所を走り去りて日來認りたる於
 呂世の橋尖足平脚平といふ惡混に金を與へてこれを相語ひ日の暮るしをまちて蝶九郎は剣どり

し衣服袴を被て件の走卒に打扮二人の思詰に橋を釣らして笠松が家に到り管領家の迎なりど
くく参り給へといふこのとき平三は眞葛原へ赴ていまだ歸り來らねどやらんことなされん
方より迎の轎さへ給はりしをいつまでか待すべき父の歸り給ふに程もあらじとて三勝と夕間暮
の心忙しさに蝶九郎ともまらず會釋して外面に立出門の戸鎖まで鍵をば隣れる家にもてゆ
き如此くにて参るなる今にもあれ父のかへりのあこゝ舞の衣裳の跡よりもたしのひねと盲告の
ひてよと詭れさ懸て轎に乗移るを程もあらせず足平脚平もろ肩入れて掻出し足に信して走去
れば蝶九郎は嚮より物陰に立潜たる至八と面を合し僥倖よしと私語あひ橋に引添走る折しも半
七はや、三勝が家を尋當と見れば門は鎖したり隣れる家に立よりてそれがゆきぬる方を問ば主
人東の河原を指して尋給ふ三勝は目今人に招れてまいりしなりあれ見給へゆく挑灯こそ彼が乗
たる橋なれと聞もあへず半七信と見かへりつ、それやつてはといひかけて飛がごとくに追蒐た
りか、りける處に平三とこの日管領の走卒が歸りし後猛に眞葛原へゆくべき事出來て申下刻
より其處に赴き思ひのゆかに時をうつせし程に今とはや三勝が管領家へ参る比及ならんとて只
願にこゝろ焦燥昏たる道を喘ぎく三條河原を走り歸るに河原を東へいそがする轎の内より半
垂たる振袖と挑灯の火光に見れば柏に大の字の摺箱して紛ふべうもあらぬ三勝のあな不審とこ
いろづきては轎夫さもが爲体も何とやらん怪しきに引添たる走卒の晝見し衣服を被たれどそ
人に之をらす今一人手拭もて面を裏たる武士は向に三勝が身を償んとて且が家に來たりし人
に似たれば矢庭に橋の棒端掴で二歩三歩押戻しはわが女兒を何地へか將てゆくやと問れて四
人もろどもに驚とせしが少しもさわがでそは問までもなし管領家へ召さるゝを無禮せぞと叱り
退走り去らんとせざるを平三はなほ立ふたがりて一步も運せず管領へ召さるゝならばかくては路



こそ違ふたれいで野導いたすべしといひもあへず取たる棒端引たぐらせば蝶九郎等大に怒てこ
 は過言なり狼籍と這奴息の根とめよと 闘にぞ橋夫どもは橋扛目打てかゝる息杖を平三閃りと
 かみ潜り右と左へ打ちかはしつとづけ入りて足平が息杖を奪ひどり諸騰越て雄子なる小溝へ撲
 地と打倒しあがらんとするところを疊かけて打杖に肩間四五寸打割れ泥に塗れて死てけり續て
 かゝる脚平は胸さかたたく突破られ阿呀と叫て仆れ墮す今市心駭きながら壁をもかけず抜打に
 切らんとする刃の光に平三はやく身を反り息杖をもて受とめ追つかへしつ研むす折しも降
 来る驟雨お蹴揚の泥の飛花落葉いとも烈しき太刀風なり蝶九郎とその隙に橋の越戸掻揚て三勝
 を引出し手拭を口にはませて肩お引かけ逃んとするに半七もまた三勝をこの處に追蒐來たりし
 が岸の柳に木かくれて事の容子よくしりて吐嗟と忽跳り出ゆくべき前に立たりける蝶九郎
 と思ひもかけず半七に遮留られこのろの中大に勝逃とも脱さじと思ひしかば己とを得ず三勝
 をうち捨て打てかゝる刃の下へ半七が握し拳を丁と衝出せばわれから助をいたく打ま眼
 みて刀を捨尻居に挫と倒るしも半七は見向もせず驚きまごふ三勝を腋下に楚と杜抱き河原に添
 て走去けり平三も全八もこの景迹に勢ひ脱逃に呆れて打もあはず双方一度に引ひかれかへせ戻
 せと呼ぶ心る聲の只いたづらに蝶九郎が耳に入りけん身ふるひして起あがり仇も身方も玉銚の
 路さへいど暗ければ彼此を索めぐれどもとやその人は見えすなりぬ

○眞葛が朝風

今市全八郎布施蝶九郎はその夜さう三勤を遊きて奪去や、三條河原まで來つるとき笠松平三に
 撞見相詔つる悪棍脚平足平はこれが爲に打殺され 刺へ三勝は赤根半七が引擡て往方もしらす
 なりしかば犬の追立し鴉を懸に尻られたる心持しつ平三をうち捨てこれを追蒐泥に塗れつゝ索

めぐりしが終にあはず真葛が原のはどりにて夜いしらくと明にけり甲夜の闘争より引つゞき
 しばしも立休らはねば殆疲勞て腹うち伸し互に面を見わはして呆れて立在折しもあれ捕手の夥
 士ばらりと走り来て直と、り圍矢庭に捕んとて聞くに全八蝶九郎と大に驚きこと何ゆゑに
 狼籍すといはせもあへず野袴の裾裾揚兩刀は斜にしたる壯俊徐やかにす、み出やをれ佞人ば
 殿の仰なると呼かけられ布施今市はます、慌眼を定めてその人を見ればこれ別人にあらず
 典膳が兒子蟻松曾太郎なり縁故さへ推量られ猛き光棍なれど胸うちさわぎてとかうの返答に及
 ばず只呆れて立たりけるそのとき曾太郎は全八蝶九郎を信とにらまへていふやう親視の盜臣
 吉稚丸に淫酒をすゝめ進ませ夥の用金を私し剩へ舞々三勝を奪ひ去りて三條河原を開し管領家
 の走卒を盗し事既に發覺たれば逃とも何地までか脱べきと縛をかけよとていきまきたかく
 罵れば件の兩人冷笑ひ吾情嘗て郎君に淫酒をすゝ免用金と私にしたる事なし況て三勝とや
 らを奪ひ去管領の走卒を盗りしなんぞは跡かたもなき事と思ひ悞て後悔なせそといとせもあへ
 ず曾太郎阿々とうち笠ひ盗人俾々としていへばいはるゝものかなきのふ笠松平三とやらんが門
 方にて管領家の走卒を殺しその衣服を剝とりて三勝を誑り出せし事證據分明なり頭陀平とく來
 のへと呼たつればとつと應て小松の蔭より年の齡四十あまりなる男赤裸にて走り來ついか全
 八蝶九郎とやらんわれを認れりやと問ば二人の驚とて汝は昨の走卒なる歟蘇生してはかなは
 じとて逃んとするに夥兵ども立塞たれば逃出る道もなしは思々しと咳けは曾太郎かかねて近
 曾吉稚丸の御行跡よろしからざるよし南都に聞に大殿のれん憤りふかく密に厚倉二郎大夫に
 仰て御旅館の爲体を窺しぬふに世の風聞に遠とすみな是汝等が君を欺きて私慾に耽る事既に
 露顯するによつて二郎大夫問者をもつて毎日に汝等が出居に意を着る程にきのふこの頭陀

平か怒殺されたるとき問者ゆきかすりて訝みそのはどりにて遺たる扇を見るお環て認めれる全
 八が扇なればいよ、怪み聽て仆れたる人を呼び活るに幸にして甦生れり且く勵りて名氏を問
 に管領家の走卒に頭陀平と呼るもの也只今舞々三勝が家へ殿の仰を傳て立かへる折しも如此
 々々の男後より走り來てわが咽喉をいたく締るとおぼはしがその後をしらすといふこれ疑ふべ
 くもあらぬ全八が所爲なめりと猜して直頭陀平を將て御旅館へ參る途中あれも又きのふの囁
 昏に奈良より來たりて二郎太夫と示しわはま汝等を擲捕らんとせし程にはしなく問者に行わひ
 審に一五一十を聞て頭陀平を伴ひ通宵汝等が往方を索めぐりてこゝに至れりまかるに頭陀平は
 やくも蝶九郎が衣服袴を見てあれこそわが物なれといふかすれば頭陀平を盗りまの全八蝶九郎
 が所爲なる事問ずして分明なりこれによつて思ひわはずれば汝等頭陀平が衣服を剝と着用なり
 し管領家の迎人へと偽り三勝を誑引出せし事疑ふべからずもしまからずは三條河原にて平三と
 やらんがなでうこれを阻むべき且汝等が相語つる足平脚平といふものは隠なき悪棍なるよし昨
 夜街の風聞にてまりぬさるからに二郎太夫は夜の中に吉稚丸の御供して奈良へ歸りわれをと
 めれたて汝等を擲捕するものかくても猶陳するやと責問は全八等ます、周章恨しげに
 蝶九郎が衣服袴を見かへるに蝶九郎いといふなは裝脱かねたる秋蟬の爲に捉らるゝ心持せり
 且して全八蝶九郎がいふやうまかりといへども吾情のみわしきにはあらず赤根半七久しく
 病と稱して五條の旅宿に引こもり吉稚丸の懸想し給ふ三勝を奪ひ去れりまかるを半七と縛ら
 れずこは遺恨にこそと咳けは曾太郎冷笑ひて人の非を擧げの罪を脱れんとするのこゝろ
 いよ、穢しわれ縛よといふよりはやくうけ給とぬと夥兵ども散動きたちてまづ蝶九郎が衣服
 袴を剝とり全八ともにも袴を括あぐるに二人の悪棍は拂退掻道てこゝろのみ俾れども手を

り足をとりていやがうへにたり累りしかば遂に逃るを得ず阿容々々と縛られつそのとき曾太郎は頭陀平に衣服を返してこれを被せさていふやう布施今市が好悪憎むに堪たりといへどもこの事曾頭家へ聞ては這奴等はどまればかきもわれ主君願昭の越度とならん然るときは夥の人の歎きと通宵いひつるとく這奴等と大和へ將てゆきて罪を家則にまかすべし其許の一命に恙なきうへは憤を散して世に漏し給などて叮嚀に勸解しかば頭陀平點頭てそはいとるしまでもなるのれ下郎なりとも管領家の祿を汚す者なるに人に殺られ衣服を剝れりともうさば却つていかなる罪をか得ん二條わたりには相識れる醫師もあればこれを頼てきの中途にて暴に病發三勝が家までいへゆかず醫師何がしが家に立寄て保養し思ひの外に一夜明せしとまうさんかればわがうへにも恙なく續井家の越度にもならしと信たちて密語ば曾太郎大に歡びてなほ言語を卑してその口を鉗るに頭陀平いよし意を得て至八蝶九郎に對ひ汝等われを誰ぞか思ふもこの壯佼の面を親にあらすどわが身を捨て引摺歸り立地に怨を雪むべきにかくと思ひまりつらんと罵りてさて曾太郎も目腫し脚て別去にければ曾太郎は布施今市を引立さし大和を斥ていそぎけりかくて頭陀平の彼醫師が家にゆきて縁由を物かたり其所より送られて管領の館に歸り形のとくいひこしらへけり是より先管領の近臣とそ夕くれに及べども頭陀平が應をなさざるを怪れ日暮て別に三勝が家に迎の人を遣し且その應を聞するにその人いたづらに立かへりて三勝が門は鎖して人ありとも見えすといふその不審き事として心苦しき思ひながら明白に主君に聞かたければ三勝はいたはる事ありとて來らずとまうしこしらへその夜をすませしが詰旦頭陀平やうやくに歸り來つ僕さのふ途にて猛に病發り遂に三勝が家に到とを得ざりまといふ近臣聞てさては彼舞舞が他へゆきたるも谷がたしとてふたしび問ともなかりけりこゝに又笠松平三はそ

の夜さり三條河原にて三勝が轎にかき乗せられてゆくを怪みこれを遮り留て四人の癖をばかみ剛しが又一人の武士樹蔭より跳出失庭に三勝を揺擾ひ忽然と走り去りしかば至八蝶九郎等をうち捨てこれを追留んどしつれども宵闇なるに風雨烈まかりければ終に及ず雨歇て後又磨の河原へ立歸るも脚平足平が打殺されたりとて彼此人立築ひ市の正の下主來たつてその屍と展檢し不とり近く寄もつがれずこゝに至て平三は且驚き且愁てれもへらくわれ一時の怒に乗て二人の轎夫をうち殺したれば自の罪は脱がたし三勝を奪ひ去たる癖者どもはわが推量に違さめれこれを明白に訴出て穿鑿すべくもあらすわか命は惜むに足らぬと三勝が往方もしらず又この冤をも雪ずしてみづから罪に當らんはと朽をし彼癖者どもはけふわが家に詣來て三勝が身價せんといひつる旅客にて獨にわが女兒何がしとのやらんの旅館に召されしとさわれも假初に面をむはしたるその人の郎黨に似たりよしや三勝彼等が毒手に陥たりともよも阿容々々とは伴れじ元來その心さま貞しく結髪の方の爲に節操を守ると世の人に勝たれば思ひかねて死もやせんしはし浴と脱れ去てしのびく三勝がゆくへを索彼を救ひ出して後ほどもかくもならめと深念し家にも歸らず夜の中に宇治のかたへ奔りて平等院の片ぼとりふふかく隠れ潜に浴の爲体を聞くに件の足平脚平の隠なき悪棍にて死後に舊恩露顯せりこゝをもて彼等を殺せしものゝ往方を尋索る事等閑こと風聞す平三のこれを聞しより少じはこゝろおちるたれを猛に浴を立退しかば世の貯もなくとやせまじかくやならましと思ひくらしけるが昔もろく零落たりしとき奈良にて管樂を賣たるに彼所は世をわたるに便宜の地なれば今度も南都へ赴くべしとてやがて宇治の旅宿を立出直に彼地に到しが昔相識れる人もたはくは世を去りて頼むべき者もなししが程は衣服を賣なごして旅籠に宛たれどこれも竭ていよすべなくふりたる笠を戴さばや

かなる 杓をもちて観音の靈場を順禮する行者に打扮日毎に南部の街衢を徘徊し往來の人の袖に附るは商人の店前に立在て乞食しやうやくその日の露命繋さぬ

○百度の願事

厚倉二郎太夫春は密に赤根半七と謀しあはし彼に三勝を奪ひ去らば相伴ひつる蟻松曾太郎の親に立まざりて忠義の壯俊なればこれには謀を授て全八蝶九郎を擧捕り後より來給へと聞けりさその身之半七が五條の旅宿より直に祇園の旅館に参り吉稚丸に嚴君の怒を甚だしき趣を告今市布施が奸惡半七が孤忠すべて潜やかに演説まどく／＼橋に乗れいへ南都へれん供つかまつるべしとまうすに吉稚丸は是彼の事を聞てふかく後悔し且父の怒を畏こみ全八蝶九郎が奸佞を憎みざるにても半七に不忠不義のぬれ衣を脱せてわが恨を繕んと罪いよふかし只白に勸解奉りてもし許されずは潔く自殺せんと回答つ、思ひ定たる氣色なるを二郎大夫は頻に感激して涕うちのこさすかと續井家の郎君あてましますまかばはわれど君は一國一城の世子にて坐するにいかでか小節にかつらひて身を塵芥のとくなし給ふべき今ごろにはや半七が彼舞を奪去たるにてわらんずらんもし御恨を明白にまうさし給ひ、彼が忠義のいたつらなり彼を不忠の罪人となし給ふとも大殿のめん恨解て後召かへし給はん事君のけころにありしかれば何事もしほしが程なり二郎大夫がまうすにまかしてとく／＼歸館あるべしと理を尽して諫こしらへ俄頃南都に誘引まらしてさて主君順昭にまうすやう 僕頃日間者をもて吉稚君のれん言行 近臣が出居を覗はせしに稚君のれん恨は露ばかりもなく是近臣等がなせし僻事なりその故は箇様々也とて全八蝶九郎が爲体審にこれを告又まうすやう赤根半七出頭して吉稚丸の恨をうけ給ひりながら病着ありと偽りてひとり五條の旅宿に引籠舞々三勝と

いふ淫婦と密通し人口を憚り後難を怕れて全八蝶九郎を相語ひ彼舞々を吉稚君にすしめ進らせ酒宴に侍らせんと計較しが事發覺て罪脱れがたくや思ひけん三勝を伴ひて何地ともなく逐電せり全八蝶九郎等は後れて脱れ去らんとせしを蟻松曾太郎擧捕て引來れりかくの如く證據分明にいへば日來のれん恨を散され御父子の對面あらまやし稚君の何事も思ひがけ給はぬに御怒の甚しきよしを聞食てうち驚き給ひ直に浴を發瀉ありて今朝かへり入らせ給へどもふかく畏りて老臣等にもあひ給はずいと痛しく見給ふあこそと言語を竭して聞に上れば順昭つく／＼と聞て近臣等がうちも揃て非法の舉止しつるをしらで父に愛を失れんとしつる事吉稚が越度なれど彼は年なほ廿にも満ずいはし乳嗅の兒嗅へかばかりの過は免すべき歟近臣等が亂行はその罪を宥がたし就中赤根半七は物の用になつべく思ひて老たるかたにも立勝らし日來重く用ひたるに恩を蒙て恩をまらざる徒に彼が往方は草を茹拂ひても索よ汝典膳どもろどもに全八蝶九郎を鞠問せば半七がゆくへもなきかかれざらんとて小膝を敲て仰すれば二郎太夫 睡でこれぞうけ給へり又まうすやうかゝるうへは吉稚君に對面まし／＼て老臣等が心をも安からしめ給へかしとまうせしかば順昭さらば誘引來れといふそのとき二郎太夫は吉稚丸の子舎にゆきて一五一十を告導て舊の所へ參れば順昭ちかく吉稚を侍らま此度の事につきて近臣等が非法の舉止は主の恨なれど御身いまだ弱官なればふかくも咎す以後を慎いへと教訓す吉稚之始終頭を低垂さよしとまうして退出けりさる程に蟻松典膳之君命を稟て二郎太夫とにも全八蝶九郎を賣問に彼等は身の罪を輕せん爲に半七をあしさまにいなし吾儕愚にして半七に誑れ三勝を誘引出すといへども三條河原より後の事は何地へゆきけんどもしらすすべて此度の奸計は半七がころみとつより出たるに却彼ものは脱れ去吾儕のまかくからさめを見る事は

非に及ずとのを回答て殿しく責問さるその外の事をいはずさるによつて典膳之より半七を留
 み這奴柴賣の孫兒なりしにわが蔭を蒙りて近臣の上列り剩千々の寶にも換じと思ふ女兒園
 花を妻わはせしはその才に愛ればこまかるを彼犬自もの近曾出頭して朋輩にも敬るゝをれの
 が才學とや思ひ忽地にこゝろ驕りて君を欺き朋輩を相語ひ舞々と森通して見れにさへ面目を失
 はる事言語同断の癖者なり半七が事はとかく論するに足らずその罪は父といへども脱れがた
 しまづ半六に皺腹を切らせすこの憤のやるかたなしといきまきて彼父子を罵ると面あたり
 に居るがとし園花は又父の怒の烈きを見るにつけ聞くにつけて妬しと思ふ氣色はなし半七が
 往方ねばつかなくいかなる樹の蔭草舎の簷下に立あかし給ひけん衣手うすき秋風に又も病着の
 發はせざる歎久しく病て坐せしどもしらざりければ音耗も等閑に過たるを心つきなしと恨を給
 ひけめ男子と生れたるかひには婢妾もあるものを況て旅舞の徒然に他し女子と假初の契りを
 結び給ふとも命とらる、罪にとあらましかるを腹のたつま、に縁由もしりたまはぬその爹々さ
 へ殺さんとは理ともたばえ侍らずそれこそわが身の妬めて眞を殺せたりなんといはれんと
 生る日の物思ひ死て後の迷ひへ何事も折あしくて彼人の在さねばあはさまにのみふならんさ
 るをよき問も考すむじんなる事し給はゝわが身まづ自害してうせ侍らめ人しれぬ歎して待か
 ひもなき夫の心の底は解すとも顔見てくらすば思ふよすがもあらんこれ又わはでの森とな
 りまさるけふやこの身のそりか父を諫め母にかこち聲を借す泣沈先ば敷浪も半七をばに
 しくは思へども女兒が貞操のよのつねならぬ蓋てやうやくに思ひかへし夫を諫め寛るにぞ典膳
 もかく園花に泣かたれて勇きこころもよはりつ、終に半六が死刑を放て彼是の罪状を定め
 二郎太夫と、もに主君に聞えあげてまづ全八驛九郎を追放半六はその子の罪によつてながく出

仕とて、免らるか、りまかば半六はわが子の爲体を聞しより且驚き且怒り只薄氷を踏こ、ちし
 て憂苦の中に日を過せしが終に出仕を止られ直整いたすべし典膳二郎太夫これを傳、僅に
 命を繋ぐばかりなる月俸を給はりければいど、まゝ遺恨に堪はずればこそ半七が日來博士より
 て明の諫を用ひすこの、願を惹出せり這奴憎しと思へどもさすかに恩愛の悲しさとその往方
 もみもどなくあるときは怒り罵り又あるときははうち歎き天日、明なりといへども日家のみは
 いど暗く絶て訪人あらざれば憂を慰むよすがもなしげに榮枯得喪は四時、の代、謝がとくもえ出
 る梢の花後るゝも先だつもいづれか秋にあはざるべき彭祖が命長かりしも子孫には傳がたく石
 崇が富貴なりしも生涯を過すに足らず徳なうして資からんと願へば危く富て驕ものは亡どかや
 願福吉凶を龜の卜部に問んより尾を泥中に曳にはしかず半六はこのときに米谷の、楠を伐たる
 事を後悔し輪縁が縁さへ思ひ出られて朽をしけれと今はそのかひなかりけりさる程に園花はま
 すく半七が事を思ひはそりて病ひに先、に彌増つゝふたしびうち臥してより絶て首を擡す元來
 想思病の事なれば醫師も眉根をよせ、速に之平愈しがたからんといふに典膳は安き心もなく敷
 涙は毎日に奈良の大佛に參詣し百度參といふ事をえて女兒が病着頼に本復あらせ給へど禱の外
 更に他事なかりけり是はをてれき笠松平三は奈良の巷を徘徊して歌祭文を唱へ乞食して日を過
 すに頃しも九月の廿五日になりぬけふと高天神の會日なればとて彼社頭に立在參詣の老弱に袖
 乞す浩所に領主の代參かどればまて從者五七人を將たる武士門前の茶店に憩ひ馬をば店前
 に繋がしその身はたぐまりたる所に入りて主從割籠を披くにぞ平三これを見てやがてそのはと
 りにいゆき從者に對ひて飢たる願禮の行者にもたぐといふその聲や漏聞えけん主なりける武
 士若黨と呼てしばし何事をかいひまらすれば件の若黨こゝろを得て平三を呼び入れ飽までに飯

之食していふやう汝今飽たればとて翌まではよも有たじこしになはじが主の食殘し給へるわ
り割籠とともにもてゆきて夕登にせよと宣ふるにやがて索もて真中をまかど括りこれ提て
ゆけといふに平三は 數回押戴り割籠を引提つし又社頭に至りて錢を乞や、申の下尅に及びて
いつもの寢所を繕んで大佛堂へ赴きしが又物はしくなりしかば高天神にて得たりける割籠
をひらくに思ひもかけず飯の中に一包の金ありて三勝が身價と書つけたりこのいかれと驚き怪
みつくづく尋思して縁故を推量るに三勝を奪ひとらえたるのこの領主なるの世の聞かざる怪
りわりなく奪ひ去らして後にかくはからはしたるにや又三勝が舊の養父に五條の村主にて結髪
の夫も彼所にありと聞けばそれらが所爲か二ツに一ツは叶へからず遮莫日れ許さず彼も承引
ざるものを心穢く計策ながら今更この金をもてわが心を蕩さんとするころいよく腹たしけ
れ高天神の茶店にて問は、彼武士の名氏もしれやせんとして俄にその茶店に走り行け割籠を披
給ひたる如此々々の殿と領主の御内にや何と名乗給そぞ常にこゝに憩給は、まりてぞればす
んまらし給へといふも彼人答て彼人のけふのじめて憩ひ給ひたればわれもまらざといふにすべ
なくて次の日五條に赴き赤根半六が事を問に里人等がいふやう半六ぬしは近曾閉籠られてた
する也縁故は息子半七といふ壯俊郎君のれん供して京に赴き三勝といふ舞々ど密通し逐電た
る罪によつていふ平三これを聞てはじめて曉得さて三條河原にて三勝を奪ひ去たる壯俊
こそ結髪の方赤根半七にけれもふに彼もの父の志に悖りたかりしに寸の供して浴にあれば
その便宜を得て密に名告あひ婦夫もろどもに奔けんかすらばなきて一言とわれにも如此と聞え
ざるどもしらすして方人せし 徒と挑み闘ひ人を殺すの罪を得たり寔に親のこゝろ子まらずと
いふ世の常言をよしありけるもし實の女兒なりせばかくまでにあるべからず今と思ひたたり

○夜半の月

この身價も何せんとうち恨みつ、又思ふやうさるにても不審この金に彼等さる爲体にて奔た
らばこの身價を贈らんやこれにこふかき故こそあらめとどにかくこの地をばつかなければ彼
割籠を與たる人あめぐりあはまほしくて領主の藩中を徘徊するに乞食なれば内へは入れずま
すく、飯に臨先ども件の金をば一枚もうしなはず元來聖をもまらぬ罪人の身なれば、怒に人な
みなる世を渡らんとし思はずなは奈良の街衢を徘徊してまのびくに三勝が在所を索るもひの
外に月日を過して四年の月を經たりける

さても赤根半七はその夕三勝を追蒐三條河原にて全八蝶九郎等が平三と挑み戦ふとさし追者矢
庭に蝶九郎を突仆して三勝を小腕に扛抱つし闇に紛れて走り去河原傳ひに北を斥て吉田の森を
うち過ぎ白河山の麓に至る比及に雨も歇て更關たり月は出ながら天はなほ結陰で路くらく性來
も既に述絶しかばやをら三勝を扛抱していふやう縁由を告すして理なくも將て來つればさ
こそ懼しども思ひけははじめそなたを誑引出せしものども、且が朋輩にはあれど彼等と謀じむ
はしてかく計策たるにはあらず彼の彼がじもて私怨の爲にしわれはわがまゝもて忠義の爲に
す審にいはんはながくしまづその概略を聞えしらすべしぬる頃そなたを祇園の旅館に召さ
し給ひたる郎君はすなはちわが主君にてやんとなさ人に在するなり潜て浴に遊び給ふから近臣
に至るまで明白には名を呼ばず淫酒に耽り給ふ事は佞人ばらがす、めによれど世に聞かばすべ
て郎君の越度となりていかなる 禍の出來なんも量がたしさによつて大殿ふかく憤ればし
速に召かへして愛子を手づから失はんとしなさ給へば家業等みな手に汗を握りて周章大
かたならずともまらざれば佞人ばらひたものすしめて郎君を淫酒に耽ひなほふかき伎倆あるに

やそなたを欺きて奪去らんとせりまかりといへどもわが身久しく病によつて旅宿を異にし且出居も自在ならざればこれを諫奉つるを得ざりしにや、病着もたたり果なんどす折まもわれけふ同志の忠臣潜やかにわが旅宿に詣來て心中の機密を告そなたを奪去れといふこれ他なしわれとそなたを密通しその非を掩ん爲に郎君に假托身賄の事を計較その事發覺て奔りたりと風聞せば郎君のれん惡名を響べく主家に禍なかるべしと相語れしより親を捨身を捨妻子を願ずみづから不義の濡衣を被たる雨夜の暗紛れ西施を投る范蠡が志をいたせどもそれは通に質かはり縁も好もなき人を虐て忠義よとのしくいふをうたてくも鈍ましくも思こんがかくせざればわが主家危く家祿老黨のさらなりその妻子に至るまで悉く離散せしむその人の歎ならん身を殺して夥の人を助くるなればと思ひ諦め、深く憂れてたべ鬼々しと思へども忠義に換る慈悲のなしまかりとそなたを殺すにはあらずわれも又所をかえて腹かさ切仇も怨もなき人を殺せし罪は贖ふべし又そなたの親何がまにこそれとせし折をもてこの報をなすべきよし同志の忠臣に聞えられたれば後の事之心易かれ縁故はかくの如し不便ながも盛の花を散らす忠義の太刀風を彌陀の利劍と觀念し佛果を得よといひもあへず閃りと引抜く刃の電薄がくれに三勝は吐嗟とばかり飛退を聞わさなしと半七が又突かくるをかい潜り装蹴かへす夜あらしに山川の音凄しくわれや〜と呼ぶ聲も妻戀鹿の友音のみ應て助くる人もなま三勝は稚さより舞に手馴て身も軽く半七の又はじめよりこゝろ得さして殺さんと思へば左右なく打もかけず追まはし逃迷ふ是や叫喚大叫喚氷の地獄焦熱の玉なす汗に身も冷て脱れかたの下にたつ三勝今はかうと見てやよ待給へ只管に身を脱んとにわあらず忠義の爲と宣とする事をわきたる壯士の遊とて脱し給はんや命とらるゝ迎ともいさまら河の山に來て紅葉と、もに散果る身の

秋をいかにせんみな前世の惡業なりせば人を恨るよしなけれ故ありてこの年來生死もまらぬ母を慕ひ浮世の義理に絆されて思ふのみにてわもあはぬ人に一言遺たしなからん後にその人に傳へてたべといふ聲も涙に似て、曇る夜の顔は定かに見えねども思ひかねたる風情なり半七も臉をばた、さ鳥の死んじするどさその鳴と悲しく人の死んじするどさにそのいふ事よしといへり思ふ程之何にまれ聞でやは聞かへさらばとて三勝はいはんとするに胸ふたがりまはし涙を押し拭ひ耻はしき事には侍さわが父笠松平三は實骨肉の親ならず過世あしく三才のとき垂乳母には生別れ父は又わが七才の秋斧に墜て非命に世を去仇ある人に恩を棄、養れては恨を捐よし孝行は尽さずとも不孝をせじと身を省み出居を障子あけくれに隔す仕し養母さへ世を早うして後はいかなる故にか養父に疎れ九才の冬人しれず殺されんとしたりしがかたらこれし人の情にて命助りその人を父とたのぞて養育れ身丈伸ては反哺の孝に舞々とはなり侍れも稚さどきに結髪老夫に一トたび環會母の生死もしらまはしく耻を捨たる世渡も朗詠備馬樂早歌に人の心は慰れどわが懐きは慰るよすがも絶て泣顔をなはす樂屋の十寸鏡くらぬ探を符衣の露ばかりもわが夫にまらせまはしと思へども鳥帽子のかけ緒うちとけて音耗すればその父親に捨られたるを恨むに似たりしからば夫もいかどかりか心くるしくればすらん違すにあくがれ死ねばとて阿翁の隱匿を世にしらし夫に羞は見せじとてこゝと彼所にありながら遠隔居る誠心はどいかに今宵見もしらぬ人に忠義をたてして今の親には孝ならず色情ゆえ逃れ走りしかとなき名を人に誣るゝはいのばかり悲しけれ身の惡業は歎ども及ばず諸身養は夫の紀念内なる撥と母にあふ割符にせよとて亡父の遺せしも侍るなり涙の雨は絶す降る笠屋三勝が身の果をなからん後に傳てたべその夫の名はどばかりに咳りあげつゝ掩ふ袖ふ言の終は口隠りぬ半七は聞毎に思

ひわたる事のみなれば眼上にふりあげたる乃も耳も側てし數回嘆賞し舞子に桶なる孝心苦節ふかく心お蓋ることありもしそなたの乳名をねさんとはいはざるやと問は三勝驚き怪しそを以かにしてしり給へるもしその人かと思はずよらまくせしが眼前晃々く刀に油断せず又走り退く闇の方に鳴つし渡る熊が音も女夫か友かと思ひの天より晴るし雲の間に顯れ出る月影にてはじめで面をわとしつゝと見かう見れば稚顔と衣服に染たる大柏の紋は互にればえありこはむが夫にてははしけりげにねさんにてありつるよこはくいかにももろとに呆れまきふぞ理なるそのとき半七は乃をふさめて三勝を勵り扶け小章刈布もろもについでさていふやうわれ近曾吉稚丸のねん供えて浴にありといへども病着にぞちこめられたれば絶て一トたびもそなたに逢ず元來主従その名をふかく匿たれば續井家の郎君なりと思ひかけずやありけん嚮にも雨夜なるに心いそしき折なれば聲の聞つゝ、われも又吾姉子なりといひらざりき稚きとき別れしかば面がいはしつれども宵闇ならずはかくまでにはあらざりしとやりて刺も殺しなばさぞな悔しくあらんずらん嗚呼危かな危かりしるにてもそなたは豊田の山本にて荒熊に 銜去られしより絶て生死せしれず大がたは世になき人と歎き思ひたるに今の物語にてやうやくに曉得ぬみは是わが父のふかき箇あるをもて人しれず失んとし給ひけめざるを露ばかりも恨るをなくわが父の非をあらはさじとて家にも歸り給はざるその孝その貞感激お堪すわれは却いひがひなくも父の命悖り難くて近曾蟻松典膳の女兒園花を娶たれども前の誓は破らじと終に一トたびも彼と妾を共にせずこの年來朝な夕なにそなたと死せりや世にありやしらし給へとて神佛に祈願せし驗ありて今日今宵危窮に迫りてかく環會とこれも夫婦の惡縁ならんさて形なやと世をはかのみ園花が事はさらん吉稚丸病氣保養の爲浴に遊び給ひし事今市全八郎布施樂九郎が好悪 厚倉

が誠忠曾太郎が質行をへて京奈良の爲体一五一十を説しらま又いふやう父のよしをしをまうさんといも畏くも悲しけれと昔丹波都どのに誓ひ給ひたる事も榮利の爲に忘却し蟻松氏と縁し結ん下こゝろにてそなたを失はんとし給ひし事口れさへ面目なきにそれとまらずとも又やそなたを殺さんどせしと意忽の舉止に似たれどももし一夜なりとも伴はし身を擧ぐしがたしと思ひ定めし誠心は誰が爲と思ひ給ふもしか、らす名告あふすがも絶てあるべからず意に不思議の對面として首尾を物がたれば三勝涙を堰かねて釜々こととまれわが爲に他し妻をばかさねじと色にも愛す情にも引れぬ人の忠義もるにうきたる色情の名にし負ふ世にも勝れま 志を聞ては何か恨と侍らんわかれて後はいひしらす言の葉守の神と在ねや柏の紋を舞の名に呼る、までと思ひわふ君はまさしく大和路にありとしりつ、妹と夫の山のかひなく隔られ心にかゝる朝な夕なくらも雲のたぐすまひそなたの空のを懸てい月も日もわが爲に照らし給はぬかとかち侍りしがや、名告あふて年來の 志はいたしたりかくは命も惜からず今の養父は平三と呼ばれて與き世わたりはすなれや心さまは立勝りて財寶の爲に惑され信義を失ふ人に在す恩愛もいどふかさに思ふ程と孝行もはつとさす又母の死生も問定めずして墓なくなり侍る事と悲くはあれど縁故もしり給ひぬ園花のどやらんに妬れんと罪なほふかし御身の忠義になるならば殺してたべとかき、説芝生に坐を占掌を合し白く妙なる項を伸一花咲る姫百合の散すを運しとまづ程に半七ますく嗟嘆してわれそのはじめ殺さんと思ひ定しし身を 潔くせんとしてなるに既に吾妹子なりとまりてこれを殺すの義に違へりさればとて夫婦もろどもに存命ては事を忠義に假托て逃も躲れもまたりなんぞいはんは影 護 厚倉ぬしへ面ぶせ也さればとてそなたを殺してと丹波都どのへ誓給ひし父母の言語もいたづらなりそなたのどにかく存命て程經なば平三のあ

尋ねひ孝行を尽し給へ義を守れば不孝なり只死すべきはわが身ぞといひつゝ刀を抜かれば三勝
 慌て掛り留ては涙まじき事を給ひそ忠孝に身を殺し給ひなご三勝ももろどもに死ねとはいひ
 で生残り物思へといと情ある言の葉に似て情なしよしや人は何ともいへ親と親とが替つし許せし
 御身の妻ならずやもろどもに世を去ては影護しどればしなば日が身こそ死べけれいと理なしと
 恨ごち携添たる刀の柄に落ち涙の玉も散らす敵人の歎きもかくや哀れなり半七は三勝
 に諒られつゝくと思ひかへして刀をたさ先けにわれながら恨てりそなたも殺さじわれも死な
 じ潜にこの地を立退て一口も妻と呼び夫と呼ばれて年来の節操に報ひ亡母の庭の訓も忠も
 義もまもり袋を絆なる今もこしあどかさ分る胸の鏡もあひ見ては樂昌公主の故事も慢に思ひ出
 られつ請給へとて身を起せばわが身もこゝに三勝が項より外す掛紐も是やふた、びむをふの
 神送身代の形見さへ全聚も悪因縁よしそれとも郎君のふん悪名だに雲なば夫婦がうへは數
 ならずといへ父のわかれゆえに罪得給ひんかと思ひやる大和にあらぬ山の袂をふりさげ膽れば
 月魂もや傾て木の間漏る遠寺の鐘も音つれて草葉に集たく虫の聲いど哀れを十寸穂の薄
 かきわけて夫婦後になり先にたちてゆく程に白河山をうち踰て湖水を見れば蓮や日かまが
 くす蔭もなく天はほのくど明にけり
 かくて半七三勝のさせる由縁となければ近江國多賀莊は佐々木の一族在城して浴へも遠から
 ず世にやるに便宜の地なるよし豫て聞るともあれば隨て彼所へ赴きて僞居すまかるに此ころ三
 味線といふ樂器世に行れてこれを嗜むもの多かりこれなん三勝が父丹波都が彈初たるものな
 ればいと昔を忍ばれて三勝は浴にありける日よく倣ひ得たりしかば彼此の女の童あ彼三味線
 を教半七は男の童に手述の指南をして艱難の中に月日を過すにその年の十月より三勝有身て女

子出生す親の手づから守養育子と思愛もひとしくふかければ夫婦は只掌の中の玉と慈みみ
 の名を阿通と呼びつ而影は父母に背ていと美麗なりさる程に光陰矢のとく又梭のとくれ通は
 や五才になりけるが母三勝が毎日に彼此の女の童に教るを聞なれてまはらぬ舌に柳節頃ふも
 可愛しかりけれ家は究て貧しくて只ひとり子を養ふだに物足ぬ事のみなれば夫婦をりく
 談合しこの所世をしのぶには究竟の地なれど山ふどころなれば絶て大和の音つれを聞よすがも
 なく洛の景迹をしるふよしなし鎌倉は洛にも劣るぬ都會の地にて諸國の人の集合どころなれば
 外ながら大和の父の事も又三勝が養父平三が事を傳聞くよすがもあらんかどて家財を沽却去て
 路費とし親子三人多賀の莊を首途まで中先道を下りける時九月初のじめにて住つかぬ旅籠
 も塞しゆきく水薦菊信濃なる香掛の驛に宿かりし夜半七俄頃にしてこゝち死べくたはば
 しが終に風漏となりて腰たす藻鹽草かさあつめて齎したる路銀もこゝに至て用ひ尽し進退究
 りていかにともすべなけれと三勝といとかひかひまき看病ししはし程は衣服を賣て旅籠を賃
 ひ薬の價にしたれどもいく程なくそれも尽たりしかれどもしらぬ里に來ては物借べき友もあ
 らずかしりせば今しば多賀にわれかしと悔思へと思ふのこゝにてそれもかひなま一夜々々に寒け
 くなれど親子が病はなほ夏のまゝにて又やれ通さへ病もせんかどて父母はいど心くるしく
 通は友もなき旅の徒然に堪ずこの廣き宿よりも舊の狭き家か住よし翌て多賀へ歸らし給へとて
 位にけり彼を見我を思ふにも半七はいよふ肥たちかねて鰻魚の泥に吻くに異ならずれば三勝
 が心はそといかならん寔に是苦中の苦この秋は只ねが身ひとつの秋かどてかこつなるべし
 ○ 羈旅の宿の上
 半七が宿のりし香掛の客店は驛稍盡處にていと大きやかなる家なれど昔しのふの生茂る埋れ井

の車といも身上久しくまはりかね網代天井之中孕て雨漏に煤を彩色壁の腰張悉剝て長押より月をも引べく高麗縁の席薦どころく切れて藁を扉とせし故事も思ひ出られ竹縁は斜に朽て絃断し琴にも似たりさればこゝに一夜を明すもの或は廻國の修行者或は伊勢參宮の男の童囉齊物まねの乞兒なんぞな米はそなたより出して炊去枕一ツを借りて燈火だに置ず午は牛つれの一隊鼻より脱る訛聲にて小曲子驚しく諸ふあれば欠の跡の念等を聞答て物あらがひをる題目宗あり聲の高きは山里の老翁眼の光るは浦曲の家々にや朝だちすどて草鞋穿かへられなど罵り菅笠踏潰されて同行の面汚せりどていきまくもをかし衆皆出去たる後は大風の俄頃止たるとく掻ふどせし風の外にはどり遺たるものなし坐敷いく間もあるかひには三勝は一間を借て病たる夫を臥さし破換もて出居のうたを塞きたればかゝる從ともいふ事もあらねど毎夜にかはる彼此人のうち語ふ聲を聞て慰る日もあり又わがうへに思ひくらべて世を觀する夕も多かりかくて半七はこゝに病臥してより思ひの外に日を過し物みな枯竭していよすべなし常言に坐して食へば山も空しといへりよじやいかなる恥を忍ぶとも夫を濟ひ女兒をも餓ひさせじとて三勝とますく志を勵した通がもてあそびの三味線は彼がいと惜むものなれば近江を出るときも行李の中に包入れてもて來つるが皮も破れたれば是のみまた賣らず三勝はこれこそ究竟のものなれと思ひて毎夜に笠をふかくしりのびくりに彼三味線を抱て街を徘徊し人の門に停立つ、ころにあらぬ郷節(後投節)といふ故あり之を略すを語て錢を乞米を得てその日くを過せしが靴通をばよく睡らして出るほかに絶てかくとばえらざりけり半七は又三勝にかく淺ましき所行をさするとみなこれわが身もえと思ふにもいよ、世の中を形なくれやえて顔色もや、憔悴ある夜三勝が出ゆくを目送りつ、嘆息しうたてやなわれも一トたびと續非家の近從に召れ君父の

際とはいひながら人なまの世を經しもの忠義の爲あ不忠といはれ不孝の子となりしより半七なれども日を算て食ひ世は暖なれども日か眼には春色なく千辛万苦にあふと路なる多寶に住わびて出たるが又や旅籠に病馬の妻子に憂を見するこそ日か病者より苦しけれ然る三勝が信々しく晝の終日看病し夜の恥を忍び門に立親子三人が玉の緒を三すぢの糸に繋きとむるその三味線の手の内を受る扇は名も高き舞の太夫のなを事敷しげれ松山筑波山降りて今の離節もこゝらの人にと馬耳東風かゝる時にも藪の身を助るほどの薄命大和にありて三勝を妻とした通を産まなば乳母に抱し傳て假初の出居にも商人等には會せもせ老それ悔しとは思はねやわれもゑに三勝にいくその物と思はせて舞子に劣る乞食をさまつ見つ、存命ていたえて世にあらかひもなし白河にて死すべかりしに彼が心操をいたづらにはなしかたさによしなや六年生延ていと、歎をさしたり貧の病に身の病片輪車の足腰た、でいつまで思ひ沈むべき慈にわが身わればこゝ彼等は人に寄がたけれわれなくは人も憐みよるまき方に給事て立まざる事もあらん親となくとも子は育つ歎くの愚痴敷子を思ふ程には親をたもはなくに父はいかにかなり給ふ園花も今ころは他し縁しや締びけんもしまからずは恨むらんとててもかくても活がたさわが身を捐なば妻や子の又浮む瀬もありぬべしとこゝろひとつお覺期してさて翌の夜を待にけりともしらすして三勝はそのよる五六合の米と二三十の錢を得て二更の比及ぶ立かへりまづ夫の安否を問に通が睡ころげたるに枕さし曉の炊を眺へなまきまつ小夜ふくるまで半七が腰を掻擦り行未來しかたを語り慰るに半七は今宵限りの名残ぞと思ひしかばこゝろよげにうち語つ、且だて三勝の夫の睡れるを見て潜やかに手を休めつ、物を引被けた通を搔抱て夫のほどりに臥し詰朝とく起て火を乞粥を煮さして夫と女兒に食しわれは餘れるを嚙りて終日看病すその劬辛難難は此

んにもものなかるべしかくて三勝のこの日又宵の間に街に出て物を乞ふとするにね通は晝寝した
ればにや常にかはりていまだ睡らず半七が顔色もさのふよりあしう見ゆるふ出かねてどかくす
る程に初更の比及にも向とすわまりに思ひかねて夫にゆふやうこの夜をいたづらに明しては
翌の炊をいかにせんまかばあれ今朝よりわきて食もす、と給はじれ通さへ睡らぬに述を慕とい
便なかるべし今宵の出ずもありなんかといふに半七答ていなわが身食のす、まざるは立居自在
ならで内の透ぬ故なれば思とするに足らずね通をばどもかくも賺こしらへて睡らすべ夜毎の
事なれば遠近は出ずもかなと思へども翌の炊に物缺てはいよし便なし更ぬ間にどくゆきてとく
歸り給へといふ三勝聞てさらばしかいたをべえ枕方なる火桶に火も活て土瓶に湯もぬるまじて
侍り脚へ登んとて強て身を起し給ふなれ通に指燭を乗し坐行つ、ゆき給へよ彼處の竹様は半朽
て侍りたなじくはわらはが踊るを待て物と、のへ給へとて叮嚀に聞けれささて三味線を袖お抱
きて出んとするにふ通のはやくこれを見て母何地向か行給ふなぞ伴とま給とさるその三味線
はわが身の侍り返給へと携着聲高しと思へどもとわりなれば打も叱らずそなたを將てゆく
べうは思へども西の街にはれさろくしき豺出て人を噛といふを聞ずや大人しやかに留主致し
て蓋さまの陪従をせば小麦の團子を買て得せん又この三味線は皮も破れ海老尾も缺てあり皮
張更で得せんはしはし母に貸てたべと賺されてうち點頭しからは皮を張がへさしどくもて來
て給ひれや應もて來さらんやもて來べしよく留主せよといひかけて夫のかたへ注目し尻切(草
履の名)穿て足ばやに暗の方へと走去ぬ折しもあれこの夜は合宿の旅客もなく物たべの翁只一
人こゝに歌りて半七等が次の間にあり夕登も既にたうべ果て庵厨ののたをさし覗きこの夜の長
きに宵寝せんはいとぞしそこらわたりを一睡すべきこそといひまらすればあるじの男見かへり

てさても慾にはふけぬ間ふ歸り給へと應じてうち笑へばうち笑ひ外面へ立出けりかくて三勝は
こゝろは夫子に引れつ、彈がでかなぬ糸竹の節さへ音さへたちかねれきその身はこゝの門に
立彼處の簷下に立在はわれに等しき物たべの目鼻のあたり切抜し紙の假面もあやしげに撥もつ
臂を曲物の槍の腕に竹を掉三條の糸をかけ聲もくりかへしくりかへしれたなぞ唱歌を一口に「と
ぞ中ける」と唄つしひとつ街を徘徊す(按ずるにこの後寶永年間武江にも又とぞ中ける」とい
ふ乞食ありしにやちかこちある人の所蔵にて、こ双六といふものを見しに又この圖あり)折し
も九月十八日の月出て外より寒き山里は虫の音絶て遠破の櫓いそがしくなりまざる世のいとな
みぞ哀れなるる程に半七は病臥て旅の宿を立をかたき盛のこし路に隣る信濃國香掛にくつ
をれてわれから急ぐ眞土の旅せめて一ト筆遣さばやと墨斗に筆は染ながら手さへふるひてそれ
も及ずとせんかくせんと思ひくしたるがね通と日來記憶よく多賀莊にて女の童に母が小曲を教
しどきよく聞とりて驅ひしかばこれに教てなき後にいせんものをとひとり點頭やよれ通久し
く伊身が驅歌を聞かず母の歸り來るまではいと徒然にねぼゆるに驅て聞し給ひてよといふ今
宵の遺首をいひ習せん下心とはまらねども稚こゝろに物あらたまりては恥しく驅ふとは唄ふ
べけれと三味線なくとはいなくと頭を掉をとわりもいひがたければ父はなほ胸苦しさを感じ
るし微笑て是はさて三味線なくとも唄る、近ごろ流行赤もの、まなく唄ひ給へといそがされ
それも久しく唄ぬ間うち忘れたるどころもあらは教給へと愛々まなく小膝なほせば半七とこれ
くど母親が忘れてゆきし破扇を遞與ばね通は拍子をととり聲はりあげて唄ひける
○赤き物のまなく(左の唱歌は慶安二年の印本尤草紙上の巻第廿九張に見えたり編者の自
注に是こ一トとせまゆらくの城の時分京童の小歌也といへり

「まうそく赤い事申そむらさきのしきもんかくに妙覺寺の二王門白万遍の淨影堂天満のかねの赤つらの明王天火いなつま朱すりほういな殿の狐火祇園殿の犬子山王の鳥居後がまりは真赤な早川主馬のふんぞしすわうか紅梅かひさやひじゆすひぢりめんひざんす比古のいひつしき綿鑼殿のさんちやくたんしやうきのもちやうり小野木殿のかわらばなぬ殿の御門ゆふけいのこしよし朱ざや朱具足からのかしら猩々緋高雄のもみちにだんの山の岩つりつけしの花にけいどうげ御所柿にさくろのみはりの木のきりかぶ撫引のきり口鑼のさしとほりひ赤がひ赤がに赤にしかさみの足をかうにもり佛じやうほうのくちびる宗永のはうささ朱屋のか、の口べに茶屋のかしのまへたれよしやすのづきんとうさのまくらべふさら朱わん朱れしきちやつかつすか朱つば朱からかさ王のはなかまゆせんじさてはそこのまん中をいやまん中

と唄ひをばれば半七の思はずもうち笑て長き事を忘れもせずさてよく予唄ぬるそれにましてなほをかき書れきのとといふ驅歌もあり今父が教んによく記て母が歸らば唄ひて琴られ給へかし褒美の餅待つべきぞと賺されて稚子はいと興ある風情にて褒美に餅給はらは何にまれば記侍らん致給へといとがして小膝す、めつ今宵死ぬ父の遺言ともあらで餘念なきその貌見せば唱歌も口へ出ばこそ、ろの調うち亂れ涙見せじとやうやくに胸拊れろし聲細く長く引筋急る曲只漫にくりかへし線かへして教ればお通ははやく習ひ得て母さま歸り給へかし三味線弾して唄ふべきになきて歸り給へざる彼三味線の張出来ぬ歎もし豺にや囁給ふいといく運しと待わゆる欠びに睡を催せば父の女兒を引寄つ、よく肥しか忘るなよ唄　母がいかにばかり愛もせん歎きもせん常に暮る、と寝よといふに今宵の二更に程もあらじ尿きて来てよと手をとれど立とか

たき盛の膝を枕に睡轉顛呼び覺しても醒せぬわが子の顔をつくくど見れば思へば壯士の勇きこゝろも恩愛にやるかたなきと涙なり且して涕うちかみ噫われながらいひがひなし忠義の爲に捨し命を妻や子に絆されてけふまで活たる悔しさよ死せりと聞かば大和なる園花が恨も散父の怒も解ぬべしと思へども三勝が夫の爲に乞食して願せぬ心操が比稀なる貞女のかみ家を失ひ今宵又いれにさへ捨らる、夫婦一世の別どもあらで出まらで暮し女兒は母より父がこの面影を見忘れなば年長物の哀れをもある程悲しくあらんすらん疵氣もなく大さうなり母に孝行尽せかし五才の假子が二ツの緒にわかして謠ふ歌も今親の末期の役にたつ是も過世の業因ならぬかへすくも救たる唱歌をな忘れそと寝顔を覗く暇も驚かざしと膝を引親子戯ても渴も昔忘れぬ兩刀は父の像見の乱焼乱れぬ武士の魂と押載さて扱こなち襟くつろげて中刀を腹へ突立んとする折しも間近に聞ゆる足音とすは三勝が歸りしかと刀をかくせばそれにてあらで次の間の障子さど開ては暗かなくと予やけるどひとりち呵々と笑ふ聲を聞ば甲夜に歌りし旅客も彼にもあらせじ三勝が歸らぬ隙いと心ほそがまく又とりなはず刀の光に不圖目を覺す稚兒が泣出す聲に引れてや三勝の喘々走り歸りつ、信を見て吐嗟と内に飛で入り夫の拳に携若どむむる袂も翻りころくと落ちる錢と米拵て雑たる周章の半七聲を勵して怪我なせそ其處放せと叱り退れや三勝はなは引留る一生懸命縁故を聞までは放せじと携手も涙に洗ふ氷の刃反退んとすれや半七は病疲れて思ふにまかせずこゝろ頻に焦燥て縁故を聞んどならばは通こそよくしりてわれわがなき後に問給へ留るは却て恨こといさままげば三勝はその意を得ずれ通が何ぞかしり侍らんこは物にや狂ひ給ふといふを半七は聞もあへずやよれ通甲夜の唱歌を忘れなどいはれて女兒の目を押拭ひ母さまはらばいなきまに書れさといふ調歌を習ふてよく記侍りぬる

三味線を弾て給ひれとはこりかなるも鈍ましくさては妻々の遺言をなき後に傳へよとて女兒に
 教たまへる歎夫の今般に三味線を弾てその子に遺言を聞く母親はよもわらじ理なき事を以はず
 とも妻々も聞たる事あらばしらし給へというがせばは通は頭をうち掉て三味線なくてはをかし
 からず皮張かゆんど宣ひたるおなごてこのま、もて來給ひし聞まふしければ弾給へわらばも褒美
 に餅を給はらんにと回答して死んでる父と々むる母の心もしらぬ哀れさを洩開てや次の間
 なる旅客が櫻塚これも三すぢのいとけなき女兒も耳を側れし三勝は藤しかねてやよれ通われ
 を聞ずや母はこの手を放されず外ながら彼撥音にあはして妻々の遺言を聞き給へといふ顔をさ
 し覗きつ、うち點頭母さまは泣給ふか泣給ふ程聞まふしくは唄ひ侍らん聞のへと坐を占て手を
 膝にたき稚き聲をばりあげて彼三味線にあはまつ、諸ふを聞は正に是
 えず、かるしなの、國に旅寝して木曾の柿わたりかね世を姓捨の名にまふ病て伏屋の里
 遠も何かうら見の山鳥いたくな啼そ更級の田毎の月の影ならでうつればかこる千隈川濡さば
 袖どつまなしの神も締ぬえにしとて契り淺間が嶽ならば翌は烟どたちのぼる心をさそと久米
 路の橋諏訪の湖氷るども只都井に歸りなば東間の湯湯の東の間も寢覺の床の寢覺にもその
 はらなりしれさな子いは、き木とこそ暮らめか、る歎きにあふちの關もこえて御坂にさか
 えよと思ふばかりぞ、然に子をもち月の駒や食むからさ世を去る梨科の言の葉露どかさ予遺
 せし

救へとて神の導き給ひけん殺しはせしとてかき口説ても諭しても半七たぐて思ひかへさずだが
 心の中を唱歌にてしりつとむると聞わさなし其は退給へと焦燥つ退志と争ふ二親の異なる色
 氣を稚子は何事とも思ひ辨まへねさうら悲さによくと泣彼方此方にまつはりて親子三人煩悩の
 駕に狂ふ意馬心猿繫かねたる玉の緒も今や断んど見たりける浩處あ次の間より蒸襖を押開
 さやよ待給へ婿さのと呼かけつゝ三味線引提て立出る三勝これを見かへるに甲夜に宿りし旅客
 の笠松平三なりしかばこり思ひかけずとばかりに取はしさと喜しさにしはし言語のなかりけり
 ○ 蕪族の宿の下

そのとき平三は半七に對ひかく忽卒に呼かけたるを不審もたばさんが豫て女兒が物がたりにて
 聞も及びぬらめれのれは笠松平三なりしかるに今宵ここの驛路にてこれに等しく狂歌を賣彼
 此の門に立在女子あり笠もて面をかしたれきその聲を聞くに日が女兒に似たりそれかと思ひ
 なからばしなくは問すこゝに立かへりて腹ふに果してそれ飛たつとくにありしかかまづ身
 が遺言の趣きを聞ん爲に名告もやらすこの三味線めきたるものをしつめらしく撥鳴き五十に
 及ぶ老が手にて稚き孫が腰に合ま弾れふものか愛らしき聲を聞さへ涙の種忍びかねたる籍柱に
 撥の當度も定らずあどへと戻る糸巻に音締も濡る愛思ひ恩愛の扱かけて身が自害をひき留る
 調子ちがひの不骨者かく強まじさ旗をまて東の果まで呻吟も三勝が往方をまらまはしはから
 ずも宿りあひしていかでか婿を殺すべきといひも果すつと寄て矢庭あ及を奪ひどりやがて鞘に
 れさめて三勝に遞與しつゝいふやう僕れば六年のむかま三條河原にて身身を人お奪ひ去られ
 しとさされも脚平足平を殺したる罪脱かたと思ひてその夜浴を逃去り四年あまりを奈良にて過
 し高天神の茶店にて領主の代參かどればまき武士に割籠を思れ大佛のはどりに到てこれを披け

ぼ思ひもかけず飯の中に一包の金を埋て三勝が身價と寫したり事の爲体いと怪しければ縁故を
 するよすがもやとて豫て三勝に由縁ありと聞く五條にいゆきて赤根半六ぬしの事を問に里人答
 て彼人のその兒半七といふもの浴にありて三勝とか呼るゝ舞々を誘引逐電したる罪によつて永
 く出仕を止られ直整し給ふ也といへりこゝに至てわれれもへらく三勝を奪ひ去たるを結髪むすぶの夫
 半七にてわりしとも知されば方人せし徒と挑み争ひ人を殺す大罪を犯せしこそ悔えけれかり
 りせばなとて一言われにはしらすりける恨みながら疑ひはなほ解ず彼金を投りしもの彼か
 是かと思ひ迷ひその細しさをしとん食に南都に乞食して年月を過せしが終に身みの往方もしれ
 ず今はとて彼地を立となれそれより諸國の靈場を順禮して此秋善光寺へ詣なほ彼此を呻吟しんげんも
 はじめより件の金は一枚も喪はず年にも恥ぬ小曲子を唄ひ路すがら人の門方に立形なき世に存
 命たるかひありて多年の志は致したり面をわはせし事となけれ彼は夫婦が中に儲たる女兒
 これに大和にありと聞し半七どのなりけりとは襖を隔て三勝が夫よ旦那が子と呼ぶにてしりぬ見
 れば又思ひしより夫婦が稚樹の花もうつろひわれもかくこそ老にけれざるにても彼身價は何も
 のか贈りたる半七の、なせし事歎六年以來の疑ひをばらさし給へと信やかに問はれば露ばか
 りもいといぬ男たましひる半七はいよゝ恥てやさし俯て回答せず三勝いたくうち泣て養育の
 恩を仇あして罪を得さし物を思ひし淺ましい世をわたらし侍る不孝の勸解る言語もなければ深
 たる情由にて奔れるにはわらずみな是夫が忠義ゆゑに不意に再會まつるははじめといへば箇様
 終といへば如此なりとて園花が事吉稚丸の事二郎太夫曾太郎が事全八蝶九郎が奸惡
 に至るまで一五二十を物がたり且白河にての爲体多賀の莊に住わびて近ごろ鎌倉へとて旅た
 たるに半七が暴に病て進退究り物みな活潑してすべなき事これ彼密かに聞えまらすれば平三



は聞く毎に嘆賞して曰すそのとき半七はやうやくに頭を擧げ故之目今三勝がまうせし如くかの
 白河にて死すべかりしを三勝に諫られかゝる形容にて舅ごのに名告あふこそいと而なけれ示
 三勝を結髪し妻れさんなりといわれもまらず彼を奪去て郎君の御悪名を雪め直に刺殺してわ
 れ又自殺し情慾の爲にせざる身を潔くせんものをも只管思ひ定たれど恨もなき人の女兒を慮
 るその罪はいと深しせめて三勝が身價はその親に與へ給へ與ふべしとて五條なる旅宿にて厚倉
 氏と後の事さへ直語たさしが彼人言を食ずして件の金を投れるしかるに御身は義を守りてそ
 の金を喪はず艱苦を厭ひて三勝が往方を索給ふ事世にも稀なる大丈夫半七が及ぶ所にあらず
 と頼もしくいへど頻に稱賛たりしかば三勝も又嘆賞す平三聞いていなわれ女兒に舞々ばさし
 たれども彼が粉黛の骸骨を賣て自の老樂をばからんとせすこれ志氣あるもの、常之只身
 身夫婦が孤忠心烈と日を同じて語がたしこの夫にしてこの妻あり誠に一世の奇耦天の結る良
 縁に加之孫女兒が伶俐なる容止も父母に似ていと愛たし年はいくつぞ名と何と呼ぶ、ぞと問
 れた通の雄手の指をひらき年は新名は通と呼れ侍り日來母母がそなたにも祖父さまの在す
 いひまらし給ひしかば見まじはしう思ひ侍りいつまでもこゝにたはせよとて中よくし
 て娶られぬへといどけなき言の葉は又二親の袖にも露ぞれさあまる平三は目を押拭ひ膝にた通
 を引載しつかゝる女兒をもちながら死んども親も親恩愛の絆には賢愚剛脆の差別なく猛將
 勇士もかゝらぬものを鬼々しきも事によれど恨むも親慾の喞言なり半七は平三に諫免られて終
 に志を果し得ずこは死るにも死れずとてしばし歎息したりけるこのとき夜と既に更たけて
 宿のあるじが臥たる查房の方へ遠ければこの件の事をしらす平三は膝に睡れるに通を三勝に抱

とらし胸巻の財布より奈良にて得たる身價一包をとり出して夫婦が間にたきならへ三勝が苦節
 むなしからずして今幸ひに彼が身價百兩ありこれをもて半七の、醫療心のま、にせば身の病
 着はいふもさら貧の病も又愈なん心つよく思ひ給へといひ諭しつ、これを遞與せば半七頭を
 左右に掉身の好意とせざる事なれどもその金はわが夫婦の爲に用ひがたし故いかにとなれば前に
 もいひつるとく三勝を半七が結髪せし女子としらざればこそ厚倉氏が彼が身價を授りてその親に
 酬るなれもしくじめより半七が舊の妻なりとしらばこの金は投もせし身も又受ぬふべからず
 しかるを今これをもて身を安うせんとはかるときははじめの忠義もたづらならん只金とこの
 儘にて折をもて厚倉に返さ遣し又御身の一生は夫婦がともかくもして養ふべしまかせされば義
 に違ひそは思ひもかけざる事といふ平三かさねてははる、所實にしかなりといへ共今この金
 を返せばとて只一夜の中み大和へとくくにあらずしはこれに借て腹薬し病愈て後その缺たる
 を調達て舊へ返すとも運にあらざ何事も平三にうちまのしめへといふに三勝も又さま／＼に
 言葉を竭してやうやくに納得さして次の日より藥師に見せて價貴き藥品をも厭はずそれがい
 ふま、に着治せりさるからに宿のあるじ夫婦は平三が半七等ともろどもに逗留するに至てはじ
 先にも似ず錢あるを見て訝みなが／＼等閑ならず款待しけりかくてまた二十日あまりを經て半
 七が病着たこたり果手足儘のこく健になりしかと三勝といふもさらへ平三ふかく歡びて半七
 にいよやうしらぬ鎌倉に赴かんよりたなじく浪速へゆきて活業をしめふべし彼處は浴へも遠
 からず日れ又土地の人氣をしれりかならず便宜を得つべきなりとて歡しかば半七これにしたが
 ひて親子四人逐に沓掛をたち出更に西を斥て走る事十日あまりにして浪速に到り長町といふ所
 に借家してまなもろとも膝を容れ何をがな活業よせんと議するに平三の原來俳優の事に熟て

畫を作るにこ、ろを得たりこれより思ひつきて入髪といふものを作りはじり半七は毎日に彼此
 にも出てこれを賣ぐに頭髪うすきもの頭髪を太やかにするに究てよしとて買人も多かりけり
 その、ち三勝又養髪といふ假髪を工出して平三と、もにこれを作る程にはじめの入髪は頭髪
 みなれど養髪は髪を薄きを掩なれば親宮に蟬髪を製はじめ縁雲擾々として鬘髪を梳るがと
 く婦女女子大珍重を養髪を作り出されたればとて三勝半七を縛縛して長町の養髪となん呼びにけ
 るさればは老めの笠屋をバこしらひたりの人しらす隠篋屋と世をまのふ半七もこ、ろの外あ
 商人となり下り住ば又住よしの岸の姫松年頃御達假髪めされよこの外にも髻結肩拂玉櫛等どふ
 たとせ近く浪速津を呼ぶるけども沓掛にて敷日の療治に三勝が身價を遣ひ減らま又こ、に來た
 つて活業を致にも本錢諸雜費これ彼二三十金に及べるをなは贖ふに至らずいかにもして件の金
 を醫の數にわはし厚倉二郎太夫に返さばやと親子夫婦これが爲にいくその心を尽し夫は聊かも
 活業に懈らず妻は又節儉を宗として飲食も薄くすれど毛より細き瘦世帯にて二三十兩の金を忽
 地に貸殖出すべうもあらすこのみならず半七は父半六が安否こころもとなければまのび／＼
 に奈良の五條の爲体を探問に半六は今なほ閉こめられていたう老くち園花は一トたび想
 思病にうち臥きてよりたえて首を掻すこの七年が程死もやらず活もせずされば典膳夫婦はま
 ず／＼半七を恨み女兒をさま／＼に疎こしらへてふた、びよろしきかたに縁しを結せんとすれど
 も園花はいよ／＼志を固してうけ引ず只且ても暮ても半七が事のみと思ひはざるに聞はしかば
 半七は父もはや一トたびはよろこび一トたびは懼る齡なるにわれもゑに罪を得て久しくからさ
 め見ぬふ事いと朽をまどうち歎き園花が心探も不便にと思ひながら父を救ひ彼女子を慰るよ
 しもわらず三勝もこの事を聞て園花が心の中を思ひやり夫をたもふはわれも他もかわらぬもの

をもしわが夫婦存命て迅速にありと聞のば、さこそ妬しと思ひのほめ一トたび誤故を聞えし
して後はわが身は厄になるべけれどれもふ程を半七に告夫が忠義をなしからずは大和へ歸らし
給へどてあらふる神佛に祈けるどが

○主なき園の花

さても蝶松典膳が女兒園花は往年半七が舞々と奔りしと聞にしころ妬しと思ふ氣色なく只身の
形なきを歎くのみに、望を失ひてつくづくと思ふやうわが夫の人となりその心さま貞しけれ
ば舞々なんどにこ、ち感ひ忠孝兩ながら缺給ふやうはあらずもし彼舞々は豫て聞にらし給へ
る雅明染の髪結れさんとのやらんにてはあらざる歎かからは彼人存命て浴にありけるに環會
已とを得ずもろどもに迹を聞しゆふにやとまれかくされこの事には深き故こそあらめどて遠く
慮るほご墓なきものはわが身にて涙の雨に枕も朽括り目解し長總の長き病者となりまより針
灸薬餌も驗なし父母はこれが爲にいとゞしく胸を苦めまゝにいひ論して半七が事を思ひ絶
せんじすれば却て病をますにすべなく只典膳も腹痛も憤りを忍びて半七が事をいひも罵らず
その花は又密に五條へ消息してをりく半六が安否を問これ日來嗜みぬふもの也彼は堅やか
ならでれん齒にあひぬはんかとして狭もの廣もの魚肉野菜調理したるを贈遣し又塾居のへば
氣の結れぬとんかどて住酒を贈るときもあり春のをはり冬のはじめには衣服の洗濯にも心を
着てよろづ乏からぬやうに賄ひ遣すに父母にはふかく匿してころ利たる奴婢只二人にこの條
の事を與らしけり半六と園花がかく信やかなるに感涙を拭わへすいかなれば半七の諒すなき
舞々に思ひかえてかゝる貞女をふり捨たるさまで虚けきものにはあらずしが舞々といふ老狐
に魅られ親をも妻をも思はぬよ九ツの世に生は變るとも半七はわが子にあらす只園花のみ實の

女兒と思ひ進らするとて心ばそき限り書寫を返事する日もありしとぞかくて春去春來たつて既
に七年を過せしにこのころ誰いふどはしらす半七の彼舞々を妻として迅速の片はどり長川と
ふどころあり今は商人となりて簀屋と呼ばれ假毛といふものを賣で活業とした通といふ女子は
へ産して既に六才になりぬ大和へと十里に足らぬ浪速津に住ひて世をも人も憐れぬ鳴呼の
白物なれとて藩中もつら風聞す園花はやくこれを傳聞て一トたびと半七が恙なきを歎び又
一トたびは父母もし聞えり給はんにと主君の御威勢を借ていかなる崇かあらし給ふずらんとて
更に安き心もなしあるとき又思ふやう半七ぬしに不慮の事ありてはみなりか身の妬にて父に勸
めからさめ見するなんど世の人はいふなるべしよまやわが夫舞々を伴ひて何國の浦に在すとも
外ながらその安否をまるときは慰むすかともなれど且が身の心探は言告やらん便もあらずと
くこの風聞をいひ止かしどていど胸くるしく思ふ折しも果して典膳も半七が事をよく語りて大
に怒り密に敷浪に縁由を物がたり彼いかにして年來の憤りを散さんといきまを婢竊聞し
て聴て園花にかくと告にければ園花打驚きてさればこそわが思ふに違ぬ今は只身を殺して父母
を諫め夫を救ひて年來を誠心をもまらし侍るべししなりくと思ひ定めたれど氣色にもあ
はさす頃しも年極の上旬宵の露も吹霽て深ゆくま、氷る夜に園花竊に起出てそと行燈を引寄
する腕も細りて力なく寝亂したる鬢の毛の顔にかゝるを搔わぐれば只あやくにはふり落る涙に
墨を楊流す嫁入のときの硯箱夫の紋とわが紋を時給ちらしむいたづらに夏毛秋毛とふる筆の命
毛も今宵限なるともしり給いぬ父母の嘆きもさこそと推量られ翌は且が身を啼鳥の迹の事さへ
細々と書寫めては讀んだちかゝる文にも先でたくは親を祝さまいらするひしにて筆を留卷
納んとするに思ひもかけずいつの程より闕窺けん咳して屏風搔遣り内に入るを見れば母親な

り園花阿呀と驚きつ、忙なく遺書を袂の内に引かくずを見れども母は見ぬ親してとりちか
う居ていふやう昨今は寒も殊さらにはばゆるに久しく病て坐しながら小夜ふけて何をかし給ふ
流る、水にこゝろあれども落ちる花にこゝろなしと歎鬼々しき半七をなはいとをしみぬふか母
が心も安からず大和にのらふる神佛には願事もかけつくし顔の細りを見る毎にわが身の病より
なる苦しく暖入り給ふ夜半の聲聞けばとにかく睡られずしかるも今宵は常にかはりて人をも呼
ず起出給ふは近曾頻に風聞ある半七が事の心にかゝるなるべきまさはあらぬかど問に園花は唯涙
さしくしてはかしくしき應せず敷涙はつぐくと女兒の顔をさし覗き痛しやわかき人の苦勞
すどていど面瘦の見ゆるこのころの風聞を傳聞ぬひしかはしらねど聞しどもなさに黙止せし
が半七は舞々の三勝とやらんを伴ひ商人となりて浪速にあり女子さへ産したりと牙釜々この事
をよくしり給ひていたく腹たて擲どりて年來の憤りをばらさんといきまき給ひつるをどかく
いひ寛てけふまでい過しつ又いひ出るは今宵はじめなれど身が五條へ嫁り給ひし頃半七と誓
つるよしありとて結髪せし女子の事を身聞けしらし離別して奈良へかへり給へといひつる
事又身が誠心を告てかき口説給ひし事を聞きたる事もあれば此彼思ひあはするにもし彼三
勝は半七が結髪せし女子にはあらざる歎しかれば彼人の懐のこにあらすよとも問考へず縁し
を締し結びたる親と親とが過なりさればとて身が事の主君に聞かむとて身が許を受婚を整
はせし半七が正室なるも縦ひ彼人結髪の際の妻あればとてそは私の縁となりとまれかくされ半七
と大和へかへることかなわねど君父に遠かりても婦は夫に従ふが常の道なればひそかにこの
理を述て身と浪速へ送り遣すべし思ふなり袂に女子のこゝろもてかならずよからぬ所爲を
して歎きをなまざし給ひし身が探り焼野の雉子母が心は夜の鶴夫を思ふも子を慈しむもいつ

れか劣りいづれか勝らんて、ろ得たりやこゝろ得給へやよ〜といひ論すに園花は目を押拭
ひれん慈愛の深きにもなは身の不幸は胸たれてとかく申さんやうはなけれど半七ぬしの事のみ
は親にも身にも實にもろくて最惜思ひ癖の強顔人を夢にのみはや七年を過せどもはトめより
れし身を阿容く〜と浪速までおきて恨をいはるべき歎況て化なる舞々の浮世に色香ます花の三
勝さの園花を愛てい〜深山木の身のなる果をか〜とだに聞けしらえて笑れば恥の辱にて
侍りなん又理と責られて唯假初の捨言葉かけらる、とも子さへある妹夫の中を引裂て妬婦
と世に練れ絨目の合ぬ蝶番閣房の屏風の立よしもなくて運極かひもあらす世にも人にも捨ら
れし冬の扇の骨ばかり病體てありながらあれから倦れに彼所までおけど宜ふは情なし唯願し
きは彼人に親なる事もあらずして〜百年も世に榮へ吉野の花の開ころは大和の事も折ふしは
思ひ出してゐたらばなき身の後もいかばかり喜しく成佛いたすべし親に先たつ不幸の罪ゆるし
ぬへと合す掌に涙落る涙の瀑布岩に堰る、とくにてわけても末に逢んといふぬ探を母親は
わが身に思ひくら〜つし貞女兩夫に見えずと口にはいへど始終慥ならぬは世の中の人こゝろ
あてあるものを親も及ばぬ心探を言の葉すゑの露ばかりもいひしらさねば彼人のしるよしもな
きぞあしうの計と何事もうち任しぬへ御身が兄曾太郎は半七が竹馬の友なればこれをこそと
思ひてけふ密やかに御身が年來の物思ひと母がねもふ程を密かに聞けしらして相語たれば彼
みづから浪速に赴きて半七が長町とやらんの隠家をたづね時宜によらば對面して縁由を述その
應を聞て歸り來べしといひきよしや置去に去られても夫婦の縁ははまた断れず婿が應を聞て
後ともかくもなるべき事をあまりに遠慮し給ふてといつ事の果べうも侍らずさればとて半七を
恥かしめ釜々や母が憤りをばらさんといふらざる彼人もあしからず又御身が探もど〜くやう

になるどならぬは曾太郎が歸りて後に去り給へ雨降そしきて土潤ふといへば又よき事もなからずやはとさまざまに諫こしらゆれば園花いよ、うち泣てこは物体なしわが身故兒上のはるく、と浪速へ赴き給ふと歎それ推辭ばれん慈に憐る不孝をいかにせんいかにせんとて泣沈む六の花とも消かねて今や七ツの間なる十三鐘ともろどもに枕土まも音すなりいさ懸給へど母親がどる手も腫も身も冷る涙の氷わりなくも臥簀の内に誘引てやうやく自殺をとい先けりさる程に蟻松曾太郎之母敷浪がしのびやかに語譚つることあるをみて俄頃浪速へ赴きて半七が隠家を尋ねその爲体を窺ひて時宜にやらば面あたり妹が心探をもえらせばやと思ふに元來孝心ふかき壯俊なればわが身事の出來たるこしちしつ兩三日出仕せざるよしを同僚們にたのみ聞え父には法隆寺へ詣るといひこしらへて次の日俄頃に行装を整ふるに冬の日の短くてはや申下刻になりにつれ心忙しければ從者只一人を將て漫に立出しが路一里ばかりゆく日暮なんとすあまりに急ぎて燈袋をとり忘れつ閑なるにいと便なしとて從者をば其所より走り歸らし尼が辻に到てこれを待に既に初更の比及なれどそのもの歸り來ざりしかばあまりに待わび遂に巷橋を備ふて、閘嶺を越てけりそのとき二人の轎夫は籠なる樹の下に轎を扛れりしつゝもろともにいふやういと難儀なる嶺を越たるに身重尋常に勝れ給へば筋骨を痛められ彼も我も脚氣發りて今と一足も運動がたし定め建場まで今しばしが程なりこしより暇を給はるべしといふ曾太郎これを聞て頭巾うち戴たるまゝやをら轎より出病痾とわればせんすべなし定の所まではなほ遙なれど足は數のこくとらすること聞かえらしつゝ腰なる打違の財布を解て錢三縷を遞與んとするに轎夫の手もどらで冷笑ひこいひかと思ひたがへ給ふかばかりの駄賃をぬいらんとてこ、までは乗せず定の外なる酒費のさらさかく脚氣さへ發らしぬふに藥の價をぬはるべし

いと心づきなしと、咳にぞ曾太郎又一縷の錢を倍てさし出をを一人の轎夫攫取はやく橋と投かへして眼を睜り聲をふり立百二百の半錢にて人の命を賣るものかこの我を欺くにこそといさまけば殘る一人もすも寄とかういことんと于遠し路銀も衣服も脱で遞與せどらしてゆけと罵もあへず左右より引扱みいと驚しく競ひ蒐れば曾太郎忽地大に怒りさてと汝等賊なるよ孤客とれもひ蒐り可借首をな喪ひどとあさみ笑て立たる目前へ閃めかす息杖を左と右へ入錯し直に撲地と打落せばこは朽骨とでもろどもと擲着を拂除頂髮捉て雄手雌手へ撞と投れば岩破と起陰限ながら前後より組んとするを寄せも着す足を飛して丁と蹴倒し手首背へ捨胡老轎のはとりへ押着つゝ結下たる挑灯の火光あてはじ免てその面を見ればこの轎夫の別人にあらす往に南都を追放れたる今市全八郎布施蝶九郎なりしかば曾太郎すすゝ怪みて羞をまらざる愚物ども蟻松曾太郎を見忘れたりやといひつゝ頭巾を搔脱れば全八蝶九郎もやその人なるを認て大に驚き思ひかけすと慌忙逃んとするを起し立すずらりと引抜く刀の脊打肩腰の嫌ひなく打すけて倍とにらまへ無頼の兇賊かゝる景迹あてありながら不忠不義の天罰とはしらす却て悪心増長して旅客を引剝せんといたすその罪許しがたしといへども潜の旅なれば奈良へ領てゆくをせずしはま首を繼するなりかくても羞ずやな悔やしからずやといひ徳し又數回打はぎに全八蝶九郎苦痛に堪ず只ゆるしめへ許し給へと叫びけりそのとき曾太郎は刀をれさ免腰に着たる小挑灯をとり出して轎なる挑灯の灯をうつし遂に浪速をさしていそぎ去しがゆくりなく更關たればその夜は平岡に宿かりて從從者を待に次の日從者は深江にて追着けるとぞさる程に全八蝶九郎はやうやくに身を起してまづ自脈を診打れたるところく、に唾を塗て拊捺なごし直と呆れて目を見あはしつゝ蝶九郎がいふやう今夜捕なる孤客を乗したればよき鳥にこそと思ひつる

に幸なるときも眼も眩み心まで鈍くなりけんいかに闇なればとて尼が辻にて足を定るときも吾も曾太郎なりと思ひかけず可憐肩を費し刺へからさめを見たる思々々さと咳は全八も面を認め七轉八起といへばよき事もありあしき事もなくてやはといふ蝶九郎かさねてよき事といへばけふよき事を聞つ汝もわれも恨ある赤根半七と彼三勝を妻とえて涙速の長町にありとぞこの事もし實ならば密に道奴を結果三勝を奪ひ去遠く東の果なきへ賣遣さば今夜の損は補ふべしさはあらぬかとゆふを全八聞もあへず大に歎びそと又金の墓に堀當たりまかはわれ半七は曾太郎にも劣らず柔術劍法人なみに勝れたれば排々しくは計かたまとせんくせよと示あはし夜の山下は聞く人もあらねばなかくに彈る氣色もなく聲高やかに語譚つゝ遂に空橋を打起しこれも平岡のかたへとてゆきぬ抑件の全八蝶九郎は七年以前に奈良で追放れてより攝津河内の間を徘徊しどこぞ悪友とのみ交參よからぬ所爲を事とせえ程に里人等に憎れいよし便なくなりまかば二人もろとも旅橋を昇て生活あすなれと耻をえらざれば羞るとなく勵すれば旅客を勤かして非法の錢を貪りたらんと計較ぬ固に是惜てもなほ憎むべき癖者なり

○橋下の歌船

赤根半七はころにもあらぬ世わたりしして愛に馴たる涙速津を假毛假毛と呼びあはるけと利を射て妻子を安らかお養こんとにこあらず三勝が身價を舊の數にわはして厚倉二郎太夫へ返さばやと思へども細本手なる商ひにては頼にその金調はず胸くるしくも是年も暮てはや師走六日になりつこの日も又常のどく假毛の箱を背負て大和橋のはどりを過るに客店の二階より障子を細やかに押ひらさこなたを指さしつゝわれ呼べといふ聲するを且がとかとて立在ば旅客の從者先きたる男假しく走り出て半七を呼び入れ近曾この津に名たる假毛簀蓋とかいふものを賣ぐ

汝なりやと問に半七答てれのれそなばちその商人なり假毛をゆめさるべうやと信だちていふ奴懸點頭てわが主は西國にて人にもまられ給ふ豪家なるか家務につきて久しくこの津に逗留し給ひつ春の松の過る頃及に歸國し給ふとなりよりて家裏に假毛を夥買もてゆかんと宣はるるぞ汝が今賣したるこいかばかりの價物にやひとつ二つ見せよといふ半七聞てやをら擔箱を負卸ま括たる袱の四隅を打抜きて一疊の假毛をとり出しこれは入髪と稱て男の假毛なりそれは簀蓋と名つけたる女の假毛こゝにありあはするもの凡五六貫の價物なるべしといふ奴懸かされてわが主と親族も多く又毎日に交加する友どちい人といふ事をしらすか、れば家裏も又多分なるぞさばかりの價物にては事足るべうもあらぬとまづまうして見んといひかけて件の假毛を携へ又忙まぐ二階に走り登りまばしありて一握の金をもて出て半七にいふやうこの金は三十兩あり今これをとらするなれば數のどく假毛を過らせよ設家に結たてたる價物なくば日數三十日を限りてもて來よ價は目今幾なくとらするに宜ひさまかれは後の證據に手形書寫めてよといふ半七のこれを見て大に呆れ世に假毛を賣人とわれと三十金の花主は思ひかけざる傍俤なり天且が夫婦の誠心を憐み今はからずして厚倉ぬしへ返すべき金を得さしぬふなるべしと心のうち深く歎び墨斗よりつかみぢかき毫を抜出して手形をさらりと書をはり宛名は何とつかまつるべうもやと問を奴懸さ覗きて殿の名は恐ま可介とせよ且が名めてよからんといふにこゝろ得果てその手形を可介に遞與し宣ふとく家にも三十兩の價物ななげれどこの大晦日までには結立て進らすべし價は只今半ぬはりてもあるべきに残りなく惠ままぬふぞ忝なきと應つ、金を取て押敷き筭果て懐に挟め假毛を悉く箱より出してこれをも可介に遞與しやがて空擔を背負て歸りける半七が心の中いかに喜しかりけん氣色にさへ見れて哀れなりしかるにこの日今市

全八郎布施蝶九郎と半七が長町なる家を窺ひ折よく彼と打殺して三勝を奪ひ去り宿恨を消さんとして二人うちつれ立て長町へゆく折しも大和橋なる客店より半七が夥の金を得て出るを窺潜にその迹を跟て人なき處に到らば打仆して金を奪ひとらんと計較たるが黄昏なれど年の終なれば人の往来も繁くしてその隙を得ず只いたづらに門方まで跟來たり生垣の蔭にかくらひて裡の容子を張ひけりともまらずして半七は暮かする日の心いそしく乾菜子つて諸折戸を明んどするに三勝之夫の足音をよくきりて釜さま歸り給ひぬといへばた通り走り出入間選しと携着恩愛の絆に活業の疲勞も厭ず襖箱を縁類に扛らるしてわが子の手を取りさてもこの冷たさよ霜瘡は痛ないか些こゝに居て煖めよと引寄する地爐より三勝が汲で出す茶さへ妹脊の水入らずけふは常より遅かりしといふ間に平三は引散らしたる撰毛片よして貧にへ瘦る小火鉢の炭團掻起してはとりちかうもて出半七の寒風にては思ふ程の商ひもなかりけん居家居てさへ堪がたさにさそな全身も氷つらめやよ三勝茶粥なりとも温に炊てとやく進らめせよといふに半七小味をなほじいな物はしうもいはず何事もうちたきてまづやすべき事あり三勝も悦び給へ嚮に大和橋のあなたなる客店へ呼び入れよろしき旅客の家裏に價三十金の飯毛を買んとて金をば直お残りなく選與し三十日と限りて數のとももて來よと眺られたりかゝる花主は世に稀なり去年より己とを得ず是彼に遣ひ減らしたる彼身價も三十兩なり今これをもてその缺たるを補ひ厚倉ぬしへ返しなれば心少しは安かるべしこれ見給へといひかけて金と懐よりとり出せば平三こゝもさらし三勝大に歎びてそのはからざる僥倖なり是も己身の忠孝を神佛のあはれとてかくは恵ま給ひけんか、らん端とて昨夜の夜延の燈花も愁の眉を開く祥あて侍るゆりまづ神棚へ燈を揚て願をまうさんさいひつ、とり出す燈箱火ともま比の昏粉れ潜入たる布施今市縁類よりさ

し覗き點頭あふじもしらざして平三は腰に着たる錢を撈り押入の戸柵を押開きて厚倉が贈たる金を残りなくとり出しこれを半七に選與していふやう貪き家に不相應なる預りものと思ふから夜もうちとけては睡られず翌は朝まだきにこれその金を奈良へもてゆき潜に己身が志を聞ぬしにして厚倉ぬしへ返すべしといふ、舊の數に合りやよく見給へといふに三勝の今灯をうつす行燈を夫のかたへさし向れば半七のまづ三十兩の金を置ならべ又平三が選與せし金を財布よりとり出して見かう見つゝ眉を蹙めこは不審けふ假毛の價にどて得たる金にも續井家の刻印ありてはじめの七十金に露違はずさては大和橋なる旅客は厚倉次郎太夫にてありけん彼人わが何の苦心を知て假毛を買といひこしらへふたゝびこれを贈れるなるべしもし去からずは見もまらぬ瘦商人にその價物を後にしてこの夥なる金をとらせんやあなうたてしと呆れ感ひ搔よする金は茶團の花ものいねば面あたりぬしや誰とも問よしなく共に呆るゝ三勝は平三と面をわはえ思ひ感へる油断を見て縁類を踏鳴らし七年以前三條河原にて脚平足平を殺したる笠松平三市の正の仰を裏搦捕らん爲に向へり覺期せよと罵もあへず蝶九郎つと走り入り火鉢をとつて投つくれば行燈滅て發と立灰に咽て霧も壻も意ならず周章し驚きあうれて泣れ通を抱き寄する三勝もたえてせんすべなのりけるその際蝶九郎は金を残りなく搔摺て外面へ逃出ると半七やうやくに見て大に怒り後姿は認ある悪根の蝶九郎こゝに來たつて賊をなす這奴脱さしとまきまきて中刀掻どり追道れば平三も後れしと壁に掛たる六尺棒を挟み喘々追ゆくにぞ三勝と聲をふり立て物とり復さば追捨給へ夜の道なるに謀られて候なし給ひぞと呼べどもはやくも見ゆなるゆく先いかにどねばつかなく灰はやうやくれちつけぞ猶落つかぬ胸を拵れ通を賺こしらへつゝ碎たる炭團の煙を忙まぐ爐の中に掃入れて行燈を引起まどかくして又灯をともす後方に忽地人

ありて物をもちはず抱き留るを阿呀とうち驚きて身を返り掻退んとするにその人引とめたる袖を放さず阿々と笑ていふやう別れてより六年あまも既に七年を経たれば面忘れやしたりけんされそるものにはあらずはじめ半七が同僚なりし今而全八なり巖にそなたを伴ひ出たるとき三條河原にて平三に遮留られ剛一、半七によき事を致されて果は南都を追放れ牛馬にも劣りたる辛き世をわたる事とな是君ゆまをせられへば聞ゆべき恨もあれどそれはいはず否といふも應といふとも直に東のかたへ將てゆきなん勝あへど引寄するを三勝はふり抑ひ掻遣りて走り退腹たししさに聲ふり勵ましては夫の物かたりにて細しくしる思根の全八なるよ汝蝶九郎と謀し合え又や半七の冠せんとて一人は金を奪去り一人は獲り居てわが身に迫るもの物いふも穢はしとくく歸れ歸らずやと勇くは罵れど身ひとつの人を呼んも隣り遠しをすがに怖さ朽をしさはやく夫のかへれかしと思ふ氣色を見て全八は又阿々と冷笑ひさいへなほれもしるしや一日酒は飲ずもあれ忘るゝ隙もなき君が往方と其首か是首かとしてこの年來心を竭え索ねてたる寶の山手を空く歸らんやかくてもなる半七が事を思ひ棄すに以かにせんこの女の童ども將てゆきて伽やらふに賣て遣り酒賣にせねば持にならずに來よといひも果す頂髪無手と引摺りわれやくと叫ぶる通に手拭銜して小腕に抱き走り出んとをれば三勝は遣らじと留るを突倒し臥つし携るを丁と蹴かへし欲くは彼首の橋詰まで些許出てたべと蹴れて聞のかたへと走り去る三勝はやく身を起して齒を切り憎まと思へど人質とどられてはといせんすべなくわが身擒となるよりも酒心苦しくて聲をかぎりによよと呼び子に引れ行夜の鶴見うしなはじと追放たりかくてその夜も初更の太鼓うち出見れば夕月夜六日の影のはのくらさ往來迹絶し相合橋に霜れさはえて風寒く千鳥鳴なる枯蕨の穂のはかくれて橋梁に釣船一艘歌りけるるるるに三勝はふり

乱す黒髪の長町より喘々歩踏かへして追覓れば全八の通を引抱て橋の直中お立留り欄干に身を倚かけ且くこれを待程に三勝やがて走り來つ諸手をかけて稚兒をとらんとするを全八は背向になりて寄せも着ず聲の聲をばりく掻ながら見かへりてはふやうやをれ三勝なきてかく物の機をばらさるるもるといへば承引すしからばこの童なりともとて將て來ればいづ所迄もとてまつはるといかにぞや半七が事を弗と思ひ絶て全八にしたがこころが妹脊の相合橋又したがはじとならば童かためには三途の川半七をれもひ棄るともこの童をこるすとも二ツに一ツは絶体絶命心を定めて應せよいかにやいかにと逼られて三勝は柳眉を逆だて疾見る眼に涙を含み穢きかな全八郎稚ものを苦めて挑むともわらこが心は石より重しいかで轉すとを得んよしなき事をいはんより通をかへせといきまきつ、又携つてを挫と踏倒して眼を睨らし面お似なくしうねり街妻せひなく殺生せ給ばならず是見よかしと欄干の上になし出す稚兒より母は目も瞋神消やよ待給へいふ事あり「まかといむるに従ふ意賊「いないかでこの身を汚さるべき」しからは只今手を放ぞ」そはあまりに情なし「情なしとは君が事泣たうても積善さずが命の惜ければこれこの兒はいたう戦慄なれかくても節操は破られずやと活み死しと理なき阿責に「何と回答ん首の栗も只泣沈む折しもあれ丁々つしと打ぬふ太刀音奸賊布施蝶九郎逃とて何所まで脱すべき穢し返せと呼び留る半七が勇き太刀風に靡きたつ蝶九郎は且戦ひ且走り相合橋の欄干へ手をかけておどり入らんとする所を半七刃を閃かして脊を一太刀丁と斫れば阿呀と叫びて彼此遠き聞のあやなし危きそなたに泥犁に佛どあふこころし三勝はこれを見とやわが夫れ通を救ふて給はれと叫ぶ折しも誰どはしらす後方よりつと來たりてれ通を抱きて走り行全八は目今力を盡して蝶九郎を助んとせしがあまりに事急に及ず半七が撃てかゝる

太刀の下をかき潜り狂縁、三勝を蹴たふし朴刀引抜て逆戦はんとする。半七奮然と云て獅子の怒をなまわが子の仇人其所な退そと聲ふり立踏こみて擊はせに全八忽地碎易して肩先より乳の下までばらばらと斫下られさど潰る鮮血とにも撞と倒るしを乗懸りて數回胸前を刺どほし刀の血を押拭ふて鞘をかき納れせれさまりかねたる今宵の殊危身にもかねトと慈愛るわが子と金を失ひて夫婦逃に慰かね橋より下をさし覗けば歌りし船も漕かへり跡なくなりし蝶九郎之水に溺れてや死たりけん又涙を潜きてや脱れけん通が往方いと惜とて夜は黒みし河水をつくたくと観て忙然たりそのとき三勝と全八が通を捕擲て走るを追留んとてこゝあ來れる一五一十を半七に聞えまらしなほかき口説ていへりけるは通が危窮の時に出で身も蝶九郎を追蒐てこゝに來給ふかひもなくとりも留めぬわが子の魂の緒六才の年極の初六日に命終るも前世の業因にや侍りけんあな胸痛やとばかりに轉輾てよと泣ば半七聲を勵して通が事は數ども及ばず今蝶九郎を擊漏らして既に金を失ひぬれば厚倉二郎太夫に對してわが志を述がたしとててもかくても半七が忠義は今宵この川の水の泡となりたるこさればとていたづらに歸るべきにあらすまづ河原にそふて蝶九郎が生死を見定め通が往方を索ばやと思へば御身はこゝより長町に立かへりて平三の縁由を告給へとく〜と急したつれば三勝はもろともにもいひかねて目を拭ひつゝ夫に對ひ宣ふとく二人に一人の立歸り聲々に告ずは便なかるべしよしや蝶九郎が生死しれずして金をとり復すよしなくとも翌は早天立かへり聲々に談合し給ひ又よき事もなからすやかならずしもれもひ返りて悲しき事を聞え玉ひそと叮嚀にいひ諭せば半七固てうち點頭れれもこを思ふなれ深ぬ間にといそがされ妻のこゝろは跡へのみ殘る影なく入る月の暗さに迷ふ愛惜のやるかたなきは理なれと歎くは愚痴と諫られ「わらはり

○長町の五味上

泣ねど身こそ「いなそなたがど面をわはまふた〜び絞る相合の橋の袂も子ゆゑの聞立別れんとする折しも後方に張ふ夜行翁すは人殺しと呼りて打鳴らさんとする太鼓の撥をばすにすつばと半七が刀尖餘りて切落す挑灯滅て野干玉の夜の浪香水鳥の對に離れて三勝と長町を斥で歸りけるぞと

笠松平三はその夜より蝶九郎を追蒐たるに老の足なれば終に後れて半七にさへ得あはず初更の此及にいたづらに立歸りて見れば半七はさら〜三勝とつうも何地へゆきけん燈火細き理には人ひとりも居ずさては半七がいまだかへらざるを心もとなく思ひて女兒は孫を伴ひて出たるに月も入るべきに居つゝ待かして咳てしばしそありけれや、更也けを壻も女兒も歸り來ざれば落もつきがたくて挑灯に火をうつし引提て出ながら門の戸を鎖んとする折まも三勝と髪をふり乱れ洗足にて只ひとり歸り來つそは髪々あはれはさずやといふ聲も常にかはりて臉さへ泣腫したり平三見かへりていかに半七には逢ざりしかれ通となきて伴はざるやらんと問に三勝忽地よと泣て轉輾にぞ平三のす〜訝とて慌しく扶起し引てもろとも理に入りてなほしば〜問ふ程に三勝ははふり落る涙の間に相合橋にての偽体全八が事蝶九郎が事通を水中に投られたとんとて物がたれば平三は聞もあへず大に驚き噁悲さかな孫は悪棍に殺されたるよされ半七が當の敵全八を擊留たるのみ少しは心やりなりかしまからばわれも半七に力を戮し蝶九郎が生死を見定めて彼金をとり復しれ通が事も聞定めて來べしよまや翌まで歸らずともれちるて家にまち玉へかゝる時には已きて心を放しがたしよく鎖えて睡玉へと聞えらきてふたり挑灯に火をうつし又六尺袴を突たて〜袋を引折去けりかくてその夜も明はなれ冬の暮と短きに

長き別れの悲しくて三勝は只ひとりわが子の爲に焚る香も煙となりし夢の跡家廟の障子引開て
 しばし念じて又舊の地爐のふとりに座を占て形なき世に消殘る身の埋火とさし對ひ胸の鏡も
 ち曇りときなき宿の物思ひこの廣き浪速津に今をばるべとの花も昨夜のまゝに歸り來ぬ夫と
 父といかにそといと長町に待てて心れちぬ冬もりいさゝむら竹吹く風も夕ぐれちかくな
 りにけり 浩處に武士の妻とし見えて 襦の前かいとて括帶練の帽子の白雪を頭には戴け
 齡のいまだ四十あまり盛過に山茶花の花田の油篋挾箱扇 包の 行橋を奴隸に扛して門方な
 る柿染の暖簾をうち瞻めみの屋とあればこゝならん案内よといふにこゝろを得て一人の從者が
 暖簾をつと掻揚てさし覗き假毛とやらん簀蓋とやらんを嚙く簀蓋とはこゝなりや物中さんと呼
 門を三勝聞せも出も迎せ簀蓋はすなはちこゝなれと幸なき事の侍るによつて父も夫も家にあら
 ずもし假毛を見給はんとならば翌又來ませと計りに憂に迫れば生業も誰が爲にせんとひとり
 つ門なる女房はこれを見て 橋をかきれるさし從者等を其處に待しあき「ゆるし給へといひか
 けてつと裡に入りしかば三勝と思ひかけねば顔うち腫り「まづこなたへと請するを固辭もせず
 上座に居かばるも訝しく「何處より何事のおはしまして訪せ給ふやらん門聞たがへ給はずやと
 いへば莞然とうち笑て「されもはるしも理りなり半七の家居給はずと歎をなたは豫て聞及ぶ
 舊は浴の大柏笠屋三勝のなりやと問るしも恥しく「宜ふとく舞々の三勝はわらこに侍りと答
 れば膝をすゝめ「聞しに勝る標致よし物いひさまにて伶俐さも思ひやられ侍るかしとばかりに
 てこなは不審思ひ給はん日が身は彼をなた故に不忠不孝の人と呼るゝ赤根半七が舅大和園續井
 繁の一の老臣蟻松典膳が妻に侍りと聞るもへず三勝と顔赧やかに何となく轟く胸を押下てさて
 は夫の物がたりにて聞及ぶ園花さまの母ににてましますか浪花の蘆も枯果る年の終りにけるば



ると訪し給ふは故こそあらめと半いはさず「喃三勝の大家の老臣を爰に被て不義淫奔を責罵
 り恥かしせんとして來もせしかと推量り給ふかもしらねや絶てざる筋にこわらず色情の思案の外
 どやらん引手夥のその中にて賊を見する密察も度かさなりてはたつ名も厭すかく對とびて居給
 ふと大和へも仄聞けうち腹たつかと思ひの外なほこりやまに園花が夫の無事を歎びて近屬は顔
 の色も些の見なほす母が嬉しむわが子を譽るにはあらねや妬こころは露ばかりもなければこそ
 この七年置去に去れながら親の諫も聽納す長き病着を 幸にしてふたし嫁らぬその節操をせ
 めて半七に聞けしらしまのびく折ふしの音耗もさしたさに事の爲体を見定めてよとて園花
 が兄なる曾太郎を一昨この地へ來したれどかく女子は女子さち半七はとまれかくまれ三勝さ
 いひこしらへ今朝旦まだきに奈長を出てうちつけに訪ひ侍り聞けば女兒さへ翠玉ひぬるとやら
 んなに事も世過身過縦商人になり下りても半七の恙なく侍身も無事にればするを見れば恨もな
 に波瀾あしかれとて訪ぬものと思ふにも似ず親の信々しさに三勝ハ罵らるゝより胸くるま
 くさし俯いて居たりしがやうやくも頭を掻げ縁故をしり玉とねばいかばかり恨玉ふとも 理な
 らずとは聞侍らすしかるを却て信やかに宣はすれはいとゞなほ侍心の中推量られ 影護も面な
 さの身のいひわけに似たれどもわらは故ありて稚さより半七ぬしと結髪し縁故をいふとささ
 阿翁のよしあしをあげいらふ悲しさにいはじとすれば事ゆかず元來血氣の惑ひにて色に愛受ら
 れし妹脊ならねばわが夫の浴にて迹を暗せまもふかき忠義の爲なれども是も又わらには云難し
 どても斯ても世の中に頼む蔭なき三勝がたれて恨もなき人に恨みられなん罪障は重さかうへの
 小夜衣淫婦といひるゝともふたしび夫が世に出の厄とも奈長へ歸參の事神や佛へ合す掌も只

これのみに侍りしといひ果てよと泣沈は敢て泣き聞て流うちかみてそなたは半七と結髪せしその人なる歎縁由を審にいせねき五條にて半七が園花に物かたるを不圖聞てはじめてしりぬしかりとも理もていふときとわが女兒は主君の許許を受けて結びたる縁し又そなたは稚きときも親と親どが結髪したりとも私の縁しなればいとくに後くらしさればとて子まで有人をむじんに去らして心持よしとる鬼々しきわが女兒には侍らすよりそなたを醫のとく半七に齊肩てこれをば側室とし又園花と奈良と浪花と隔つとも契りこかはらぶと半七が只一筆消息きて給はらば昔婆遍散の藥劑に増て本復せん是母が心之又夫典膳が志はさにあらず半六に欺れ可憐女兒を虚象さ半七に妻にして面目を失のみか多もあらぬ愛子をば見殺しにするとも既に半七が在處しれたれば擲擲て年來の恨りを散さずやほいとさきつこは親の心にてはいと理なれどもれも又園花が病着をます一ッなり思ふ事かなはねばこそうき世なれいひがたき事なれき夫の爲と思ひ諦めわれから飽れて半七と離別して給はらば夫典膳が恨りも忽地に散半六のの、盤居も免差によりてと半七が歸參の願ひも稱なん半七を罪なはし半六のの日の光も見せぬも又見するもそなたのころにあるべきなり痛しや半六のの老のくり言世をばかなみ舞々の老征に妖られたる愚者よわが子憎しと罵るは人前ばかりこの七年が程閉籠られていと々々老骸に感ひま自の恨を泣くらし玉ふとぞれもひ死する園花や子ゆゑに感ふ半六ののを助るうへに半七も登跡て忠孝の遺にまも立かへらば孰かそなたを愛さるべき退れぬ契りと思ひたへて別る、苦節は今の世に稀なる女子とばはれ玉は、三方四方の身の脩りそなた親子が朝夕はわらはと女兒が身に飾る四時の衣服を薄くしてもよきに調きて進らすべし私ならぬ私は女兒が可愛さのみに侍らす聞わさ玉へうけ引て玉はれかしどかさ口説は三勝は堪かねし涙の泉むすび果ぬ



妹背の中も胸の中も裂はき苦しき浮世の義理に何とゆふべの相合橋もはれぬわが子と夫にさ
 へ別の橋も膝に落せめて彼處を死とてころどわれどわが身に暇を乱るゝ髪を掻あげて事ごわきて
 かくまてに聞え玉ふころ喜しけれわが身ひとつを退侍りて半七ぬしを世に出し阿翁の直整も許
 され玉ふよすがどもなるならばこれにます僥倖と侍らずといふ顔をつくくとうち暗め「そな
 たなり園花なり菊ひも揃ひし心探容止のみ歎こゝろまで美し過て痛じても一入日来伶俐女子
 にもかゝるどきには愚にかへり理も弄も聽ぬ習俗なるにかくてこそはるく浪速へ來つる
 かひはあれよしや半七と縁は離るゝともけふよりは女兒とも思ひ侍り向にもいひつるとくとま
 れかくまれ朝夕の煙は細くもたてさま侍らんさていふ事のみいひならべてなほ問懸せし事こそ
 あれ半七が浴にて迹を暗せまは忠義の道と聞け玉ふこそこゝろ得ぬもし歸參のよすがどもなる
 べき筋にて侍らずや明白にいひがたき事なりともいと惜と思ふ婿がうへをいかでか人に漏すべ
 きしらし給へと詩間にぞ三勝終に推辭とを得ず七年以前に半七が二郎太夫と謀し合し吉稚丸淫
 樂の悪名を雪ん爲る結髪せし女子なりとはしらすして三勝を奪ひ去直に殺さんとしつるは先
 より白河山にての爲体多賀の僞居信濃路の艱難のさらへ平三か義に勇む脱志に至るまで涙と
 しもに物はたれば敷涙 奪てますく嗟嘆し思ひさや半七の比福なる忠臣にてそなたは又薄命
 の貞婦ならんとはその忠臣も不忠といわれ探真しきも淫婦と罵られ給ふから腹た、しくもあ
 るべけれ前世の悪業にて善人も發跡す才あるも用ひられず一生思ひ屈りて墓なくなるも多か
 めれ世は形なき者侍りとはしりつゝも妹と夫の中をむじん引離るこいぶせくも腹くろさ
 老女どのみな思ひ玉ひそ子をもつものは又人の子の親のこゝろもしらでやは半七が女兒も今流
 はや六才になると歎依人大和にあるならば園花も今ころの子ども二人も産へきにわらはに血

筋はあらずとも婿が家子なりせば見まくはしなぞやかく腹さたなく圍して逢し給はざるその子
 が何ぞあるものぞと怨ずれば三勝は思ひ忘れぬわが子の事そのれ通はといひかけて幾度か目を
 押拭ひ隔て逢しまるらせずと恨玉ふも理なれど通はかなくなり侍りと聞もあへずうち驚
 き「そは何の頃より病侍りし俄頃にはどりのつめしかと問る、程なは胸くるしく病て且く介
 抱し膝の上にて死ならばなれど歎きもかくまでに悔しくはれもはれに故ありて身にもかえがた
 き金ともにも晴昔悪棍の全八蝶九郎に奪ひ去れ相合橋の夜の霜と消侍りさるによつて父平三も
 半日も出てより未だ歸らず子に後れ夫に分る、便なさを察し給へと回答つ、又も袂を絞りける
 ○長町の五味下
 敷浪嘆息し痛し哉只ひとり子を失ひ又や今この哀別離苦心はそをも思ひやるその傾きと慰
 る陪従の童を進らすべしといひかけて縁類に立出外面をさし招は豫てこ、ろや得たりけん一人
 の奴隷橋の戸を細やが引開てかき抱き来る稚兒を三勝の遙に見て且不審み且歎ば、忙しく走
 りより喃れ通喜しや恙なかりしかと思はず荒爾どうろ笑て抱きとれば小躍しやよ母侍りこれ見た
 まへしらぬ叔さ阿婆さまがこの赤い衣三つも四つも縫刺て俄頃には被せか、る木偶さへたまは
 りしと弄賣間に敷浪と醫の處に坐して又三勝に對ひ愛を慰るそなたの陪従にはその女の童
 あますものあらじ寤にこの子の命つよさわが子曾太郎はさのふよりこの長町を徘徊し潜に半七
 が今の爲体を窺ひながらいひ寄るよすがを得ざりしかば仿なくこれを訪ずされば旅寐の徒然
 なるま、に昨夕堀江に赴く折しも相合川のほとりにて闘争起り打あふ太刀の光りにてこれを見
 れば半七と全八なり三勝と稚き女兒が周章見るに痛しく潜にれ通をかき抱き河原傳ひに走り退
 しがはからずも蝶九郎が手裏を負て脱れ來たるに出むひしかば矢應にこれを生割て舊の宿にぬ

て歸りはじめよりこのれ通を半七が子としるから一夜も旅宿にとめてさま／＼にいひ慰めた
 りとぞしかるにわが身もさきに曾太郎が旅宿に到着して縁由を聞遂に橋にかき乗してゐて來
 たりぬこれやこの稚兒をもてその父に換身が愛苦を慰る心ばかりの贈もの納たまといか
 ばかりか徴はしく侍らめと事審かに脱示せば三勝つく／＼と聞て抱きたるれ通を敷浪がほど
 りに押遣りたれん好意は喜しくはれさいづれなりとも養親に離る、の子の薄命大和へ伴なひ
 御身が孫とも見そなはしたまはらば貧しき母が養育にこまえて久後たのもしからん縦へ夫と何
 ともいへ思ひ絶にさ伸脊の契り互代の護身書をこの城の中へ投入れて願事復す産靈の庭燎
 ども見玉へかして誓ひをばり白やかなる項に掛たる護身書の紐かい外せばばらりと落る三味線
 の撥の片割かたへより敷浪これを見て大に怪みやよ侍たまへと押とめ不審やこの撥の片割の
 目が身從來認りありいかにしてか所持したまふもまそなたの乳名ををさんとはははざりまか護
 身書に納たる臍帯のありもやすらしたまへとをがせば三勝はと見かう見ても宣へば轉々
 と思ひ替る像見の二種わらはが乳名ををさんと呼れ丹波太郎といひつる人の女兒にて侍るなり
 さてはれん身はこの年來神に祈願をかけ竭え思ひ暮りま母侍にてましますかうべわれこそ
 は實母なれこそ／＼いかにと携る手にれ通も中へ引寄して果は涙の川の字に親子三人が袖の
 雨淵瀬とかはる歎なり且くして三勝は胸前を撫下し三才の年に別れ奉りて面影は認めねと名告
 あふ時撥を割符と釜々の遺言けふまで存命たまひなばこそ歡びたまはめどかさ口説ば敷浪の
 いと、面なき風情にてしらぬ事として外がましくいひつる事の悔しさよとしばし病を開放る懐
 よりとり出す撥の片割をひとつに合し思ひ出るもいく年ぞや前夫の浪々の便なきま、に三才
 のそなたに乳房を放し夫婦倦ぬ別してわが身は浴へ上りしかして後は夫や子の往方何國とし

ざりささてと養々はなき人の數にさへ入玉ひしかそは何比ぞと問母も問はるゝ女兒ももろどもに胸ふたがりて頼にも應ずさればとよわが父は盲目となりて髪を剃いとさりけなき琵琶法師名も丹波都と更めて伊勢に四年の僑居其處にさへ住まわびつ身の在處を訪んとてわらひを將て首途しはるゝ洛へ上りたまふ是なん死出のやまと路にて山兒の斧に懸れ非命に世を去りたまひたる首尾は箇櫛く半六が事輪係が事奈良と洛の一五一十を物語れば敷浪は已が子に蓋る身の幸福綾や錦に裝ひたて、もこもろの襪襪は襪々しきそなたには遙に劣りて鈍くも缺たる婦の遺夫に別れしその年に洛へ上りぬれ給事せんよをがもなく大和なる續井家の老臣蟻松典膳といふ人の内室世を早う去跡に遺れる稚兒に乳母を索るとき、てなほ乳汁の濁ざるを幸ひに大和へ赴き馳てその家に奉公して守育たる曾太郎なりかくて故郷へ消息しわが身南都にあるよしを夫の家へ告遣りしが夫は近曾女兒を携へ旅たちてより往方しれずとて終に届ぬ東路よりふた、び戻る文卷川のさそふ水まつとはあらぬ典膳ののに不圖思はれ一夜ふた夜の添臥にはやくも有身て産りて子は半七へ妻あてせたる園花なりさればにや世の人に馬士船長となりべいはら、乳乳の人も猛に老臣の後妻に引あげられ安らかに年月を送るにつけても忘れかたきはそなたの専心のたのみは三味線の撥とふた、び合ながら推さより且が女兒を育さしたる恩ある人平三のどやらんに一言の禮謝いられぬ惡因縁姉の夫を、妹に對せんとする羞しらす穢き母がて、ろに似よとて園花にも探を破り半七が事を思ひ絶よといく度かす、めても引承さればせんすべなく又阿容く、と爰へ來て道理先かしてわり口説忠臣烈女の中を離れもへばわれは淫愛に溺れて又愛を失ふ因果は忽地に親子三すぢのいと迫て天道の縛めは割符を合す罰と撥面目なやと身を投臥聲を借す泣夢の脊撫捺る三勝のろを、理ともいひかねて名告めへは園花との

は妹なれども異父兄弟義理あるかたに夫を配偶しこれを菩提の種にして浮世の外の出ともりいなか、く安くはべりなんらば、思ひ、離たりいたくな敷たまひぞと練ればうち點頭女兒としつては半七といよ、縁を離さねば今の夫と半六ののに母子はじめより聊合て迷も奔らしたりなんど、疑ひる、ともいひときがたしよしなやの、尋來て孝と貞とい人なみに勝れし女兒に斯きをまさしむれも又はかばかり愛をましらの狹智恵が仇となりぬる悔しさをせめてお通を將て歸り養育の丹波都ののそなたへの罪滅し園花が爲には姪わがなき後も練かには思はしけふまでまらぬ祖母と叔母に養育る、この子の幸なき春にもならはしひ、に逢しに來すであるべきぞと聞へしらして淋然と涙ぐみ居るお通を引よし實の孫ともまうさりしがこの愛々しさに絆されて他の子のこ、ちばせざりし恩がましく將て來つる鬼嬰々とな思ひたまひぞわが身はそなたの實の祖母さま翌は大和へ伴ひかへり欲といふものは何にされ得さすべきぞ歎ひたまへ嗚乎胸苦しと立わがり孫を引く手もちからなくいひ賺されて稚兒は又木偶を賣ふて來ん母御よ翌と妻々さまを迎に來て玉のれとけなき言の葉の露は袂にたさあまり目送り見かへる親と子が果敢なき別れを告わたる踏行無常の鐘の聲この入相はつねよりも、ろ細さぞいやましぬかくて敷浪は三勝に別を告や、外面へ立出てお通を乗する、橋の内にもよと泣聲をり聞て三勝ともし園花にはあつぬかと思ふものから走り出呼とむる間に奴隷どもはや掻出す、橋に少し後れて敷浪は小首傾け泣顔を見せじと後に引添たり折しもあれ編笠深くまたる武士二人右手左手に引わかれて前より生垣の蔭に竊聞之目今敷浪が歸るを見て或は歎息し或はひとりうち點頭みち引ちがへて立わかれつ往方もまれずなりにけり三勝それには心もとめず遙に彼方を目送れば姿、臙に黄昏て師走七日のけふはからすもあふを別の母親の後影も、が子の顔も見つるは

是を限りと思へば胸も板尻を漏夕月を心めてにふた、び裡へ泣に入る庖厨の障子をさど開く、
 誰そと見れば半七なりそのとき半七は三勝に對ていふやうわれ嚮に背門より歸り入て一五一十
 を審に聞けりみな是過世の警敵が今親子となり同胞となり夫婦となりてこの煩惱をなすにこそ
 父の警居を許されたまはんは本意なれと議を捨て鼻に佞眉豈阿容く、と南都へ歸らんや加之
 相合橋にて全八を殺せし事夜行翁が訴へによりてとや市の正より討手に向らる、と風聲すまか
 りといへども蝶九郎をとり脱したれば遺奴等を賊なりといふにんにも證據なし且己とを得ずとい
 へども厚倉氏いひつるを食てこの七年が程御身とも共世の誓みを致し、刺へ身價を返
 さすばわれは是亂離の人なり何をもち忠義といはれんともかくても半七が死すべき今宵なり
 さればとてこゝにて自害せば平三の係累せん歟彼青山の酒ならで無明の醉を千日寺の草の
 原にて醒にしかず己なん己なんといひも果す走り去らんとする夫の装を三勝の懐に引留先
 手を束て絞首刎られ主親の面を汚んより自殺せんと思ひ定めたまふを理ならずとは思ひ侍ら
 ねどもろ共にとは聞へたまはでなきてかくまで三勝をいふせきものにへたまひつる今宵に迫
 る身の憂は彼處にて聞たまはずやわらはまづこの處にて刃に伏し君が年來の情に答侍りてん
 いひも終らず夫の刀に手を掛れば半七急に押とめげに思ひ、懐ぬ酒ぬ先こそ露をも厭へ夫婦
 が上も厭ふてかひなし今こそ身もわが手にかけて、志を致さすべし只悔しきは白河にて得死
 ずして平三の、誠心を他にするのみ面目なきと身を恨こそ、理なれ三勝いたくうち泣て有身
 の親、親と親は影もあながら何れをいづれと置きがたき恩を仇なる身の終せめて一筆遺さん
 とてかけ硯の蓋反かへし墨を曲れを直なる管の筆をこしろと硯に浸し出居の障子にかくばかり
 「夫木集信實朝臣」

さかまはし身のうき時のかくれ鏡何かは山の奥もゆかしさ
 と書寫せば半七ももろとも筆をとりて

「同集雜十四衣笠内府」

かくれみのうき名をかすかたもなし心お鬼をつくる身なれば

と書どめ筆をすつれば外面より群り來たる捕手の兵士相合橋にて人を殺せし半七を搦捕らん
 爲に向ふたり縛受よといさまきて跳かふるを引被ぎ雄手雌手へ撲地と投るを飛騰て又組着と
 ふり拂ひてと打倒しはらりとと投退て勝たまへとて半七は妻の手を引走り出る月には暗き諸
 打戸わが門近く歸り來る平三直とゆきちがひ見かへりてそは三勝歎嗚のあひあらずやと問隙
 も荒男の兵士等が直に半七遣らじと追蒐出先み、むを平三が足を飛きて丁と蹴倒し續て懸
 るをとつて引布こ、をかまはずにとゆふまくれ應もやらす掌を合しふし拜みつ、妹と夫が又手
 をとりて死ふゆく今宵一夜を千日の墓なきものは命なり

○千日寺の極

さて半七三勝は往來絶るを待候に彼此にて夜を深し涙の雨にはさして行かひこそなけれ夜
 の傘しばし人前をまのへども骨は誰かひらはれん竹田伏見も外に見て只後髪ひけそりの町を
 雄手に反畝道毎に星の影氷る身は捨果てなきものどれもへき寒さ北風は追れて西をたのむか
 な師走七日を亡日ととさのふまでもしらすりし跡に殘せし稚兒の父と母とど啼ならば春いかな
 らん浪花津の梅が笠屋と鏡虫の親の心は鬼ならで黄金も玉も何かせんにます寶なきものをそ
 れさへ今は思ひ絶て喜怒哀樂もみな夢の浮世としれどまだ醒ぬ間酒煮賣夜商人わがた先ならぬ
 と寒念佛の鉦の音さへ何となく耳あたらたまる霜の聲無常迅速東の間に千日墓に着にけり時に永

藤某の年冬十二月七日なりかくて半七三勝は立ならべたる塔の間なる枯柳の下に坐を占なるなかに覺期を究たれば夫婦物いふべうもあらで三勝が十遍ばかり唱る念佛の聲を心めて半七やがて闇に晃く腰の刀を抜となせば墳の後に又二人苦痛の稱名今般どもば夫婦之これを聞て大に怪むわれに等しく又こゝにて自殺する人やあるやは後れトとて半七がふたしび及ぶより揚ればやよしはし侍たまへと呼びしめつ、厚倉二郎太夫友春は蟻松曾太郎と、もに蝶九郎に索を掛けてこれを可介等に引し飛が如くに走り来る跡に續て平三はれ通を背負ひ園花を扶掖、追放來て手にくさま出す桃灯の火光は照らす墳の後に思ひもかけず敷返と半六は間五七尺を隔て自害し半七等を見て忽地に絆切たり人みなこの景迹を見て大に驚き夫婦兄弟幼きれ通も共ふよ、と泣或は悲み或は呆れこはそもいかにとて慌忙つ、走り寄抱き起してさまぐに勸れども今いそや救ふべくもあらずと見れば傍なる石塔に二枚の遺書を貼らきたりそのとき二郎太夫すもみ對て半七等いふやう、各の哀傷いと理なれとつらくこの遺書の趣きを見るも赤根半六は昔榮利を謀りて木精の崇を屑とせず遂に米谷なる老楠樹を伐りしかば忽地、丹波都を殺し更に約にそむきて三勝を失ひ蟻松氏と婚縁を締したるとはみづから作る孽なりとは曉ながら近曾半七は三勝を將て長川に活業すと傳へ聞いよ、憤りに堪ずしてその虚實をしらん爲に昨夕潜に五條の家を潜び出嚮に敷返と三勝と親子の名告せし始終を竊聞してはトめて夫婦の忠孝心烈をまつて懺悔後悔しこゝも來つて自殺するものなり聞くと三條河原にて二人の悪棍を殺し又昨夜相合橋にて全八を殺せしもの半六なりと市の正へ訴へ恩人笠松平三とわが子半七を救ひたまはるべしとあり又敷返の遺書に二人の女兒が心探の比なきにふかく蓋且三勝が死を究たる氣色を請しわが身これに先立て自害す願くはわが小供等必死を思ひとゞま

り厚倉のしわが夫を諫て是彼の身のねさまりをよきに計はしたまへかしかへすくも孫のれ通がと不便なり典膳どの、年來の恩愛こころも恥ると多くてこゝには中遺さずとありかりれば親と親といひあはさねどその身を殺して子を救ふ慈悲の符節を合したるが如しかならずしも死すべからず又いたく悔歎くべからず時なるかな君侯近曾二郎太夫を召さして宣ふとあり赤根半七はわが家第一番の忠臣なり彼吉稚丸に従ひて浴にありける日主の淫樂を諫て遠離らるゝといへどもふかくこれを匿しその身病ありと稱して五條の旅館に引退き絶て口外へ漏さしとぞわれその比仄にこの一條を聞りより彼もの舞々を將て逐電走つる事亦是主の爲にすとは猜したれど家の法度は私より更改がたければ且忠臣を遠離たる事いと不便なり今とはや夥の年月を経たれば罪を宥べき時到来り汝潜に半七が在家を索わが志を告て伴ひ來れと仰せしかば志のびて浪花に赴きまづ問人をもて窺之するに御邊三勝が身價をわれに返さんとするにその金三、兩を遣ひへらしていたく苦心するよしを聞假毛を買假托て件の金を贈りしはわが寸志なるを憎べし全八蝶九郎是を奪ひ去れりとぞまかるに蟻松曾太郎のこからずも相合橋にて轉落つ、脱去らんとする蝶九郎を生拘運奴が盜ところの金は舊の如くにてわが手に返れりかくて蝶九郎が白狀によつて全八が隠匿いよ、發覺たれば證迹としてこの蝶九郎を市の正へ進らせ御邊の罪狀を剛べきよし曾太郎に相語只今彼處へ引せんとす寔に天の彰々たる事懸らざる鏡の如し悪人終に亡びて忠臣ふたしび天日を見る誰か快しとせざらんやと事密かに説示せば曾太郎も又いふやう、某浪速へ來りし事は半七の妹が心探をしらせんとてなるにわが母猶もどなく思ひてわりなく園花を橋に乗してこの地に來たり不思議に年來の本意を遂て離別の女兒三勝のに再會すといへども却てその心烈に蓋けん旅宿へは歸らず中途より往方しれざるよし後

あゆめ園花も母に伴はれて長町に赴き、橋の中にありまかきわが母耻て三勝ののにはせす彼
 いたづらにれ通を將て旅宿に立かへり縁故を某に物かたる折しも母の從者等走りかへりて如此
 くなり告よりてわが兄弟ふかく怪み園花は病苦を忍びれ通を將て彼此を索る折しもはから
 すして笠松平三に名告あひゆ邊も又三勝のの二首の古歌を書遺し自殺せんとて出たまひぬる
 よしを聞てますし、周章しやがてもる共にこゝに索來れりといふに平三も又説を一過理を竭
 して自害をせしめしかば三勝園花はさらなり半七は親の慈愛のかくまでなるに君恩また黙止が
 たくて紅涙袖を絞あへず死後れたる悔しさよとてかさ口説ぬ浩處に編笠ふかくしたる武士一
 人白揚の蔭よりす、み出て笠を脱捨るを見れば蟻松典膳なりこのとき典膳と衆人に對ていふや
 うすべてこの件の、禍を醸せし事半六一個の、僕のみならず日れも又當初君に中えずしめて楠
 を伐らしたる崇を惹るにや愛に溺れてよろつ私したる罪ありしかるに今朝敷浪が園花を將て天
 滿の天神へ詣るよしをいふに疑はしき處あればわれも又潜に奈良を出妻の迹を跟てそのゆく處
 を窺ひ嚮に三勝と敷浪が始終の物がたりを窺聞きて年來の、憤りも消五十餘年の非をえりぬさ
 てこそそのときわれに等しく理の容子を張ひたるものは半六にてありける歟彼も是も皆わが爲の
 善智識なり乘り恩入三無爲一報し恩者といへり願くは友春の典膳が致仕の事をよき執したまは
 るべしと述をばり刀を抜て直に、髪を剪捨みづから夢幻齋と名告らんといふ二郎太夫聞てふか
 く嗟嘆し淳子夢が蟻宮の榮花も思へば赤根が南柯夢蟻に象る蟻松氏の發心悟道殊勝なりしから
 ばきのふわが買たる簀鬘を三勝が頭髻とし又假毛を半七が、髻に換父と母との塚に築籠風雪信
 女月照信士と法號し赤根半六と云商人簀屋三勝といふ舞々ど情死せしと世に傳なば郎君のねん
 恨に代たるはじめの忠義もいたづらならず親の枉死に從はざる孝子の道も虧べららず再世の

あゆめ園花も母に伴はれて長町に赴き、橋の中にありまかきわが母耻て三勝ののにはせす彼
 いたづらにれ通を將て旅宿に立かへり縁故を某に物かたる折しも母の從者等走りかへりて如此
 くなり告よりてわが兄弟ふかく怪み園花は病苦を忍びれ通を將て彼此を索る折しもはから
 すして笠松平三に名告あひゆ邊も又三勝のの二首の古歌を書遺し自殺せんとて出たまひぬる
 よしを聞てますし、周章しやがてもる共にこゝに索來れりといふに平三も又説を一過理を竭
 して自害をせしめしかば三勝園花はさらなり半七は親の慈愛のかくまでなるに君恩また黙止が
 たくて紅涙袖を絞あへず死後れたる悔しさよとてかさ口説ぬ浩處に編笠ふかくしたる武士一
 人白揚の蔭よりす、み出て笠を脱捨るを見れば蟻松典膳なりこのとき典膳と衆人に對ていふや
 うすべてこの件の、禍を醸せし事半六一個の、僕のみならず日れも又當初君に中えずしめて楠
 を伐らしたる崇を惹るにや愛に溺れてよろつ私したる罪ありしかるに今朝敷浪が園花を將て天
 滿の天神へ詣るよしをいふに疑はしき處あればわれも又潜に奈良を出妻の迹を跟てそのゆく處
 を窺ひ嚮に三勝と敷浪が始終の物がたりを窺聞きて年來の、憤りも消五十餘年の非をえりぬさ
 てこそそのときわれに等しく理の容子を張ひたるものは半六にてありける歟彼も是も皆わが爲の
 善智識なり乘り恩入三無爲一報し恩者といへり願くは友春の典膳が致仕の事をよき執したまは
 るべしと述をばり刀を抜て直に、髪を剪捨みづから夢幻齋と名告らんといふ二郎太夫聞てふか
 く嗟嘆し淳子夢が蟻宮の榮花も思へば赤根が南柯夢蟻に象る蟻松氏の發心悟道殊勝なりしから
 ばきのふわが買たる簀鬘を三勝が頭髻とし又假毛を半七が、髻に換父と母との塚に築籠風雪信
 女月照信士と法號し赤根半六と云商人簀屋三勝といふ舞々ど情死せしと世に傳なば郎君のねん
 恨に代たるはじめの忠義もいたづらならず親の枉死に從はざる孝子の道も虧べららず再世の

夫婦君父の命に従ひ奈良へ歸參して家を興し忠孝を全うせば吾黨の一大怪事ならんと應けり時
 に典膳又平三に對ひ其許は舊梨園雜劇中の人なりと聞しが必ざまは武士も及ざる處多しわが女
 兒園花久しく夫に置去せられて歸どころなしゆ邊今より彼を養ひて女兒としたまはらばわが女
 三勝を養ひ曾太郎が姉として更に半七に妻あはすべししかるときは三勝は半七が正室なり園花
 又半七が側室となるも姉妹にまて姉妹にあらず誰かこれを議るべきこの事承引たまへかま
 へば平三歎んで一義にも及ばず絆既に團圓にたさまりぬさる程半七曾太郎三勝園花は兄弟
 親族の名對面して歎の中、歎びを述父母の亡骸を千日寺に葬りて追善の佛事町噂に修行しまか
 して後皆うちつれたちて南都へ立歸りぬ又曾太郎は市の正へ縁故を誓に訴へ蝶九郎を進らせし
 かば積惡脱がたくて蝶九郎は首を刎られ又笠松平三は巖に脚平足平を殺したれども彼二人は隠
 なき惡棍なるによつて死をもてその罪を贖ふに及ばず永く放免を蒙りやがて續井家に召れて祿
 五十貫を給はり赤根半六に代りて五條の村主をうけたまはり半七は蟻松典膳に代りて家老職を
 うけたまはり職祿とも肩を比るものなしこれによりて三勝を妻とし園花を側室とし厚倉と共
 に一國の成敗をどり行ふに聊かも、私なかりしかば君家ますし、繁昌して四民すべて父母の思
 ひをなさずといふ事なま是より先續井順昭父子は半七三勝等が忠孝をふかく嘆賞して懇切にこ
 れを勞ひ厚倉以下の家臣を呼び集ていふやう抑、この件の緣故を考ふるにわれ過ちて驕奢に耽
 り怪有の良材を索て米谷の楠を伐らし無益の茶亭を造りて樂みを民どもにせそ、をもて
 嫡男吉稚質弱多病なりき且彼が養生の爲み浴に遊ぶに至て忽地家の艱出奈なんどまつる事とな
 木精の崇なりけん設半七二郎太夫なかりせば父子安然として今日の歡會をいたすとありがた
 あるべしと頻に慚愧し俄に彼茶亭を毀て長く節儉を事とせしかば上下安堵の思ひをなまつて、

夫婦君父の命に従ひ奈良へ歸參して家を興し忠孝を全うせば吾黨の一大怪事ならんと應けり時
 に典膳又平三に對ひ其許は舊梨園雜劇中の人なりと聞しが必ざまは武士も及ざる處多しわが女
 兒園花久しく夫に置去せられて歸どころなしゆ邊今より彼を養ひて女兒としたまはらばわが女
 三勝を養ひ曾太郎が姉として更に半七に妻あはすべししかるときは三勝は半七が正室なり園花
 又半七が側室となるも姉妹にまて姉妹にあらず誰かこれを議るべきこの事承引たまへかま
 へば平三歎んで一義にも及ばず絆既に團圓にたさまりぬさる程半七曾太郎三勝園花は兄弟
 親族の名對面して歎の中、歎びを述父母の亡骸を千日寺に葬りて追善の佛事町噂に修行しまか
 して後皆うちつれたちて南都へ立歸りぬ又曾太郎は市の正へ縁故を誓に訴へ蝶九郎を進らせし
 かば積惡脱がたくて蝶九郎は首を刎られ又笠松平三は巖に脚平足平を殺したれども彼二人は隠
 なき惡棍なるによつて死をもてその罪を贖ふに及ばず永く放免を蒙りやがて續井家に召れて祿
 五十貫を給はり赤根半六に代りて五條の村主をうけたまはり半七は蟻松典膳に代りて家老職を
 うけたまはり職祿とも肩を比るものなしこれによりて三勝を妻とし園花を側室とし厚倉と共
 に一國の成敗をどり行ふに聊かも、私なかりしかば君家ますし、繁昌して四民すべて父母の思
 ひをなさずといふ事なま是より先續井順昭父子は半七三勝等が忠孝をふかく嘆賞して懇切にこ
 れを勞ひ厚倉以下の家臣を呼び集ていふやう抑、この件の緣故を考ふるにわれ過ちて驕奢に耽
 り怪有の良材を索て米谷の楠を伐らし無益の茶亭を造りて樂みを民どもにせそ、をもて
 嫡男吉稚質弱多病なりき且彼が養生の爲み浴に遊ぶに至て忽地家の艱出奈なんどまつる事とな
 木精の崇なりけん設半七二郎太夫なかりせば父子安然として今日の歡會をいたすとありがた
 あるべしと頻に慚愧し俄に彼茶亭を毀て長く節儉を事とせしかば上下安堵の思ひをなまつて、

に至て半七が浴にて吉稚丸に苦讓せしど却て全八蝶九郎等に讒言せられ久しく君邊を遠ざけらる、といへどもなほ郎君の懐ちを世にまらせしどて病によつて五條に退き保養すといひ拵へ後三勝平三等にも實を告げたまへ一トたびも口外せざりし事やし聞へこの一條にてその忠臣思ひやらる、とて時の人稱賛せざるいなしされば半三と相通を養ひ後これに婿を招て家を嗣し半七又子ども夥を儲て世々續井家に仕けるとす

馬琴按るに本草綱目卷の三十四木類下に楠樟を並出すといへども別種なりわが邦には楠樟ともあらずと訓すこれを一種とするが如し又按ずるに搜神記に吳の時敵叔大樟樹を伐るに血出て物あり人の面狗身なり敵叔がいふこれを彭侯と名つくと乃ち烹てこれを食ふに味狗の如しといへり是則ち樟樹に木精ありし一證とすべし楠も樟も突て大木多き俳諧師其角が楠の天井に題する發句あり作得てよし

八疊の楠の板間を漏るしぐれ

又半七三勝が事世にはさまくにいふゆり或はいふ笠屋三勝は足利家の時の女伎なり又千日寺にて情婦せし三勝は遙に後の事にて美濃屋何しが女兒にさんと呼れたる淫婦なり今なや半七が遺書といふものあり好事のもの益々傳寫すれもふ予が話説する續井家臣赤根半七と大和五條の商人半七が事とよく似たりしかれども時代相距と適にして同名異人なりとあるべし玄峯集を按ずるに俳諧師嵐雪ある年の秋瀧速に遊びてみのや茜が夢の跡を訪ふに嵐雪月照と石の塔婆に彫入たりあるまじき事ならぬと思ひがけざりければ

夢によく似たる夢かな夢夢り

口説たるよし見の(借らて)何の處もふ事と記す(今法華寺)難波新地にあり土俗のいふ

千日寺これなり)に遺るどころの半七ふさんが古墳といふもの金見羅堂のこなた向て左側ありれど六字の名號のみと彫着たり彼ものし事を傀儡棚の戯曲に作りたるもの予が眼を過る所すべて四本あり又彼等が遺書常初人口に贈灸せしにや昵竹といふものに三勝半七が紀念れくりかき置等の曲子あり無益の辨なれど只その概略を以ふのみ

作者馬琴この書を稿じをころの夕燈を掲案を拵しひとり嘆きて云くむかし信濃前司行長入道の平家物語は原諦せんとて作りたるを後の人とよくも見されば只尋常の軍記のと思ふゆり今わが楠柯夢の讀せんとして作りたれど閱者その戯曲めきたるを笑ふもあるべし才の長短と物の巧拙は且くいはず所爲に雅俗あり又流行あり夫流行は人あむる歟將我にあり歟われいまだこれをまらざる差失

明治廿九年四月十八日印刷
同年同月廿六日發行

發行 者 刻

市 川 路 周

神田區佐久間町三丁目
三十八番地

印刷 者

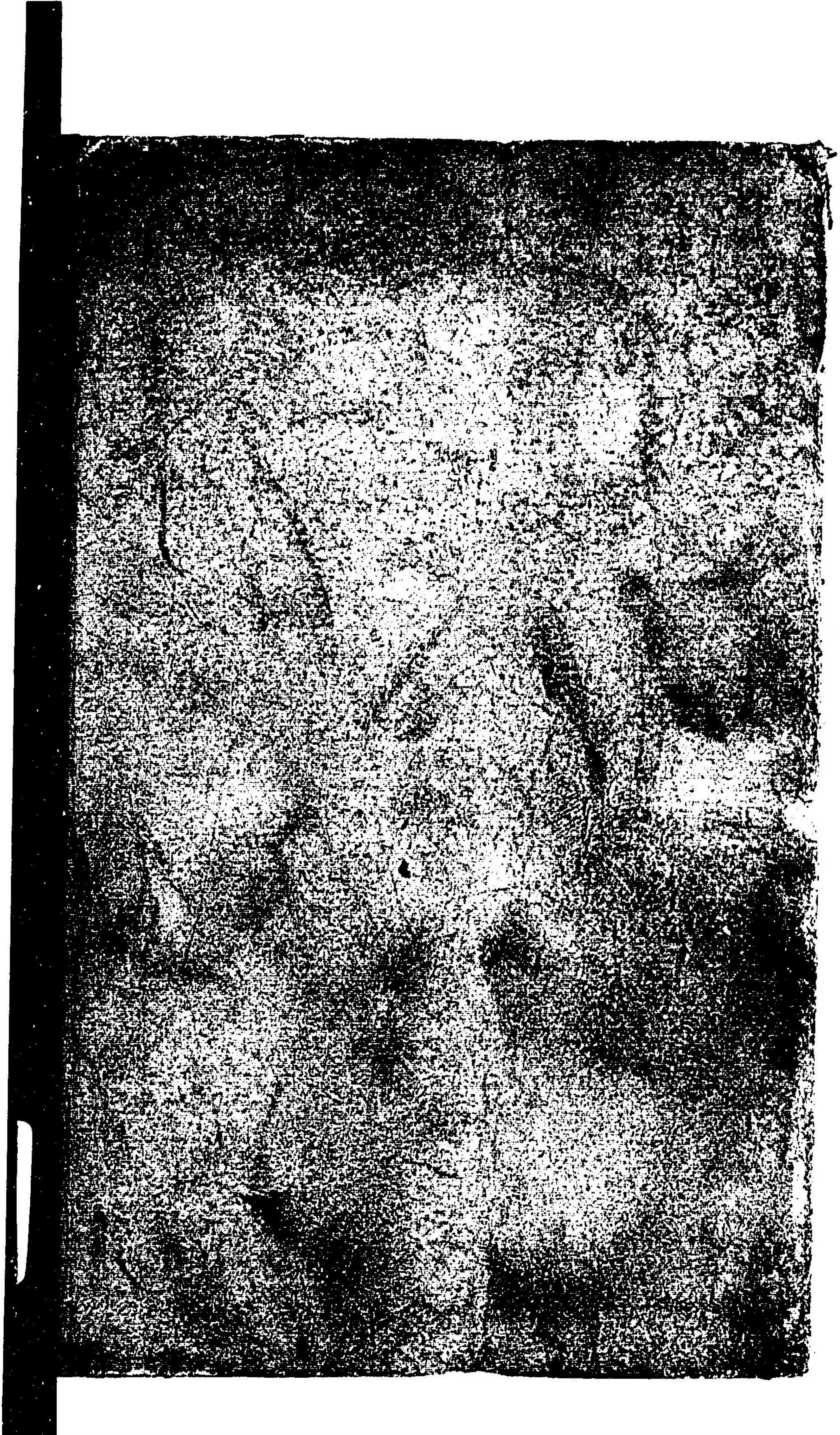
大 塚 沃 美

神田區柳原河岸
第十四號地

發行 所

文 事 堂

神田區佐久間町三丁目
三十八番地





089367-000-0

特11-888

三七全伝楠柯夢

滝沢 馬琴/著

M29

DBM-0857

